

二次元

『目覚めると』抱き枕カバーは本誌で注文受付中!

cover illustration by
カガミ

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌



別冊
付録

水坂早希×りゅうまき×大海

今号も
小説一冊
付き!

大好評連載&読み切り小説

大人気美少女ゲームが連載小説化!

対魔忍アサギ3

~淫獄都市の雌忍~

Kyphosus×電詔×Anime LiLiTH

【白百合】黒幕裏コンシ期待の新作!

紅の盗賊姫レイア

筑摩十幸×助三郎

毎号好評!分鏡小説

二階堂安芸×辻風

大熊狸喜×池田靖宏

愛枝直×A.S.ヘルメス

空蝉×牡丹

酒井仁×バイオレットシット

上田ながの×ジェット世渡り

上田ながの×広輪屈

大人気えっちマンガ
&4コママンガ

魔法少女静流

ひぐちいさみ

ぼふえ / おおたけし

助三郎 / 天海雪乃

kupala / 嘉納あいら

カラーピンナップポスター

うるし原智志

カガミ

今号の特集

悪堕ち

表紙&ピンナップ
テレホンカード
応募者全員
サービス

vol.69

2013

04

DIGITAL
EDITION
デジタル版

立ち読み版

捜査官涼風真矢香

小説 上田ながの

イラスト ジェット世渡り

「……こちら……例のものになります」

「ふむ、確かに……」

街外れの廃工場。スーツ姿の二人の男がテーブルを挟んで向かい合っている。テーブルの上には一つのアタッシュケース。その中には袋詰めにした白いカプセルがたつぷりと詰められていた。ここ数年急激に若者達の間で流行り始めた新型ドラッグ——サキユバスである。

一見するとただの風邪薬のようにしか見えない薬であるが、これを一粒でも口にすると最高の快楽を味わえるという。感覚が研ぎ澄まされ鋭敏になり、あらゆる苦痛を快楽に変換する。一粒だけでこの世の天国を味わうことができる。とまでいわれる品だ。ただし、薬の効果が切れると、接続時間に得た快楽の分まで苦痛を味わうことになる。

この苦痛を和らげる為、人は新たなサキユバスを求めようになる。依存性は覚醒剤よりも上だといえるだろう。

「では……料金は？」

サキユバスの確認を終えた男が、引き替えとしてバッグをテーブルの上に置く。

瞬間——。

「そこまでよ！」

凛とした声が廃工場内に響き渡った。

「なんだっ!？」

「くそっ!」

男達の視線が同時に向けられる。向けられた先には——一人の女が立っていた。

ショートカットの女。スーツを身に着けた胸元は大きく膨らんでいる。強い意志の光が籠もった瞳が、真つ直ぐ男達を捉えた。

「特別麻薬取り締まり捜査官涼風真矢香よ」

女——真矢香は男達の殺気さえ込められた視線を受けながら、口元に笑みさえ浮かべつつ、腰から銃を抜いて構える。

「お、お前達を麻薬取締法違反の現行犯で逮捕する」これに続くように真矢香の背後から、一人の男がひよこりと顔を出し、少し震え声で叫んだ。真矢香の後輩である新人捜査官氷室大智である。

(緊張しすぎよ氷室君)

心の中で後輩を宥めつつ、油断なく男達を睨む。

「両手を挙げて頭の後ろで組みなさい」

「……麻取りか……くく、思っていた以上に楽しめ

そうな獲物がかかったな」

だが男達は怯んだ様子を見せない。それどころか

楽しそうに笑った。

(どういうこと?)

覚えたイヤな予感当たる。

パチンツと男の一人が指を鳴らした途端、唐突に銃を構えた男達が周囲に現れた。その数、数十人は

くだらない。

「なっ——こ、これって……」

「捜査情報が漏れてた？」

「まあそういうことだ。というわけで、手を挙げる

のはお前達の方だ」

「……さて、それはどうかしらね」

「なに？」

刹那——真矢香は動く。銃口を近くにいた男の一人に向け、容赦なく撃った。更に二発、三発と間髪入れることなく銃撃を行う。まったく躊躇ない行動に、敵の動きは一瞬遅れた。

「今のうちよ氷室君! 逃げなさいっ!!」

「せ、先輩っ!」

「さあ、早くっ!! 貴女が応援を呼んでくるの」

生まれる隙を見逃さない。

「……わ、分かりました! 必ず戻ってきますっ!」

一瞬躊躇はあったものの、すぐに大智は工場から逃げ出した。

「というわけ……。私は降参」

大智の逃亡を確認すると、あっさりと銃を捨てる。

「……なかなかの度胸だな」

「これくらいでないで女で刑事なんてやってらんな

いの。で、どうする? 私を拷問でもする?」

余裕の表情さえ真矢香は浮かべた。

「……ふふ、拷問か……。それも楽しそうだが……

こういうのはどうだ?」

そういつて笑うと、男は一本の注射器を取り出した。中にはたつぷりと半透明の液体が詰まっている。

「……何よそれは……」

「サキユバスの原液だよ。こいつをお前に注射して

やる。最高の天国が見れるぞ」

「——な」

流星に顔色が変わる。

サキユバスの原液——そんなものを直接注射など

されたら……。

反射的に逃げだそうとしたが、真矢香の身体は男

達によって拘束されてしまう。

「ジッとしてろよ」

「……あ……く、来るなっ! こ、こっちに来るん

じゃない! そんなもの……わ、私には通用しない

わよ!!」

「くくく、本当に通用しないのか……たっぷり試し

てやるよ」

男の瞳が嬉しそうに細められた。

「やっ! いやっ! 止めなさいっ! 止める!

やめ——あっ! ああああ」



魔法天使ティンクルベリー

小説：上田ながの

イラスト：広輪 正

「うわ〜助けてくれ〜!」

街中に響く悲鳴。

人々は今、異世界から現れた地球侵略を狙う邪悪な存在ダークネスによって襲われていた。絶望を撒き散らす怪物が、次々と人々を喰らっていく。

「待ちなさいっ!」

その悲鳴を切り裂くように、涼やかな声が響き渡った。

「誰だあ?」

人々を襲っていたダークネスが動きを止める。

「……ボク? 聞いて驚け悪い奴! ボクの名前はティンクルベリー! 悪を滅ぼす伝説の光の天使。魔法天使ティンクルベリーだ!!」

名乗ったのは一人の少女。ピンク色のバトルドレスに身を包んだ、腰まで届くほど長く、絹のように美しい金色の髪の一人の少女——魔法天使ティンクルベリーである。

「ティンクルベリーだと? 貴様が……我々ダークネスの計画をこごとく邪魔している魔法天使か」

「そういうこと! 悪いけど、キミの悪事もこまめでだよ!」

魔法の杖ティンクルロッドをピシッとダークネスに向け、ティンクルベリーはポーズを決めた。

「やった! ティンクルベリーだ! 魔法天使だ!」

「助かった。俺達は助かったんだあ」

途端に人々が歓声を上げる。

「そうだよ。ボクが来たからにはみんなもう大丈夫。

安心してね!」

パチンツとウインク。☆のマークが飛び、これを受けた人々がメロメロになった。

「安心だと? 残念。お前達はここで絶望するんだよ。よくぞ出てきてくれたティンクルベリー!」

けれどダークネスは怯まない。それどころか嬉しそうに笑う。

「どういうこと?」

予想外の反応に首を傾げた瞬間、唐突にダークネスの肉体が黒い霧のようなものに変化し、ティンクルベリーの肉体を包み込んできた。

「な、何これ! くっ、ボクの……ボクの身体の中に入ってくる——うあっ、うああああ」

そのまま口や鼻から敵が体内に侵入してくる。ティンクルベリーよ。お前の心を闇に変えてくれるわ。

「そんな……そんなこと……ボクは……ボクは絶対に負けない。お前なんか——お前なんかにい!」

心が侵食される。
(駄目だ。負けちゃ駄目だ!)

必死にティンクルベリーは自分自身に言い聞かせるのだが、純白の心が闇の色に染まるまでにさほどの時間が必要なかった。
そして——。

「……ふふん」

ピンクの衣装が闇の色に染まった。口元にはこれまでの無邪気なものとは違う、どこか妖艶な笑みが浮かぶ。

「てい、ティンクルベリー? 大丈夫?」
状況がまるで把握できないといった様子で、街の人々が首を傾げた。

「……ふふ、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。お礼……しなくちゃね♥」

「お、お礼?」

「うん。たつぷり……たつぷり気持ちよくしてあげるね」

邪悪な笑みを魔法天使は浮かべると、躊躇なく男性の前にしゃがみ込み、その股間部に手を伸ばし、ジッパーを下ろす。

「え? あ、ちよっ——」

「恥ずかしがらなくてもイイよ♥」

ニッコリ笑いながら、ティンクルベリーは手を伸ばしペニスを掴むと、躊躇なくこれを咥えた。

「んもっ、もっもっ……。んふう……♥ ろう? きもひいいかにや? んちゅぼっ、ちゅぼっちゅぼちゅぼお……。んじゅっ、じゅるるるるるる」

ただ咥えるだけではない。唇を窄め、肉茎を締め上げつつ、顔を前後に振り、下品な音を奏でてペニスを吸引する。

「ちよっ、あ、だ、駄目だよ。こんなこといけないよティンクルベリー」

「いけなくなんかにやいよ。ほりや、きもひいいんれひよ? んじゅぼっんじゅぼっんじゅぼっ!」

「くっ、うっうあああっ! 射精る! そんなにされたら射精ちやうよ!」

「らひていいよ。んぼんぼんぼ……んんん」

口腔で肉棒が硬度を増していくのに合わせて、口淫をより激しいものへと変えていく。亀頭が爆発しそうな程に膨れ上がり——。

「で、射精るっ!」

ぶびゅぶっ! どびゅっ! びゅぶるるっ!

「んっぶ! むびゅっ! むっむっ……むふー♥ れ、れつてる。あちゅいのが、ボクのおくひのなっはに……んぎゅっ、んじゅっ——んじゅるるるる」

ドクツドクツと痙攣しながら、濃厚な牡汁が口腔に放たれる。ティンクルベリーはうっとりと瞳を細めながら、それをすべて受け止め——。

「んごきゅっ! んごきゅっ……ごきゅっごきゅっ

「んごきゅっ! んごきゅっ……ごきゅっごきゅっ





対魔忍たちに襲いかかる、
新たな淫虐調教

Anime LILITHの超強力作、早くも小説化！

対魔忍

NEAR FUTURE KUNOICHI ADVENTURE
TAIMANIN ASAGI 3

アサギ
～淫獄都市の雌～

第一話 魔虐のはじまり

小説
NOVEL

キヲオサス
Kyphosus

挿絵
ILLUSTRATION

りんどう
龍胆

原作
ORIGINAL

Anime LILITH

【1】

その日の夜遅く、日本中のテレビ、ネット放送、その他あらゆるメディアで、戒厳令が宣言された。

「……ただいまを持ちまして、『反国家分裂法』に基づく戒厳を布告するものであります。議会の一時停止、マスメディア及びネットの統制、ならびに自衛軍統帥権の首相への一時移譲が行われます。また、国民の皆様におかれましては、無許可での外出ならびに外部連絡をなさらぬようお願い申し上げます。これらに違反された場合、生命の安全を保証することができません……」

そう呼びかけているのは首相の朝井だ。スーツではなく作業服姿である。

やがて画面は、ざらざらとノイズの乗った撮影動画に切り替わった。先刻発生したという首相官邸襲撃事件の映像だった。

破壊された建物の室内に、どうやら襲撃の主犯らしき一人の若い女性が立っている。均整の取れた肢体をびつたりしたスーツに包み、豊かな胸の膨らみと引き締まった腰が見て取れる。

彼女が一般人でないことは、滑らかな曲面構成の装甲で覆われた腕に、ざらざらと輝く凶悪なブレードを装備していることで明らかだった。

と、彼女は栗色の長い髪を揺らして振り向いた。切りそろえられた前髪の下、気難しそうに眉がっつき上がり、青みがかった鋭い瞳がカメラを射抜く。

彼女は形の良い唇を動かして何事かを囁くと、疾風のように駆け出し、画面から消え去ってしまった。動画はそこで終了する。

「……先刻申し上げました通り、政府下の一組織がクーデターを企図して首相官邸を襲撃し、野々村官房長官及び護衛三名が尊い生命を奪われました。現在、自衛軍が事態の收拾に当たっているところでありますが、それまでは……」

【2】

その放送を、静まり返った職員室のテレビで二人の女性が見ていた。二人ともびつたりとした戦闘服を着て、手の届く場所に武器を置いている。

「今の見た、ムッチちゃん!? 今映ってたの、アスカちゃんだよ! 何で、首相官邸襲撃なんて……もしかして、浩介の事と関係あるの!」

放送されていた襲撃犯の姿を見て、片方の女性が驚いていた。童顔気味の顔立ちに、つり上がった目、明るい色のショートヘアを撥ねさせた彼女は、どこか猫のような印象がある。黒を基調とした戦闘服は全身に密着するレオタードタイプで、たわわな胸とよく肉づいた腰がはつきりと見て取れる。

「どうだろうな。それより今はこっちがきな臭いぞ、さくら。先刻から五車町の外と連絡が取れない。首相が言ってるクーデター組織って、やっぱり……」

携帯電話を机に置きながら、もう一人の女性が言葉を返す。ストレートロングの黒髪をポニーテールにした彼女は身長が高く、きりりと引き締まった目鼻立ちもあって、女武者といった風情だ。ボディコン型の白い戦闘服の裾から覗く太腿には、くつきりと筋肉が浮かび上がっている。

「分かってるよ。五車学園を特殊部隊っぽい連中が沢山取り巻いているもん。隠身してるつもりだろうけど、あの程度じゃ、さくらには丸見えだよ」

悪戯な猫のように、唇をつり上げてにっこりと笑う。

太古より、人と魔は、光の世界と闇の世界とにそれぞれ住み分け、暗黙のルールによりまがりなりに不干渉を保ってきた。人が魔と結びつけば、その欲望が際限なく増幅されて、世界の秩序に破滅的な影響をもたらしかねないからだ。

それ故、正道を歩まんとする人々は破局を回避し、あるべき秩序を回復するための力を産み出した。魔

に対抗しうる力を備えた者達を組織して、外道の跳梁を抑え込もうとしてきたのだ。歴史の表舞台には決して現れないが、この国でも千年以上の昔から、人と魔の間の秩序を守るための異能者の集団「対魔忍」が組織されてきた。

だが、二十一世紀も後半にさしかかった現在、形勢は逆転しようとしている。

「人を守る筈の私達対魔忍が、クーデター軍扱い……人魔結託の走狗どもに掌握されてしまった政府と自衛軍が、今の私達の敵ということか。しかも今はアサギ様も兄様も、学園にいないし……」

ここ五車学園は、通常の学園ではない。その所在する五車町は、古来より異能の血を引く者達の住む隠れ里であり、現在も地図に記されていない秘匿都市である。五車学園とは、異能者の子女を集めた、対魔忍の養成機関なのだ。

そしてこの二人の女性、さくらと、ムッチちゃんとは、対魔忍の中でも屈指の実力者であるとともに、五車学園の教師でもあった。

「でも学生達を逃がすのは間に合ったじゃん。あとは一暴れするだけだよ。得意でしょ。そういうの」

さくらは喋りながら視線を廊下に向ける。特殊部隊の先鋒が複数、棟内に侵入してきたのを感じたのだ。それは、殺しのプロ特有の乾いた殺気だった。

「人を脳みそ筋肉みたくに言うんじゃない」

紫は得物の巨大戦斧を手を取った。並の人間では、成人男性でも持ち上げることすら難しい代物だ。

「この殺気、どうもまともな兵隊さんじゃなさそう。しょっちゅう人を殺すようなお仕事してるみたいだから、全然遠慮しなくていいっぽいよ」

「ふん。最初から手加減などするつもりはない。こちらから行くぞ、さくら」

「放送は見たな、アサギ」

「ええ。今回は完全に後手に回ったわね」

広々とした部屋の大きな机の前に、一人の美女が立って、卓上の端末を見つめている。歳の頃は二十代の終わりくらいであろうか。真つすぐな黒髪を腰の上まで垂らし、全身を暗紫色のびつたりした戦闘服で覆っている。胸と腰は女性らしく豊かに盛り上がっているが、注意して観察すれば、その下には鍛え抜かれた筋肉が束となっているのが見えるだろう。アーモンド型の整った顔は引き締まり、つり上がった双眸は強く鋭い光を放つ。戦いを予感してか、頬は微かに赤い。

彼女が、古来よりこの国の天魔秩序を守ってきた戦闘集団、対魔忍の頭領、井河アサギだった。

人間離れた対魔忍達の中でも頭抜けた能力を備え、数多くの魔と、墮落した人間達を討ち果たしてきた彼女は、暗闇の住人達にとつての恐怖と憎悪の象徴である。特に、東京魔界化を目論む「ノマド」からは、いくつもの邪悪な計画を潰えさせたこともあって、宿敵と目されているという。

「政府上層部のノマドシンパは把握していた筈なのだ、一番の大物を見逃していたのは痛かつたな。おそらく首相本人がノマドのメンバーなのだろうが、尻尾を掴む前に動かされてしまった」

彼女の視線の先の、端末の画面にはやややつれ気味の壮年男性の姿が映っている。彼女の上司であり、政府下の組織としての対魔忍を統括する、内務省公共安全庁調査第三部の山本部長だ。

ここは、都内某所にある高層ビルの最上階である。大企業のエグゼクティブ執務室の類が入るフロアの一室が、対魔忍の拠点となっていた。アサギは、政府上層部に浸透したノマドの手先を排除する極秘作戦のため、この部屋で一人待機していたところ、

首相の戒厳令放送が始まったのだ。

「首相は、いえ彼の後ろのノマドは、官邸襲撃を口実に、自衛軍を動かして私達対魔忍を潰す腹ね」

アサギは引き締まった背中に二本の長刀を背負い、既に臨戦態勢だ。

「情報によると、動いているのは神田旅団。自衛軍でも鼻つまみの連中だ」

「派兵先で婦女暴行や略奪をやらかしてた連中だったわね。まだ解体されてなかつんだ」

「実際、解体まで秒読みだったらしいが、その辺の利害で手を組んだようだ」

「そう。それにしても、アスカ……あの娘つたら何で……今までどこにいたのよ……」

アサギは、先ほどから胸にひっかかっていた話題を出した。政府放送の官邸襲撃シーンに出てきた若い女性のことだった。

「あの娘も、ノマドを粛清するつもりで動いたのだろうけど、それを逆に利用された？ それともまさか、ノマドに取り込まれてしまった……？」

アサギは彼女をよく知っていた。数年間にわたって一緒に暮らし、面倒を見ていた娘だった。

彼女、甲河アスカは魔族に滅ぼされた甲河一族の生き残り、対魔忍として天才的な素質を備えていたのだが、二年前に失踪し、以来行方知れずとなっていた。ずっと探していた彼女の姿を、こんな場面で見る事になるうとは、夢にも思わなかった。

「何とも言えない。動画を見る限り、両手足を超高性能義肢にしているようだが、そんなことのできる組織という……敵か、潜在的な敵しか思いつかん」

「敵……アスカが……」

アサギにとつて、歳の離れた妹のようにも、娘のようにも思っていた存在である。そのアスカが敵に回っているとは、思いたくなかった。

山本が話題を変える。

「それよりも当面のことだ、アサギ。送ったデータは見てくれたか？ 富士の自衛軍演習場から消えた次世代陸戦兵器だ。タイミングからして、神田旅団が君達対魔忍の攻略用に持ち出したと考えられる」

「ええ。強化外骨格『雷電』。カタログスベック通りなら私でも手こずりそう」

「……いろいろと気がかりはあるだろうが……」

一瞬、アサギの心に様々な思いが浮かんだ。五軍学園を守る妹のさくら、紫。学生達。その中でも一人の少年。

「富士演習場から消えたのは全部で八機ね」

アサギはそれらを振り切った。彼女は、ノマドの傀儡と化した政府の本格的な攻勢を前にして、自分の役割を理解していた。組織の生存だ。

おそらく、敵戦力のかかなりの部分が自分に差し向けられてくる。自分がそれらを引きつければ、対魔忍という組織が生き残る可能性は格段に高まるのだ。

「そちらの状況はどうなの？」

「五軍学園とはやはり連絡が取れん。私のほうも……おっと、噂をすれば何とやら。連中の手先が踏み込んできたようだ。では連絡はこれまでだ。幸運を祈る」

山本が微かに笑うと、端末の音声にドヤドヤとした騒音が混じった。

「そちらこそ」

アサギはそう返すと通信を切断し、端末に全データ消去のコマンドを打ち込んだ。それから瞑目して、ゆっくりと呼吸を整える。と。

「……っ！」

ゴッガガガガガガガガッ……!!

床を蹴って飛び退いた。次の瞬間、部屋の壁に無数の黒い穴を開き、端末と机が粉みじんになった。

隣室から壁越しに機銃を撃ち込まれたのだ。

ガギン……ベキッ！ ドガンッ！

間髪入れず、粉塵がもうもうと舞う中、黒々とした金属の塊が隣室から壁をぶちやぶって飛び込んできた。頭部のバイザーがざらりと赤く輝き、飛び退いたアサギに向けて腕に装備した機銃を構える。

「目標、井河アサギ発見……制圧スル」

「ほとんど音がしなかったわ。ここまで静粛行動できるとはね……カタログスペック以上じゃないの、強化外骨格『雷電』」

全高二メートル二十センチ。つま先から頭まで複合装甲で覆われているが、凹凸が少なく滑らかな外見は、騎士というよりは鋼の魔人といった風情だ。

ガガガガッ！

感心するアサギに向けて、『雷電』左腕の十三ミリ機銃が咆哮する。だが、数十発もの銃弾が貫いたのは彼女の残像だった。

（仕様通りなら、装甲を刃で直接貫くのは無理ね。関節狙いしかないか）

弾幕をかいくぐり、電光石火の早業で距離を詰める彼女の目には、鋼の魔人の弱点である胴体関節がはつきりと捉えられている。そして間合いに飛び込み、忍刀で敵装甲の隙間を斬ろうとした瞬間。

「ム……ソウハイカカ!!」

刃は空を斬っていた。

「っ！……躲された!?!」

『雷電』が素早く飛び退って、アサギの間合いから離脱したのだ。重装甲の外観からは想像もつかない、機敏な動きだった。

「……たいした反応速度だわ。魔界技術が入っているのは本当みたいね」

ジャキッ……

一旦間合いを取り直した『雷電』は、武器を機銃から右腕のブレードに切り替える。刃渡り一メートルほどの、強化合金製の武骨な刃だ。

ブウンッ……!!

流れるように踏み込んできた『雷電』の刃が白銀色の残像を描き、アサギは紙一重で回避する。

「くっ……厄介だわ」

通常の攻撃は装甲に阻まれ、その隙間を狙おうにも運動性能で回避される。付け入る隙のない状況に、歴戦の美女の背筋を冷たい汗が伝う。その時。

——アサギ……井河アサギ……強敵だぞ……そのまま、勝てるのか？ こんなところで、むざむざ死にたくはないだろう？

彼女の心の奥底から、誘うような囁きが伝わってきた。それは対魔忍の血の深淵に潜む、巨大な力を秘めた『魔』。もう一人の自分だった。

——あれは所詮はヒトの手になる兵器。ヒトならぬ『私』ならば斃すのは容易いこと。さあ、『私』を解放しろ、アサギ……欲しいものがあるのだろうか？

（断る。私は『人間』だ!）

魂の奥底からわき上がってくる誘惑を、アサギは一蹴した。

かつてアサギは一度だけ、『魔』を解放したことがある。『覚醒』した『魔』は恐るべき力を発揮して敵を斃しはしたものの、彼女は己の深部に眠るこの『力』とその起源に戦慄した。覚醒して、再び人間に戻る保証は全くなく、対魔忍であるアサギ自身が、魔物に成り果ててしまいかも知れないのだ。

——後悔してからでは遅いのだぞ、アサギ。

『魔』が呟く。その間にも、連続で斬り掛かってくる『雷電』の巨大なブレードに、アサギはじわじわと窓際へと追い詰められていった。床から天井まである大きなガラス窓の外は、地上百メートル強の夜景が広がっている。

ずるっ！

「あっ！」

攻撃を躲したアサギがよろけた。戦闘で散らばっ

た瓦礫に足を滑らせたのだ。

「ムンッ！」

その機を逃さず、『雷電』は突きかかった。

「……なんちゃって。はっ！」

歴戦の対魔忍は自然な動きで身体を沈ませると、『雷電』の機体の下に潜り込んで鋼の豪腕を取る。足を滑らせたと見えたのは、攻撃を誘うための欺瞞だった。くるりと身体を回し、相手の軸足を強烈な足払いで崩しながら腰を突き上げる。すると、重量五百キロ超の『雷電』が風船のように軽々と浮き上がった。そのまま、柔らかに肢体を旋回させる。

ガシャアアアンッ！

「バ、馬鹿ナッツ!?!」

きらめくガラスの破片とともに、黒い強化外骨格が夜闇に吸い込まれる。投げられた『雷電』が窓を突き破り、ビルの外に放り出されたのだ。

だが、『雷電』の狼狽は一瞬だけだった。

バシユッ、ビィンッ……!!

放り出された階から十メートルほど下で、落下が止まった。強化外骨格の肩部分に装備された、都市戦闘用のワイヤーを射出して外壁にぶら下がったのだ。『雷電』はこのワイヤーを使ってビルの外壁をよじ上ることも可能だった。

「フザケタ真似ヲ……タガ『雷電』ニ小細工ハ通ジン。スグニ戻ッテ、攻撃再開ダ」

「ええ。投げだけで倒せるなんて思っていないわでも、いくら熟練の特殊部隊でも、いきなり空中に放り出されたら、後ろを取る隙くらいできるわよね」

「!?!」

地上百メートルの空中で、ワイヤーでぶら下がった鉄人の背中に、アサギが取り付いていた。

最強の美女のしなやかな指は、鋼の上腕に愛おしくかのように絡み付き、滑らかな腿はバックバックを挟みつけている。そして片方の手には抜き身の忍

いや、「魔」もまたアサギ自身であり、覚醒に同調しきれなかった残り滓に、人間的な感性が含まれているだけなのだろう。

(浩介……貴方に、会いたい……)

『魔』に全てを委ねたまま、かつてアサギだった抜け殻は、人間としての幸せの記憶をぼんやりと思い起こしていた。

十

少年、沢木浩介は、唯一の肉親の兄、恭介を亡くした孤児だった。アサギは当初、浩介を引き取ることを躊躇していた。自分と密に関われば、兄のように非業の死を遂げるかも知れないと思っただけからだが結局、上司の山本部長に「異能の血筋はできるだけまとめておきたいのが上の意向だ」とゴリ押しされ、一緒に暮らすことになった。同じ理屈で、同期に甲河アスカも彼女の保護下に置かれている。

だが今にして思えば、それは過酷な戦いの道歩んできたアサギに、人としての幸せを少しでも味わって欲しいという彼なりの思いやりだったのだろう。実際、浩介とアスカを引き取ったからのアサギは、任務から戻れば姉のように、あるいは母のように甲斐甲斐しく二人の面倒を見ていた。同居の妹、さらに、すっかりお母さんだね、などと冷やかされるくらいだった。

血の繋がらない家族の生活は数年間に及んだ。当初は幼かった少年も、どんどん背が伸び、身体にそれなりの筋肉がつく。アサギは、浩介が日々成長していくのを喜んだ。あどけなさの中に男らしさを醸し出し始めた少年に、かつての恋人の面影を見いだして、密かに胸をときめかせてもいた。

一方、少年浩介も、亡き兄の恋人であった強く美しい女性に、思慕の念を抱くようになっていた。彼が対魔忍の養成機関である五車学園に志願したのも、アサギと同じ道を歩みたいと思っただけのことだろう。

十

三機の雷電が、見事な連携で斬り掛かってくる。魔界の技術を組み込まれた次世代兵器の運動性能は、並の対魔忍では圧倒されてしまうほどのレベルであったが、覚醒した今のアサギにはのんびりしたダンスにしか見えなかった。

超音速で迫るブレードを躲すと、敵機頭部の赤いパイザーに、ケークでも切るかのような気安さで刀を突き立てる。ずぶずぶと刃が沈み込み、超硬質ガラスが砕ける手応えと、柔らかな組織が切断される感触が伝わってきた。

十

さほど濃くはないものの、対魔忍の血筋を引く浩介が異能に目覚めたのは二ヶ月前。五車学園の同級生達に比べて異能の発現が遅く、自分には対魔忍への適性がないのではないかと、という彼の悩みの相談にアサギが乗っている最中のことだった。

二人は井河家のリビングで向き合って座っていた。家には他に誰もいない。アサギは外帰りのスーツ姿で、浩介は五車学園の制服姿だ。

「まずは息を整えて。気は練れるわね？」

アサギは、自分が異能に目覚めた少女時代を思い出して、同じ状況に浩介を誘導しようとしていた。

「はい、アサギさん」

少年は瞑目しながら、素直に返事をする。

「練った気を、イメージに沿って全身に循環させるんだけど、問題はそのイメージなの。どういうイメージが鍵になるかは人それぞれだから。思いついたのを一つずつ、ゆっくり試してみて。一度できればあとは簡単なだけだね」

「分かりました……」

かくして、少年は試しては失敗し、アサギはそれを励ましたり、宥めたりし続ける。

それを小一時間ほど繰り返した後のことだった。

気を循環させている浩介の様子が今までと変わっていた。不安で緊張していた身体が、適度にリラックスし、表情に高揚感が混じり始めた。それは良い兆候だった。

「そう、いい感じよ。そのまま最後まで……あつ」アサギは声を上げる。二人の間に、一枝の茨のような、赤く揺らめく何かが出現していた。

少年がついに異能に目覚めたのだ。同時に、浩介は瞑っていた目を開いた。その瞳は興奮して拡大し、ぎらぎらと光っている。

そして彼はいきなり、姉であり母でもある憧れの人に、その「茨」をぶつけた。

「えっ!!」

どくん!

途端にアサギの心臓が激しく高鳴り、全身の血液がかつと熱くなる。少年の作り出した「茨」が体内に潜り込んで神経系に絡み付き、熱く切ない刺激を直に流し込み始めたのだ。刺激はすぐに彼女の全身に行き渡り、乳房が、子宮が、秘核が、媚粘膜が、本能的な雌の歡喜を欲して強烈に疼き始めた。

(?! ……こ、これ……浩くん……)

欲求の衝撃に襲われたアサギは、嬌声を上げそうになるのを辛うじて堪えていた。

「あ、ああ……アサギさん……俺、何てこと……」一方の浩介は、しでかしてしまっただけを今更ながら認識し、狼狽していた。

彼は異能に目覚めた瞬間に、出現した茨の持つ効果を理解していた。対魔忍の血が備えている遺伝記憶である。彼の異能「炎の棘」は、女性を強烈に欲情させる効果のある、房術系統の能力であった。

そして、目覚めの高揚感に流された彼は、密かに抱いていた欲望のままに、慕っているアサギに「炎の棘」を使ってしまっていた。

「う……はっ、はあっ……うう……浩くん……」

アサギは、肉体の内側からのうねるような渴望と、そして我が子のように思っていた相手から性愛恐怖を浴びせられたというショックを必死で押さえ込んだ。忍術の影響で彼女の頬は火照り、衣服の下の肌は汗ばみ、視界が涙でぬかるむ。

だが彼女は、後悔と罪悪感でパニック状態の少年に、何事もなかったかのように向き直った。

「……おめでどう、浩くん」

腕を広げると、その豊かな胸に抱きしめた。ふわりと熱く甘い香りが少年を包む。

「あ……アサギさん……お、俺……その……」

「ん、ふふ……術を、使えるようになったのね。これで浩くんも一人前ね。今まで貴方を見守ってきた、こんなに嬉しいことはないわ。おめでどう」

抱擁しながら、熱っぽい吐息で祝福する。そして、少年が落ち着いたのを見計らって身体を離すと、その目を覗き込んだ。

「でもね、浩くん。いきなり人に忍術を使うのはいけないわ。試してみたくなるのは分かるけど。貴方のこれ、どういう術だ分かる？」

アサギはあくまで優しく、母が悪戯息子を諭すように言う。

「ご、ごめんさい、アサギさん！」

半泣きの少年は、真つ赤になって、しぼり出すような声で言った。

「俺、分かってました。分かって……でも、アサギさんに俺の気持ち、伝えたくて……それで、この術なら……好きです……！俺、好きなんです、アサギさん……！」

途切れ途切れの少年の告白を聞いて、アサギの心臓は一層高鳴った。今まで世話を焼き、慈しみ、家族として暮らしてきた浩介が、いつの間にか少年から男性になっていたのだ。

「ああ、浩くん……私をそういう目で、見ていてく

れたのね……いつの間……」

アサギの胸の中に、忘れかけていた喜びがわき上がる。それは、先ほどからの欲情と緋い交ぜになり、愛しさとなつてこみ上げる。

かつて恋人から受け取った幸せが、目の前の少年に重ね合わさるように蘇る。体内で燃え上がる欲情が、早く『母』から『女』に戻れとせき立てる。

「分かったわ浩くん、ううん浩介。私が教えてあげる。貴方の『炎の棘』の使い方。いらっしやい」

年上の美女は、立ち上がると潤んだ瞳で妖しく微笑み、戸惑う少年を寝室に誘った。

三機目の雷電の頭部を装甲の上から強引に断ち割った時、二本目の刀も折れた。アサギの心はそれを他人事のようにぼんやりと眺めている。

『魔』の力は、武器なしでも次世代兵器を圧倒する。四機目を地面に投げ倒すと手足を絡めて凄まじい力でひしぎ、複合装甲ごと中の兵士の背骨をへし折る。それから、自分の武器にするために、雷電のブレード腕をもいだ。人工筋肉と本物の筋肉が同時に千切れ、オイルと血が飛び散る。

最後の一人の息の根を止めるまで、『彼女』は戦い続ける。殺戮だけが、悲しみを紛らわせるからだ。

「……浩介」

「あ、アサギさん……っんんっ！」

寝室に足を踏み入れるや否や、アサギは浩介を抱きしめた。彼女は少年の保護者という立場も忘れて、一思いに唇を重ねる。

ちゅうっ、ちゅるっ、ちゅぶぶぶぶっ……

弟のような少年の歯をこじ開けると、甘い唾液とともに、柔らかい舌を滑り込ませる。戸惑う舌を掬めとり、くすぐり、愛撫する。

「んっ、んふ……ア、アサ、んむっ、んん……」

欲情のままに唇を動かし、吸い立てて、年下の雄を情熱的に食る。

どさっ。

ディーブキスを交わしたまま、スーツの轂も気にせず、アサギはベッドに浩介を引きずり込んだ。それから少年の片手を取ると、自分の胸に誘導する。掌が柔らかな乳房に沈み込んでいく。

「あ……そう……んっ、はあっ……」

浩介がおずおずと乳房を揉みしだくと、アサギは甘いうめき声を漏らした。その声に勇気づけられたように少年は手の力を強めていく。

しばらく貪りあつた後、アサギは唇を離し囁いた。

「ね、浩介……『炎の棘』を使うと女がどうなるのか、見せてあげる。ううん、見てちょうだい……」

その声には、わずかに羞恥の震えが混じっている。彼女は抱き合つたまま、スカートとショーツを脱ぎ下ろした。上半身はまだジャケツを着たままだが、滑らかな象牙色の肌の肌、引き締まつた下腹部は剥き出しだ。そこから伸びる、艶かしい神殿の柱のような太腿は、ガーターストッキングを穿いている。

そしてその合間には、肉色の妖花が、粘液にまみれてぬらぬらと息づいていた。

「あ……アサギ……さん」

促されて覗き込んだ浩介は、ごくりと唾を呑み込んだ。これが、これこそが。彼の憧れた女性の真実なのだ。

「貴方の『炎の棘』はね、女を興奮させて……気持ちよくさせて……従わせる忍術なの……」

「すごい……こんなふうになるんだ……」

アサギは軽く膝を曲げ腿を開く。少年は蜜花に誘われる昆虫のように、ふらふらと顔を寄せた。

ちゅっ、ちゅるっ……ぬちゅっ、れるっ……

半ば本能的に、少年はぬらめく肉花に軽く口づけする。それから味わうかのように舌を伸ばす。

「ふあつ、こ、浩介……あつ、あんつ……あつ……」
 発情対魔忍は、充血粘膜を舌でまさぐられて、切
 なげな嬌声を漏らす。それは、普段の凛々しくも優
 しい彼女からは想像もできない声色だった。

（あのアサギさんが……優しく、格好いいアサギ
 さんが、こんな甘い、艶っぽい声を出すなんて……）
 感動した少年は夢中になって、憧れの人の淫唇を
 貪った。それから、鼻先に小指ほどもある勃起が突
 き出されているのに気づく。

（あ、これがクリトリス……子供のち■ち■くらい
 ある。こんなに大きなものだったんだ）

アサギのそれは、過去の陵辱体験によって肥大さ
 せられたものだが、そうとは知らない童貞少年は、
 ひくつく大雌蕊を躊躇せずに吸い込んで愛撫した。

ちゆるっ、ちゆるるるっ……れるれるるるっ……
 「んひっ、こ、浩介っ、そこっひっあああっ……!!」
 疑似フェラチオの強烈な愉悅に、アサギは仰け反
 って身悶える。雌器官からびゆるびゆると粘液が吹
 きこぼれ、太腿と少年の顔を汚していく。

（俺の愛撫で、こんなに感じてくれている……嬉しい
 ……大好きだよ、アサギさん……）

憧れの女性の反応が愛しくて、熱烈に愛撫を続け
 る少年だったが、やがてズボンの中でわだかまる衝
 動が堪え難くなってきた。

浩介は愛撫を止めると顔を上げ、欲情に焦れる目
 でアサギの顔を覗き込む。

「……アサギさん、俺……もう、その……」
 すると彼女は、少年が一度も見たことのない、優
 しく、それでいて淫ら極まりない表情で微笑んだ。

「うん、分かっている……来て、浩介。私ももう我慢
 できない……欲しいの……」
 憧れの女性に、男として求められている。これほ
 どの喜びがあるだろうか。浩介は胸躍らせつつ、興
 奮と焦りに震える手でズボンとトランクスを脱いだ。

それから、アサギの両脇に手をつく姿勢でのしかか
 る。心臓が破裂しそうに高鳴っている。
 「……じゃあ、行くよ……あ、ああっ！」
 ぢゅぶんっ……

浩介は驚きの声を上げた。腰を落としたと同時に
 痛いほど勃起したペニスが、熱くぬかるんだ肉唇に
 あっさり呑み込まれたのだ。

アサギがタイムミングよく迎え腰を使ったのだ。童
 貞少年に失敗させまいとの気配りなのか、それとも
 彼女自身が待ちきれなかったのかは分からない。

「ああ……入ったっ、俺、俺っ……アサギさんっ」
 まさに天にも昇る心地だった。何にせよ、憧れの
 女性との初体験が現実のものとなったのだ。

「ふああん……熱い……私も、嬉しいわ……浩介」
 アサギもまた、待ち望んだペニスに思わず甘い声
 を漏らしていた。肢体をぶるりと震わせ、ゆっくり
 と腰をうねらせる。

ぬぢゅっ……ぬぼっ……
 浩介はおずおずと腰を使い始めた。ペニスが雌器
 官の中を動く、亀頭冠の鋭敏な薄皮に、食欲な肉
 襲が絡まりついて、痺れるような愉悅が襲ってくる。

「す、凄……うあ……アサギさんの中……」
 だが、アサギは炎の棘で欲情させられているせい
 で、それ以上に感じているようだった。

「んはあつ……ああ、あああつ、浩介えっ……」
 甘い嬌声を上げながら、浩介の背中を抱き、腰に
 脚を絡める。頬は赤く染まり、つり上がった目はぎ
 ゅつとじて睫毛が震える。朱色の唇は歓喜に歪む。

「可愛い……あのアサギさんが、こんなにエロくて、
 可愛いなんて……俺全然知らなかったよ……」
 抽送ペニスを包み込む蜜肉の快楽もさることなが
 ら、愛しい女性が自分だけに見せてくれた秘密の姿
 態に、少年は感激していた。胸の奥からわき上がっ
 てくる愛しさをぶつけるかのように、腰使いがどん

どん力強くなっていく。

「や、やだ、そんなこと言わないで……! あつああ
 つ、あつ……だつてつ、これ浩くんの忍術が……」
 最強の対魔忍は、我が子のごとき年下の少年に貫
 かれて、甘い声を上げるだけの、ただの女になって
 いた。稚拙なピストンに合わせて熟腰を押し上げ、
 発情恥丘を擦り付けてくるばかりである。

アサギのすらりと高い身長も、引き締まった肢体
 も、凛々しい顔かたちも、こうなつては彼女の可愛
 さを引き立てるだけのスパイスに思えた。

「はっ、はあつ……じゃあアサギさん……それなら、
 もつと可愛いところ、見せてよ……俺の忍術で、も
 つとエロいところ……」

そう言う浩介は再び炎の棘を作り出し、アサギ
 の下腹部に差し向ける。愛欲と、自分がアサギに痴
 態を晒させているという支配感に、彼は酔っていた。

「え……あ……ああつ、だ、駄目っつ」
 それに気づいたアサギは甘い悲鳴を上げるが、す
 っかり雌と化した彼女はもはや年下の、自分よりも
 ずつと非力な筈の若雄に、抵抗できなかつた。

「駄目っ浩くんっ、ああつ、んひあああつ……!」
 潜り込んだ茨に性感神経を直接刺激されて、彼女
 は少年を持ち上げんばかりに仰け反って叫んだ。性
 愛器官が強烈に収縮し、多量の熱い蜜を溢れさせる。

「うああつ、凄……! 今つものすごい、きゅ
 つと締めつけてきたっ……! じゃあもつと、もつ
 とあげるよ……エロくて可愛い、アサギさんっ!!」

浩介は取り憑かれたかのように目をらんらんと輝
 かせると、連続して炎の棘を作り出した。そして身
 悶えるアサギに次々と追い打ちをかける。

「やつやめてっお願っおああああああつ……!
 やあつこうくんっもうらめつあああああつらめ
 なのおとおおつ……!」
 アサギは何発も炎の棘を撃ち込まれ、少年の胸の

下で惑乱した。若い雄を呑み込んだままの肉腔がぐねぐねと身悶え、甘く淫らな香りが立ち上る。

浩介には炎の棘の術者として遺伝的に快樂耐性が備わっているらしく、多少の余裕が生じていた。初心者とは思えぬ腰使いで、二人の快樂を高めていく。「あああつ、うあつ……あつ、はつ……おえがい浩くんつ、も、もう炎の棘、やめれえつ……お願いらかあ、このままイかえれえつ……」

愛の拷問に、歴戦の対魔忍は身も世もなく屈服していた。眺からは被虐の涙がぼろぼろと零れる。

「ふ、はふつ……このまま？ それって、どういふふうにイかせて欲しいの、アサギさん？ 教えてくれないと分らないよ。俺、初めてだし」

炎の棘は止めたものの、浩介は愛しい女性に意地悪をしたくなって、腰を止めて尋ねる。射精間近だが、まだ我慢はできそうだった。

「ああ……うう、浩くん……」

「さあ言つて、アサギさん。それとも、もう終わりにしようか？」

日頃の彼女からは想像もつかない、従順で受け身な姿に、浩介の嗜虐衝動は高ぶる一方だった。そんな少年に、アサギは瞳を潤ませ頬を緩めて叫ぶ。

「あう……お……お、おチンポおつ……！ 忍術じやなくて、ちゃんと浩介の、血の通つた……お、おチンポでついイかせれ欲しいのおつ……！ んお、おお……お願いつ、浩くんつ……!!!」

それは、最強とうたわれる対魔忍が恋人にだけ見せる、甘えた表情だった。その顔を目撃した浩介の胸を、熱く強い感情が満たす。

「ふ、ふふつ……アサギさんが……そんな可愛いことを言うなんて……うん、分かった。このままイかせてあげるよ、俺のチンポで。エロアサギさん」

そして彼は、思いのたけをぶつけるかのように猛然と撃ち込みを開始した。技巧も何もない、欲望に

任せただけの若々しいピストン運動だ。

「うあつ、あつ、あああああつ、浩くんつ!!!」

ぐばんつ！ ぢゅぬつ！ ぬばつ！ ぐぢゅつ！ 汗を飛び散らせ、粘液をシートに溢れさせて撃ち込み続ける。

だが力任せの抽送であつても、異能により極限まで発情させられ、感度を向上させられたアサギはあつという間に頂上へと追い上げられていく。

「あつ、あつあおつ……浩介、浩くんつ……んああつ浩くんつ、ああつ、ああおおおおおつ……!!!」

アサギは濃厚な歓喜の声色で叫ぶ。雌器官がリズムカルに収縮し、奥からとどろき溢れてくる淫蜜の温度が上昇する。

「んつ、はつ、ふうつ……イくの？ もうイきそうなの？ エロアサギさんつ……!!!」

「うんつ、ああ、浩くんつ……!!! おおつ、んおおおおつ……!!! 私つ、わたしっ気持ちいいのつ、もうっ、気持ちいいのつ……浩介のつ……!!!」

アサギは雌そのものの声で、切れ切りに答える。「じゃあ、いいよアサギさんつ！ イって、俺のていつつ……アサギさんつ、エロアサギさんつ!!!」

少年は叫ぶと、ひと際強烈に腰を打ちつけた。……ぬばあんつ!!!

打突を受けて、アサギの背筋がびんと伸び、少年に絡めた手足に力が籠る。

「んああおおおおおつ……!!! イくつ、私わたしっイ、いつ……いつちやううつ……!!!」

くぐもつた叫びを上げながら、身体をがくがくと痙攣させる。秘腔が強烈に収縮し、中の牡莖を締め上げる。対魔忍の頭領が、年下の少年に責め立てられて、ついに絶頂したのだ。

「くうあああつ、アサギさんつ、俺もつ……!!!」

愛しい女性の果てる姿に、浩介も自らの快樂を解放した。尿道括約筋がコントロールを外れて、焼け

付くような愉快がペニスの中を駆け抜けていく。

ぶつ、ぶつびゅるるるるるつ……!!!

姉とも母とも慕う、年上の女の雌器官に、自分のエキスを進らせる。それは彼が今まで経験したこともない、雄としての本能的な歡喜だった。

「ア、アサギさんつ……!!! うあああつ、凄いつ……俺、俺っこんな、気持ちいいのつ……!!!」

浩介はアサギの胎内に撃ち込んだまま、奥底まで注ぎ込まんとばかりに、ぶるぶると腰を震わせる。

びゅくつ、びゅるつ、びゅるるるつ……!!!

「あつあああつ出てるつ、一杯出てるつ浩くん……!!! 熱いのつ……ああ……嬉しい……!!!」

アサギもまた、愛しい相手からの腔内射精を受けるといふ喜悅に、感極まった声を漏らしていた。

激しい情交を終えた二人は、汗だくで火照つた身体をベッドに横たえていた。

「……ああ……アサギ、さん……その、俺……!!!」

つい先ほどまで興奮にまかせて暴走していた少年は、射精によつて憑き物が落ちたかのように狼狽していた。母のような、姉のような存在だった女性を、忍術という通常でない手段で強引に発情させた挙げ句、欲望のままにいたぶつてしまったのだ。

「あの、俺……こんな……酷いこと……!!!」

「大丈夫よ、浩介。私、すぐっ気持ちよかつたわ」

浩介の不安な様子に、アサギは身体を起こすと、そつと抱きしめて頬にキスをした。心を落ち着かせようと、手で背中をそつと撫でながら囁いた。

「後でまた……練習しましょう。こういうのは、忍術に頼るだけじゃいけないと思うから……!!!」

残った雷電達が十三ミリ機銃で弾幕を張つた。数百発の弾丸が飛び交うが、一つとして魔人と化したアサギに当たる弾はない。「彼女」のまき散らす恐

ああああ!? くううん!!
や...やめて兄様あ!!

やう!!

あ
檸檬の愛する兄の正体は...!?

みどり
翠ちゃんに
聞いているだろう?
かみん
檸檬に男を教える者が
来ると

にぶいね
そんな
だから

半年以上前から僕が
人じゃなくなっている
事にも気が付かない

×××××

美少女魔法戦士
ピュアメイツ
PURE MATES episode 4
守けさぶろう
助三郎
漫画 COMIC

...な!?

僕らは人間の
精神を喰うから
無意識に癖まで
真似られるけどね

んころ
うん

バッドフェアリーは
人間を喰って
入れ替わる...!!



おや？ 翠ちゃんとの
約束を破る気かい？
檸檬は一週間僕達の
奴隷なんだろう？



つまり…こいつは…
兄様を…殺した…!!



夏樹家の人間は約束を違えては
いけないと僕が教えた
筈だけどな？

それはお前じゃない
兄様が…!!



しかし反抗的な態度を
とりつつもう
グチヨグチヨだね
ベッドに行こうか



ふふ…
そうだよそれでこそ
夏樹の人間だ 檸檬



う…く…!!
お…お兄様…
檸檬は言う事を
ききます…!!

だめだな お前なんて呼んじゃ
僕のことを兄様と呼びなさい

前号までのあらすじ

ピュア・エメラルド、翠の裏切りを疑う檸檬。しかし、逆に翠の尻にはめられた彼女は、バッドフェアリーの卵を子宮に産みつけられてしまう。

い…嫌あ
こんな格好…

そのまま
股を開いているんだ
良い眺めだよ檸檬

2/2
ウ
♡

なんて可愛くて
綺麗なオ●ンコなんだ

に…兄様の仇になんか
感じさせられたくないのに…!!

し
ん
こ
♡

!!!

身体が
悦んじきゅん!!!

さあもつと気持ちよく
してあげるよ 檸檬

あーあーあー
あーあーあー

や...やだあ...
触り方や舐め方が
なんか優しいい...!!

と...と...
なううう

手から愛情すら
感じるくらい...!!
兄様の優しさまで
真似できるの??

やあり!!
そんな両方うう!!

だ...駄目え!!
子宮が子宮が疼いてきちゃっう!!

ああああ!
駄目え...そんな
舐めちゃああ!

ああああ!!
もつと...激しくう!
膣の奥の子宮をグチャグチャに
して欲しいい!!

あーあーあー
あーあーあー



わかるよ檸檬
膣を突いて欲しくて
仕方なくなってる
いるだろう？

さあお兄ちゃんの
ペニスを出るだけ
いやらしく
ねだってみなさい

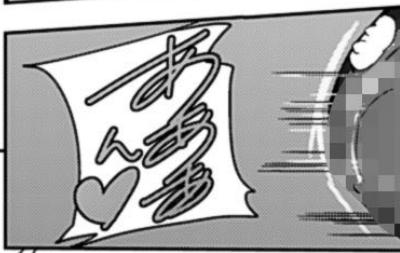
お…
お兄様のオ●ン●ンを
檸檬の処女マ●コに
挿入して下さい…！

どうして？
こ…こんな事嫌なのに…私…
凄じがキ、キしているっ…！！

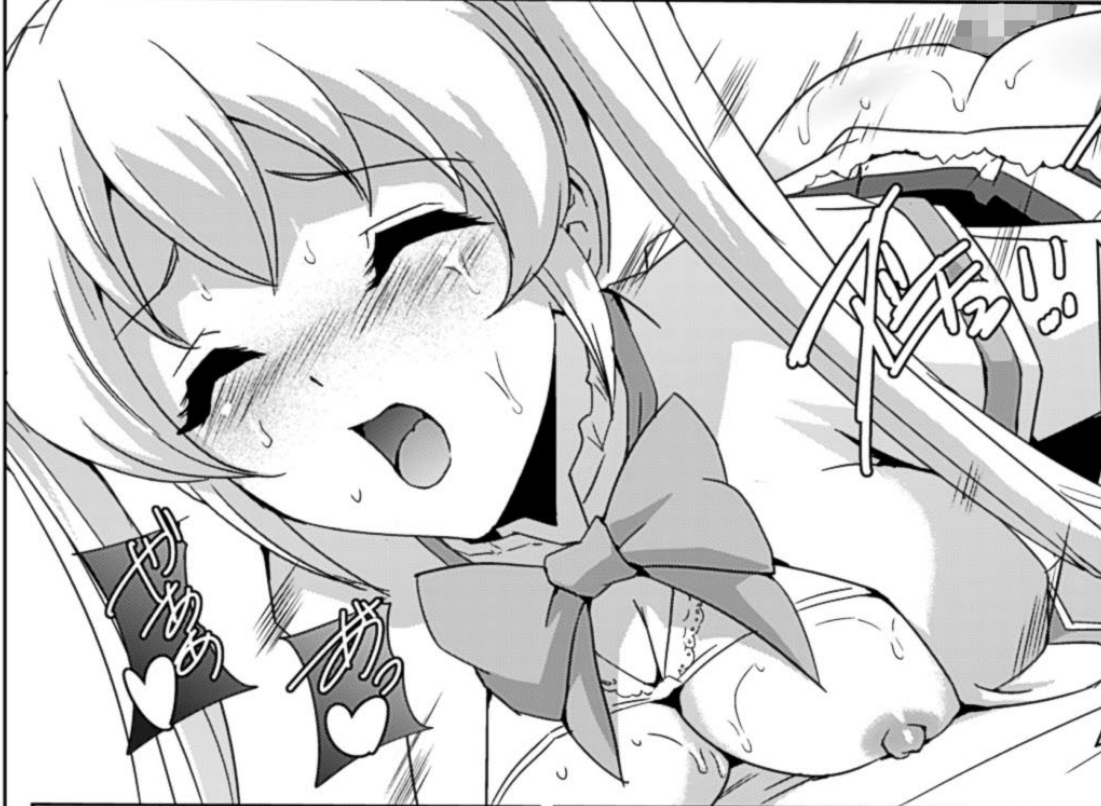
さあお兄ちゃんが
檸檬の処女を
もらってあげるよ



う...嘘お...
ちっども痛くない!!!



不オ!!



奥う!!
膣の奥...子宮まできてるう!!



こ...こんなの
気持ち悪いだけえ!!!



どうだい?
お兄ちゃんの
オ...ン...の
味は?

目を開けて
前を見るんだ

嘘を言っは
いけないね檸檬

感じてるとしか
見えない
凄くエロい顔だろう？

い…嫌…こんなの…
わ…私じゃ…

さあ股を広げて
腰を振るんだ



魔物の手に落ちた清廉なるシスター——
魔の手先に墮してしまつた姉に、妹の声は届くのか!?

セイント・バーニング

~汚された金と銀のロザリオ~

小説 さかいひとし 酒井仁

挿絵 バイオレットシット

1

齢六十を越えたその男は、この世には名状しがたい真実があるということ
を思い知らされた。

アポなしで役員室に入ってきたのは、
漆黒の長髪を揺らすマント姿の美青年、
そして付き添いの金髪の修道女。

「なにかね、キミたちは。警備員を」

と言いかけた男は息を呑む。

美青年がぱちりと指を鳴らした次の
瞬間、足元から得体のしれない肉塊が
床から染み出てきたのだ。

「な……なんだ……？」

肉塊は見る間に二メートルを超す人
型になり、さらに数を増やす。夢でも
幻でもない、美青年と修道女は明らか
に人の常識を超えた存在だった。

「○○製薬役員、内場幹彦氏……でよ
ろしいですね。御社が裏でひそかに流
通させているテトロドカンナジオール
……いわゆる脱法ドラッグの販路を、
拡大していただきたい」

「な……！ 貴様、なぜそのことを」

脱法ドラッグのヤミ流通は、一部役
員の私腹を肥やすための裏ルート。指
定暴力団との癒着を知られば、会社
が傾くどころの騒ぎでは収まらない。

「か、金か……いくら欲しい？」

「勘違いされてもらっては困りますね。
私の望みは、あなたが地上にまき散ら
しているおぞましい悪徳を、さらに広
げて欲しいだけです」

「そ、そんなことをしてお前になん
得がある」

おぞましい犯罪に手を染めている製
薬会社役員は、美青年の意図がわから
ずに困惑している。

「なに、言葉通りの意味ですよ。見て
の通り、我々は人間ではない。この地
上に悪徳を広げることで、我らの勢力
をいっそう広げたいのです」

ぱちりとマントを広げたその下は、
見事な均整美を誇る肉体。青年からは、
血の臭いがした。

「我が名は魔将レイガー・ロウ。我の
要求を受け入れるなら、相応の報酬を
与えよう。だが拒むと言うのなら」

「ふ、ふざけるな若造が……ひい？」

美青年の尊大な態度に、内場が思わ
ず声を荒らげかけると、怪物たちが唸
り声を上げる。

「ぐうおおおおおんつつつ」

「ひっ、ひい!?!」

牙をむき出しにしていまにも男に襲
いかかつてきそうな怪物の身体を、目
のくらむような稲妻が貫いた。

「あなたたち、レイガーさまの御前よ。
内場さまもこの子たちをあまり刺激し
ないようにお願いしますわ」

青年の後ろから現れた金髪の修道女
に、内場は目を奪われた。

「な、なんだその女は……」

修道女の手握られた金のロザリオ
から、「はりっ」と電気が走る。

そのロザリオ以上に輝くのは、腰ま
で届く輝く金の髪。そこに漆黒の黒が
混じっているのが、なんとも言えず艶
めかしい。

一見地味そうに見える修道服だが、
よくよく見ると胸元が大胆に開いてい
て、手に余るほど。

足を隠すはずの裾には大きなスリッ
トが入っている。むっちり肉感的な
タイトの太腿から、ブーツのつま先に
続く見事な曲線。

シスター、という敬虔な言葉とはか
け離れた、実に扇情的なシスター服。
それだけでも魅力的なのに、修道女の
美貌がさらに花を添える。

彫りの深い鼻筋、白い肌と碧の瞳。
物腰は上品だがどこか尊大というか、
小娘とは思えぬ妙な迫力がある。

映画スターかファッションモデルと
言っても十分通用しそうなほど整った
顔立ちだ。

白い首筋に光っている金のロザリオ
が、美女の神秘性をいや増している。

「アンナローザ」

アンナローザと呼ばれた金髪美女は
優美な物腰で、内場の前に膝を折る。

白くたおやかな手が内場のストラック
スの前を優しくさすると、そこは敏感
に反応し、みるみるテントを張ってい
く。

「な、なんのつもりだ」

「どうか……我が主の願いを聞き届け
てくださいませんか。そうすればわた
くしの身体はあなたさまのもの」

「ふおおっ？」

乙女の指がチャックを下ろし、内場
のイチモツを取り出すと、ひやりとし
た指が根元に絡みつく。

赤黒い亀頭からはつんと刺激臭がす
るが、金髪の修道女はうつとりと瞳を
潤ませる。

「おいおい、いいのかい。あなた、そ
のなりはシスターってやつじゃ」
「どうか、わたくしのお口で気持ちよ
くなってくださいませ……」

見事な金髪を耳の後ろにかきあげる
と、アンナローザは男の茎をぱくりと
くわえこむ。

喉奥に届きそうなほど深く飲み込ん
で、味わうように舌を絡ませる。

「んく、れる……あら、緊張なさつて
いるのかしら」

金髪美女の口の中の男の茎は、まだ
萎れたままだ。

「あんたもこの化け物の仲間なのか？」
いかに見た目が美しかろうが、その
正体が床から現れた不気味な怪物の同
類では興奮できない。

「いえ、わたしはレイガーさまの忠
実なしもべですが、人間です」

「愚かしくも我らデーモンに逆らい、
敗れ去った哀れな女だ。神の教えに背
き、我がマラに屈服した肉奴隷よ」

魔将軍のあからさまな言葉に、巨乳
シスターは目元に朱を刷き、ぷるんっ
と胸元を露出させる。

自らを侮辱するレイガーの言葉を否
定するどころか、彼女は重たげな巨乳
の谷間に肉棒を挟み込んでしまう。

「おううつ、なんて弾力だ」
アンナローザは両手で自らの膨らみ
を上下に揺すり、肉球で牡茎をしごき

立てる。谷間の中で陰茎がみりみりと膨張していく。

「ああ、素敵なオスの臭いがきつくなくてきましたわ」

シスターは妖艶な笑みを浮かべると、とろーりと谷間に唾液を垂らす。唾液のぬめりが潤滑油となつて、肉球の谷間で茎が摩擦される。

にちゅっ、にちゅっ、ぬる、ぬるっ。

「こいつ、マジで手慣れてやがる。ひひ、気にいったぜ嬢ちゃん」

「はぶ、はむ、れろ、れろっ」

にちゅっ、にちゅっ、じゅるる、じゅるるるっ。

谷間から突き出た赤黒い亀頭を口に含み、乳と舌で刺激する。

内場の口調も下品で乱暴なものに変化している。いや、もともとこれがこの男の本質なのだと思われる。

「おうっ、すげえ舌使いだ。だ、出すぞ嬢ちゃんっ」

どびゅっ、びゅるびゅるびゅるっ。

男の茎から勢いよく白濁が吹き出し、シスターの美貌にまき散らされる。

延々と射精する亀頭にばくりと唇をかぶせ、アンナローザは喉を鳴らして男の子種汁を飲み下す。

「ああ、なんて濃厚なちゅぼ汁なんだろう。あんなにどびゅどびゅ出したのに、まだマラは大きなままなんだ」

白濁で顔を汚されたところか舌なめずりをして、顔に飛び散った体液をねぶり、口の中で味わう。

その美貌と淫蕩な物腰に、男の茎はみりみりと力を取り戻していく。

「こんな上玉でスケベな女は初めてだぜ。ドラッグの販路拡大だつて？ いぜ、どんどんやつてやるよ兄ちゃん」

「アンナローザ、我の下僕としてしつかりその男に奉仕するのだぞ。飼犬の躰がなっているかどうか、ここで見ているからな」

「はい、仰せのままに」

金髪のシスターは内場の目の前で修道服のスリットに手を差し入れた。

そして蠟石のような太腿を見せつけるように、ゆっくりと黒のショーツを脱いで、内場の腰に跨がってくる。

「どうか、この嬉しいもので、可愛がつてください……」

美女の積極さに内場は息を呑む。その淫らな腰付きは、修道女という言葉からは想像もできない。

唾液と精液で濡れた陰茎を巧みに肉唇で飲み込んでいくと、成熟した膣肉が牡茎に絡みついてくる。

「うおっ、ガバマンどころか、すげえ締め付けだっ」

「はあんっ、お、おっきいの、奥まで入ってくるううっ」

金髪巨乳美女の動きは、プロの娼婦以上に淫らで、巧みだった。

肉厚の唇をれるりと舐める舌使いを見ているだけで、内場の理性は蒸発しそうになる。

「くおっ、どこで習ったんだそんなテクニク……まじでやべえっ」

あつという間に二発目を絞り取られそうになり、内場は唇を噛み締めて発射を堪える。

「ああ、すごいすわ、お……おんこ、感じちゃうう」

男の両肩に手を置き、淫乱シスターは巨乳を揺らして腰を振る。溢れる蜜液が太腿を伝い、男のズボンを濡らす。

「おいつ、激しすぎ……おおっ？」

金髪美女の淫らな腰遣いに内場はされるがままに蜜壺に翻弄される。

彼とて若造ではない、それなりの経験とテクニクで女を気絶するほど追いつめ、犯しまくったこともある。

だが、そんな男をまるで童貞扱いるように、アンナローザは内場の腕を自らの腰に回させ、腰を大きくグラインドさせる。

「あら、まさかもう音を上げられるのですか？ 楽しんでくださって構いませんのよ……？」

「くそっ。舐めるなっ」

謎の力を振るう青年が見ているにもかかわらず、いや見られているからこそ、彼の肉欲はいっそう燃え上がる。

修道女のくびれた腰に腕を回すと、凄まじい勢いでアンナローザの股間を肉棒で突き上げ始める。

「ああすごいつ、先端が奥まで当たって……すごいつ」

「お、おっ、さらに締め付けてきやがる……最高のおんこだぜ」

淫穴を突かれ、アンナローザの身体が反り返る。たぶたぶと揺れる白い巨

乳に内場は顔をうずめ、乙女の子宮を变形するほど激しく突き上げる。

海老反つて、上下逆向きになった聖女の視界に、勝ち誇った笑みを浮かべる魔将軍の姿。

「おお……おおう、おう、もう出そうだ……我慢できねえっ」

「我慢さらないでっ、わたくしの中に、溜まったものをぜんぶ吐き出してくださいませっ」

金髪美女のおねだりに、男の動きがいつそう激しくなる。

「まんこのいちばん深いところにぶちまけてやるぜ！ 俺の子を孕ませてやるぜ、変態シスターさんよう！」

「くださいつ、お情け、授けてくださいますえええっ」

淫らに悶えながら、アンナローザはわずかに残る希望に思いを馳せることしかできない。

彼女と同じ神器を——銀のロザリオを継承した彼女の妹に。

(マリアンヌ……あなただけが私に残された希望よ……)

淫らに男を誘惑し、子種汁を注がれて悶えよがる金髪巨乳のシスター。

悪に屈し、墮落しているように見えても、その瞳は完全に悪に染まりきっていない。

彼女——アンナローザの魂は完全に墮落しきつてはいなかった。

そのロザリオは、神器と呼ばれ一族に代々継承されてきた。



金のロザリオを受け継いだのは姉のアンナローザ。銀のロザリオを受け継いだのは妹のマリアンヌ。

彼女たちは神器の神秘の力を振るい、邪悪なる魔族「デーモン」を狩る一族の末裔。

だが金銀の両翼の一方は、業悪なる魔将ルイガー・ロウによって墮とされてしまった。アンナローザはルイガーに陵辱されることで、その魂を制約によって縛られ、魔将に逆らえなくなってしまうのだ。

「おおお……これで乳に一発、まここに三発喰らわせてやったぜえ」

製薬企業役員にして、闇でドラッグをさばく内場は、アンナローザの膺内に四発目の精液を注ぎ込むと、どすりとソファに腰を落とした。

萎れた肉棒を引き抜くと、シスターの股間から「ぼどぼど」とザーメンが滴り落ちる。

「ああ、こんなにたくさん……いつばいお情けを頂き、ありがとうございますすわ、内場さま」

「ふつ、ではドラッグの件、頼んだぞ」
「任せておきな。またその嬢ちゃんを抱かせてくれれば言うことないぜ」

いやらしい笑みを浮かべる内場に呆れた目を向けると、ルイガーはマントを広げる。

足元に不気味な光が広がって、ルイガーとアンナローザ、そして肉塊の怪人たちを飲み込んでいく。

「よかつたら、次は別の女も進呈しよ

う。お前はせいぜい悪徳を地上に広げてくれ……」

(別の女……まさか……そんな)

ルイガーの言葉に感じたいやな予感、果たして当たっていた。

2

「アンナローザお姉さま……どこに行つてしまったの」

月明かりに照らされた街外れの廃工場に佇むのは、修道服の少女。

シスター服にケープの下から覗くのは、アンナローザと対照的な銀髪。肌の露出は少ないが、ショートブーツに裾が短めにできているのは、動きやすさを追求したから。

姉ほどグラマラスではないものの、ふつくらした胸や腰のくびれ、すらりと伸びた生足は健康的で、しなやかな駿馬のようだ。

顔立ちにはまだあどけなさが残るものの、やや吊り目で意志的な美貌は、将来は姉に勝るとも劣らぬとびきりの美女になることだろう。

「おそらく単独行動していた時に、奴に遭遇したのだわ。魔将ルイガー……」

唇を噛む少女の背後に、黒い影が立ち上る。それはみるみる肉塊となり、おぞましい怪物となる。

ナイフより鋭い爪を振りあげ、銀髪のシスターを強襲しようとした刹那、空間を銀の光が難いだ。

「ふん——雑魚か」

「ぎやああああああああ」

聖なる光に分断された怪物が、黒い

煙となつて消えうせる。

シスターの手に握られているのは、銀のレイピア。銀髪の修道女の首から下がっていた銀のロザリオが変形した、聖なる神器。

金のロザリオから稲妻や炎を呼び出してデーモンを倒す姉と違い、銀のロザリオを継承した少女——アンナローザのたった一人の妹、マリアンヌは、聖なる剣を振るって敵を駆逐する。

「む……？」

一薙ぎで葬った雑魚デーモンの消えたあとに、なにか光るものがある。

金色に輝く金属のカプセルは、確かに姉、アンナローザのものだ。

「これはまさか……っ」

それは姉妹の間だけで使える特殊なメッセージカプセル。そこに込められた姉のメッセージを読み取ったマリアンヌの眉がひそめられる。

「やはり、魔将に囚われていたのね、でも、我ら金銀の姉妹が揃えば、いかな強敵とて相手ではないわ。待っていて、お姉さま……」

銀髪の少女は、空に浮かぶ清浄なる月に誓うのだった。

邪悪なるパワーに満ちた異空間——デーモンの巢食う魔の空間に帰還したルイガーは、金の髪の巨乳シスターに陰茎をしゃぶらせていた。

「あんなゲスな人間相手に、よがり狂つていたな、アンナローザ」

「んっ、それは、ルイガーさまが、ん

ふうううっ」

ねつとりと粘液にまみれた肉でできたソファに腰掛けた魔将の足元に跪き、巨乳シスターは巨根に舌を這わせる。

「ルイガーさまのデカマラに比べればあんなもの……んっ、むちゅっ」

実際、魔将のザーメンには媚薬効果があり、アンナローザは何十発、何百発と濃厚な魔精液を子宮に注がれ、その快楽をその身に刻まれている。

だが——金髪の修道女の魂は、まだ完全には墮落しきっていない。

「どれ、あの男にも約束したことだし、お前の妹も我が肉奴隷にしてやるか」

「ま、まあ……それはよいお考えですわ。でもどうやって？」

修道女の言葉に、魔将はせせら笑う。「聡明なお前と違って、あんな小娘無闇に突進してくるだけの猪武者にすぎぬ。配下のデーモンを一つ所に集めておけば、のこのこ向こうから出向ってくるであろう」

ルイガーは明らかに銀髪のシスターを侮っていた。

「あとは我が剣によって叩き伏せるのみ……恐るるに足りぬわ」

「その通りです、ルイガーさま。ああ、私の妹にも早くこの立派なイチモツを味わわせてあげたいですわ」

夢見るように呟いて、口いつぱいに亀頭を頬張る。あくまでも魔将に従うふりと思つていても、濃厚な牡汁を下に感じると、頭の奥が痺れ、お腹の奥が熱くなるのを禁じ得ない。

「くっくく、お前もすつかり、肉棒好きの淫乱になったな」

「んふうん……ルイガーさまあ……」

びちゃびちゃと猫がミルクを飲むように茎をねぶる美女の金の髪を、魔将は満足げに撫でさすった。

（ルイガーは、完全にマリアンヌを見下している。その油断に付け込めればきつと……）

すでに雑魚デーモンの体内に、メッセージカプセルを仕込み、マリアンヌが発見されやすそうなところに放っている。

メッセージの内容は次のようなものだった。

「私の愛しい妹マリアンヌ。私は魔将ルイガーに敗北し、彼に逆らえない程なく、彼は貴女を狙ってくるでしょう。デーモンの体内に私の魔法を仕込んでおくわ。あなたの攻撃を受けると、私の魔法がルイガーを襲う。私たち姉妹の力が揃えば、きつと勝てるはず。私を信じて——アンナローザ」

魔に屈服したふりをして、いつか必ず勝機は訪れる。

その時を信じ、憎き魔族の陰謀をしやぶるアンナローザだった。

姉からのメッセージを受け取った数日後、マリアンヌは先日と同じ魔王場跡で、かつてないほどの邪悪な魔力を感じていた。

「これほどの魔力……きつとあの男が配下を従えて私を誘っているに違いないわ。おそろくお姉さまもそこに」

陽光の下でデーモンが徘徊することはまずない。今夜は神秘なる月の光を遮る暗雲が空に立ち込め、魔物が暗躍するには絶好の夜。

「くくく……我を打ち倒して姉を取り戻すといった面構えだな。だがデーモンの群れにたつた一人で飛び込んでくるとは、無謀にすぎるな」

「魔将、ルイガー・ロウ……！」

ぐにやりと空間が歪み、黒の長髪をなびかせた美青年が現れる。周囲に次々と肉塊が生まれ、人型に変化する。ケープを飛ばされそうになったマリアンヌの顔が歪む。

（現れただけで、なんて威圧感！ お姉さまが敗北したのも頷ける、でも！私もそうやすやすとは負けない！）

「マリアンヌ——」

デーモンの群れの背後から現れたのは、金髪巨乳の修道女。その美しい髪に闇色が混じっているのを見て、銀髪の妹は眉をひそめた。

「アンナローザ、お前はなにもせずここで見ていろ。愛しい妹が我が足元に跪くその姿をな」

魔将が腕を軽く振ると、不気味な魔物たちが可憐な少女に一齐に襲いかかる。少女の首元で清浄なる銀の光が放たれ、その手には細身のレイピアが出現する。

「ぐおおおおおおおおお」

「やああああ——ッ」

ナイフのような爪を振りあげ、襲いかかってくるデーモンたち。

だが肉を切り裂く凶器は、少女を掠ることすらできない。瞬きほどの刹那、マリアンヌはデーモンたちの間をぎりぎりですり抜けていた。

「邪悪なる魂よ、闇に帰れ……ッ」

ばしゅうううううつつつ。

漆黒の煙を噴き上げ、肉塊が風船のようにしぼみ、崩れ去る。

銀に輝く細身の長剣は単なる武器ではない、刀身に宿った聖魔力は邪悪なるデーモンを浄化するのだ。

「なかなかの剣筋だ。私の護衛としては十分な腕前だな、アンナローザ」

魔将軍の不敵な言葉に、金髪のシスターは彼に従うふりをするしかない。「なにもするな」と命じられている以上、背後から彼を攻撃することすらできないのだ。

「ええ、その通りですわ、ルイガーさま。マリアンヌ——無駄な抵抗はおやめなさい。私と共にルイガーさまにお仕えしましょう」

妖艶な笑みを浮かべて手を差し伸べる姉に、ぞくりと首筋が冷たくなる。いや、悪に堕したのはあくまでも見せかけ、アンナローザは最後の希望を自分託しているはず。

（でも……いつもの優しいお姉さまと違って）

美しい金の髪に黒い筋が走り、牙えげえとした美貌には凄みさえ感じられる。慈愛に満ちた姉とはまた異なる、大人の色香をむんむんと発している。

「さあマリアンヌ、あなたもルイガーさまの前に膝を折るのです」

「クッ……！」

だがすでに逆転の種は仕込んである。アンナローザの魔法を仕込んだ雑魚デーモンをマリアンヌが攻撃すれば、その魔法が発動し、ルイガーに襲いかかるのだ。

金と銀のロザリオの力が一つになった時、いかなる敵をも撃ち負かすことができるはず。

（お姉さまを……私は信じる！）

刀身が聖なる光を発すると同時に、マリアンヌの小さな身体がルイガーの視界から消失した。

「ぬっ、速い！」

少女の剣速は、魔将の目でも捉えられなかった。

目にも止まらぬ高速突きが、二十は下らない数の雑魚デーモンに降り注ぎ、聖なる力を注ぎ込む。

そのうちの一体——アンナローザが自らの聖魔力を仕込んだデーモンの身体が爆散した瞬間、金のロザリオの聖なる力が解放された。

（あれは雷撃……お姉さまの力！ ようし、ルイガーがひるんだところを……）

すう、と剣を引いて渾身の突きを魔将に叩き込もうとした瞬間だった。

デーモンの身体から放出された雷撃魔法は、魔将にはなく銀髪の修道女に襲いかかってきたのだ。

「きゃあああああつつつ！」

ぱりぱりぱりぱりいっつ。

魔法の電撃が小柄な少女の身体を撃ち抜き、マリアンヌはその場に倒れ伏してしまふ。

その光景に、少女の姉は碧の瞳を見開き、息を呑んで立ち尽くした。

「ど、どうして……まさか、こんなことが……」

「金のロザリオの攻撃魔法、銀のロザリオの剣戟……姉妹の力があわされれば、我を倒せるとも思っていたか？ デーモンを狩る一族の末裔よ」

ルイガーの残忍な笑みに立ち尽くす姉に、銀の妹は愕然とする。姉の計略などどうに見透かされていたのだ。

「なに——お前がどういいう魔法をかけるかあらかじめわかっていれば、それを書き換えるのは難しくはない」

「う……お姉、さま……逃、げて」

修道服のあちこちが破れ、焼け焦げながらも、銀髪の少女は悪に囚われた姉に呼びかける。

だが時すでに遅し——巨乳シスターの手足にデーモンが絡みつき、その自由を奪っていた。反射的にロザリオの魔力を引き出そうとするが、デーモンがロザリオの鎖を引きちぎって取りあげてしまふ。

「馬鹿な、あなたのような下級デーモンは、鎖に触れることすらできないはず……まさか」

デーモンの足元に魔法陣が開き、魔物の肉体に魔力を注ぎ込む。いくらデーモンとはいえ、あらかじめ準備していないとこんなことはできない。

「とつくにお見通しだよ、アンナローザ。キミたちは、敗れたのだ。」

「ぐおおおおおおお」

デーモンががしりとシスターの両腕を掴んで吊り下げる。ロザリオも失った今、アンナローザには打つ手がない。

「ひ、ひい！」

大きくスリットの入ったシスター服に、ごりつと生温かいものが押しつけられる。

位置からしてそれは、強化したデーモンの股間から生えたものだ。

「放して！ 放しなさい！」

銀髪のシスターの目の前で、地面に別の魔法陣が浮かぶ。それはデーモンを、そしてデーモンに抑え込まれた金髪巨乳の修道女を飲み込んでいく。

「お姉さま……お姉さまあああああああ——」

魔将に打ち倒された銀の髪の美少女は、姉が魔空間に引きずり込まれるのをただ見送ることしかできなかった。

3

いかなる聖の力も届かぬ邪悪なるパワーに満ちた異空間。

アンナローザのようなシスターは聖なる力を失い、デーモンの邪悪なるパワーが増大する空間で、哀れな修道女の股間にはおぞましい肉棒が激しく出入れさせられている。

「ああああああ——」

もう、何時間ぶっ続けて犯されているのかもわからない。

デーモンの肉欲は凄まじく、何回射

精しても萎えるということを知らず、延々と乙女の膣を犯し続けていた。

長時間の陵辱でこなれた乙女の秘唇に、デーモンは強引に根元まで巨根をねじ込んでくる。

「う……うぐう……」

「ぎひひひ、ひひひひひひ」

デーモンが掴んでいた両腕を緩めると、金髪シスターの身体は自らの体重で肉棒の上に落ちていく。

挿入が深まり、膣穴は内側からみりみりと拡張される。痛みや衝撃を感じる時期はとうに過ぎた。嫌悪を上回る快感に、アンナローザは金髪を振り乱して悶えた。

「い、ぎい……やめ……ひい？」

背後から伸びてきた二本の手が、むんずと巨乳を掴み上げる。さらに腕はもう二本増え、乙女の内股をいやらしく撫でまわす。

「う、腕が増えて……合体してる？」

いまや合体デーモンは六本の腕と二つの頭部を持つ巨体と化している。

ただでさえ無力な乙女を寄つてたかつて鬨りものにするというのか、どこまでも醜く浅ましいデーモンの性根にへどが出そうだ。

もみゆ、もみゆと痛いほどの力で乳房を揉み、下方ではクリトリスや尻穴を無遠慮にまさぐってくる。

「や、めなさい……な、なに？」

れるりっ。ぬめぬめした生温かいものが金髪碧眼美女の首筋を這いまわる。

気持ち悪いことこの上ないが、そこは

ルイガーにさんざんねぶられ、よがらされた性感帯でもある。

（うう、くすぐりたい……けど）

びりびりいいっ。ついに修道服の胸元がブラごと大きく引き裂かれ、丸く巨大な肉球が露わになる。デーモンは指を沈める勢いで乳袋を揉みまわり、指先でニップルをこねる。

だが、乱暴なその手つきに修道女の肉体はもはや愉悅しか覚えない。

（こんな、おぞましい怪物に嬲らるるのに……ああ、思い出しては駄目）

魔将軍に陵辱された時の記憶が、脳裏に蘇る。純潔を散らされた時は嫌悪しかなかったのに、犯されるうち、女体は快楽に慣れていった。

（おっぱいの先つば、じんじん痺れて……き、気持ちいい！）

少なくとも見た目は美青年のルイガーに愛撫されて悶えるならまだしも、醜悪なデーモンに嬲られて感じるなど。

それどころか、子宮をごつごつと突かれるたび、目の裏で光が瞬き、じわあと骨盤に快感が広がっていく。

「こんな、うそよ。こんな化け物に犯されて、か、感じるはずない」

「そうかな？」

この時、長時間の陵辱で朦朧となったシスターは気付いていなかった。

自分がいつの間にか通常空間に引き戻されていることに。妹の目の前に

デーモンに犯されてよがっている自分の痴態を晒しているというのに。

「お前がどれだけ否定しようと、お前



の淫らな肉体は我的手で徹底的に開発してやったはず……たとえ汚らわしいデーモンの肉棒であっても、お前はよがらずにはいられないのだ」

「違うッ、こんな、デーモンのペニスなんかでよがったり……はひいッ」

股ぐらに潜り込んだ魔物の爪さきがクリトリスを突き刺し、アンナローザはびくびくと痙攣する。

「そ、そこは駄目え……ひい、耳の穴、舌でほじらないでえッ」

醜い魔物は二本の腕でシスターを吊り下げ、巨大な陰茎で膣を擦り立て、子宮を突き上げる。

さらに二本の腕で乳房を揉みくちやにし、二本の腕で敏感な肉芽とアヌスを刺激し、二本の舌で耳や首筋をねぶりまわしてくる。

罵られているところのすべてが火照り、巨乳シスターに快感をもたらす。

「お姉さま、お姉さましっかりしてッ！ 私たちは……私たち姉妹はこんなところで悪に屈してはいけないの！」

妹がいまの自分を見れば、きつとそんなふうに言うに違いない。

否、それは実際にマリアンヌの声だったのだが、こみ上げる愉悦を懸命に堪えるアンナローザは気付いていない。

彼女の妹はまだ希望を失っていない。だが、デーモンに犯され続ける巨乳シスターの胸には、じわじわとある感情が満ちていく。
(マリアンヌ、あなたはわかってない。

まだ純潔を失っていないあなたには、私の気持ちは理解できない)

神器を用い、邪を滅し悪を討つ姉妹は——負けたのだ。その証拠に、醜悪なデーモンに罵られ、犯されているというのに、アンナローザはこみ上げる快感が抑えられない。

「ぐひゃひゃ、ぐぎやぎやぎや」

「ああッ、あひ、ひいひいんッ」

デーモンの腰の動きが激しくなり、ぐつちゅぐつちゅと淫穴をかき回す。合わせ目から噴きこぼれるのは乙女の愛液。快楽の証。

「ふひい、ふひっ、ひああ……らめえ、おまんこぐちゅぐちゅしちやらめえ……」

乳首も、クリトリスもアヌスも燃えるように熱く、体中から押し寄せる愉悅に長身の乙女の肢体がびくびくと痙攣を繰り返す。

(も、もう、私……デーモンのおちんぽにイカされるうううッッ)

じゅぶぶつ、ずぶつ、じゅぶぶつ。無理矢理イカされるのではない。シスターであるはずの自分自身がイキたくてしょうがないのだ。

「イグいぐいぐう、イカせて、おんぼミルクでドスケベま■こイカせてえええええ！」

「ぐおおおおおおんつつつ」
ずしん、と真下から子宮を貫かんばかりの勢いで肉棒を打ち付ける。と同時に、びくびくつと腰を震わせ、乙女の胎内に大量の体液を放出した。

びゅるるッ、どく、どくんッ。

「あひい、出てる、おまんこの中に魔物ザーメン出されてるうう」

下腹部が妊婦のように盛り上がるほど、大量の体液が子宮に打ち込まれる。ずるり、と陰茎を引き抜いて女体を放り出すと、アンナローザは精液溜まりにべちゃりと倒れ伏す。

「お……姉さま……」

「えッ……マ、マリアンヌ、ど、どうしてあなたが、わ、私は」

のろのろと顔を上げたアンナローザの目の前に、真ッ青になった妹を認め、金のシスターの顔色が変わる。

「うそ……私、妹の目の前で……デーモンに犯されて……あんなに気持ちよくなつて……そんな……そんなああああああああああああああ」

金髪の聖乙女の中で、なにかが切れた。

「お姉さまあああッッ！」
ゆらり……ザーメンまみれの金髪を揺らし、乙女は笑みを浮かべる。唸り声を漏らす魔物に近づいていくと、萎れた魔物茎に手を伸ばす。

「そう……最初からこうすればよかったんだわ。犯して……魔物ちゃんぽで魔物ザーメン、おまんこにどびゅどびゅされたいの……」

アンナローザの声に、嫌悪はない。むしろ、待ちわびていたものを受け取った愉悅しか感じない。心がどこまでも解放され、穏やかになってゆくのを感ずる。

誇り高き金髪の討滅シスターの魂は、完全に闇に墮ちた。魔物の精液を注がれたことを心の底から悦びながら、アンナローザはいつまでもアクメに身を打ち震わせるのだった。

「お、姉さま……そんなことしないで！ 気を確かに持って、アンナローザお姉さま！」

あの少女はなぜ涙を流しているのだろう。自分はいまでもいい気分なのに。ずっと欲していたものを与えられ、身も心も充実している。

と、醜い怪物が舌でべろべろと顔を舐めまわしてくるので、彼女は魔物の舌に自分の舌を絡め、いぼだらけの身体を愛おしげに抱き寄せた。

「ああ……ん、もつと舌出して、濃厚なキスをしましょう」

「ギギギッ、ギャギャギャッ」

大小様々なサイズのデーモンが修道女の身体にとりつき、白い肌を這いまわる。前の口にも肛門にも魔物の茎が突き刺さり、せわしなくピストンを浴びせると、びゅるびゅると乙女の穴に子種汁が注ぎ込まれる。

「ああん、またおんことケツ穴に出されちゃった……ぬるぬるして気持ちいいわあッッ」

四つん這いになった巨乳シスターの股間から、ぽどぽどと白濁液がこぼれ落ちる。肉感的な肢体に、大小様々な魔物がむしゃぶりついてくる。
「ふふ、こんなにいっぱいばいのデーモン

ラグナロクは
我らの勝利だ

戦乙女
エルルーンよ
素直に降伏
するがいい!

お黙り
なさい!
巨人スルム!!

獣に屈する
わたくしでは
ありませんわ

くらえ!!

可憐な戦乙女推参!

あ...!?
貴女は

な...に



戦乙女
フレリア
— !!

お久しぶりね
エルル♪

墮天使たちの哀歌

Gefallene Walküre singen das Elegie

漫画 **ぱふえ**
COMIC



討たれたと
聞いており
ましたのに…
生きていたの
ですね

巨人スルム
との戦いで

ですが何故
彼らの味方を
するのです？



しゅわん♡

アハハハ
ハハハハ

なぜ
—?—

だってえ
スルム様は

私をどうも
気持ち良くして
くれるもの♡

そっちにいた
頃は味わえ
なかった…

暗く屈辱で
ても甘美な

被虐の
悦楽♡

陵辱されるのが
こんなに
満たされる事
だったなんて

なっ

お離れなさい
堕天使め!

アナタにも
教えてあげる

フッフ



く…正気に
戻って！

フレイア
姉様！！

フフ…

私は
正気よお

闇の力になど
負けないで！！
光の暖かさを
思い出すのよ

くっ…
何ですの

こんな力は
なかった
ですのに!?

これが
闇の力よ

ご主人様に
頂いた力で

アナタも
堕として
あげるわ!

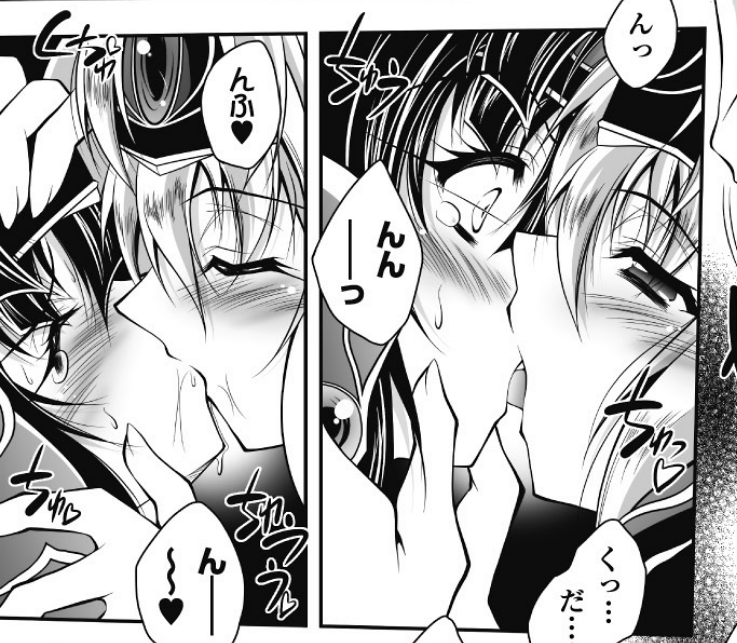
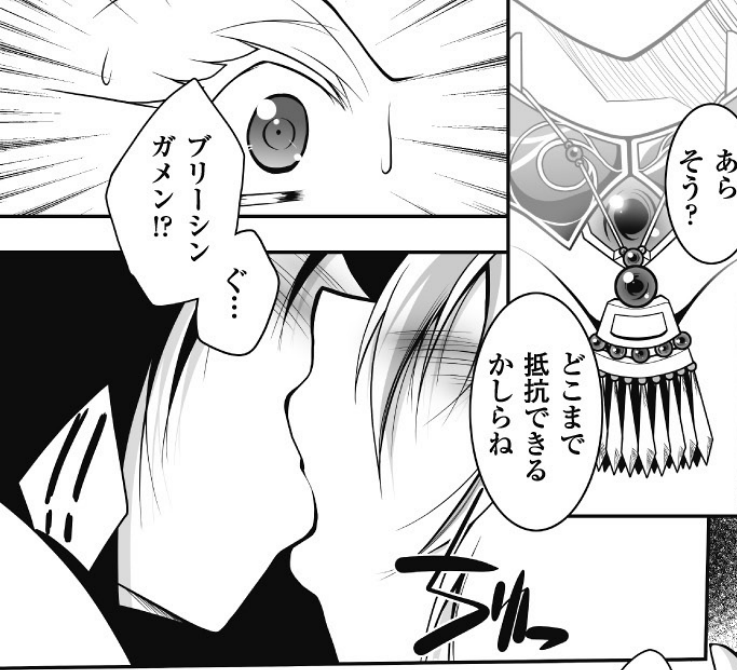
あぁん♥
避けちゃ
だあめ♥

あ…

アハハハ
つつかまえ
た!♥

ぐっ

78



悪と戦う変身ヒロインが
卑劣な手段で身も心も穢される！

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

救翼天使 セラフィムフェザー

～堕ちた翼～

小説 NOVEL にかいどうあき
二階堂安芸

挿絵 ILLUSTRATION つじかぜ
辻風

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～6の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

◆ シーン1 ◆

夜の校舎に對峙する二つの影。

一つは月明かりに冴える白の衣装に身を包んだ少女だった。天使の羽をイメージしたスーツはリボンがついた胸元が大胆に開いて、大きな谷間が作る一本の縦線まで確認できる。すぐ下のウエストはきゅつと細くなっている。全体としては細身であるのがよくわかる。そこから伸びるスカートが広がって、イブニングドレスのように見えた。腰まで伸びた明るい色の髪は月光を浴びて天使の輪を作り、夜風になびいている。目尻がやや下がった優しい印象を与える瞳がまっすぐ真剣な表情で對峙する相手を見つめていた。

「セラフィムフェザー！」

もう一方の影がその名を叫ぶ。

救翼天使セラフィムフェザー、彼女はこの世の終末を企む秘密組織メギドとたつた一人で戦う戦士である。

對するは逆十字を名乗る四大幹部の最後の一人、鋼鉄の鎧に身を包んだジョバン將軍であった。追い詰められたジョバン將軍は人質を取っていた。メガネをかけたひ弱そうな少年、本田正樹というセラフィムフェザー唯一の協力者である。

「くっ、今撃てば正樹くんまで……」

ジョバン將軍ほどの相手と戦うには必殺級の技で挑まなければ傷も付けない。しかしそれでは正樹が無事では済まない。恋人であり、セラフィム

フェザーのシステムをメンテナンス出来る正樹は人質としてこれ以上ない人物であった。

「僕の事は良い！ 攻撃するんだ！」

ジョバンの腕の中でもがくフリをして、正樹が胸ポケットをからある物を取り出した。形は一見太いペンのような正樹特製の閃光弾だ。二人は視線を交わし頷き合う。それを合図に正樹は閃光弾を足元に叩き付けた。

「うわっ!？」

「今だ!！」

ジョバンが怯んだ隙に正樹は脱出に成功する。その場に残っているのは、閃光弾で隙を見せているジョバン將軍だけだ。

「セラフブレイド！ ジャツジメント・クロス!!」

剣を取り出し、セラフィムフェザーが飛びかかっていた。斬りつける軌道が十字を描き聖なる光が断罪する。

「どう、して……？ 俺が……」

ジョバン將軍は何故自分がやられたのかわからないという顔をして倒れた。そして光が立ち上がり爆散する。

「ごめん、音羽。僕、油断して……」

「そんな事ないよ。正樹くんが無事ならそれで良いの」

安全になったのを確認し、正樹が駆け寄ってきた。セラフィムフェザー

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「うん、これで残す敵はあと一人」

二人はどちらからともなく、山の上にそびえ立つメギドのアジトを見上げていた。そこにはメギドの総統ジュダが待ち受けているのだ。

決戦に備え、二人はスーツの最終調整のため正樹の家にやってきた。

「僕は自分で戦えないのが悔しいよ」

作業を終えた正樹が、自分の拳を握りしめる。ギチギチと自分の力で震える手を音羽は優しく包み込んだ。

「自分を責めないで。私が戦えるのは正樹くんがいるからだよ」

セラフィムフェザーのコアとなる救翼システムは、科学者で同時に神学者でもあったこの正樹の父が最期に残した物である。天使の存在を肯定し、その力をエネルギーに変換することで理論上無限の力を発揮出来るという異端の研究に理解を示したのは、野心に利用しようとしたメギドだけであった。

しかしシステムが真に心の清らかな女性にしか反応しないとわかると用済みとして殺されてしまったのだ。音羽が纏うスーツはそのデータを元に正樹が作り出した物である。

「ねえ、私に最後の戦いに行けるように勇気をちょうだい」

そっと目を閉じる音羽。正樹は音羽をそっと抱きしめ、唇を重ねた。

「音羽、愛してるよ」

「正樹くん……そんな、激しく……ダメえ……ああっ!」

そして二人は激しく愛し合う。愛されている実感を身体に刻む事は、本来争いに向かない心優しい音羽が戦いに赴くための勇氣となった。

「私、絶対負けないからね」

翌朝。愛し合った証拠のお腹をさすって音羽が笑いかける。

そんな音羽を見て、正樹はふっと笑みを浮かべた。

メギドのアジトは思いのほかあつ気なく攻略出来た。正樹とお互いの愛を確認し、最高のコンディションで乗り込んだセラフィムフェザーの前に、戦闘員程度では足止めにもならない。

「残っているのはあなただけよ！ 出てきなさいジュダ！」

最深部の玉座の間で、セラフィムフェザーはメギドのエンブレムに向かって剣を突きつける。その声に應えるようにジュダが姿を現した。

「ようこそ、セラフィムフェザー。ここまで辿り着いた事はほめてやろう」

機械で変えられた声が冷たく響く。

頭部全体を覆う仮面を着け、マントや、その下から覗く貴族のような華美な装飾の軍服まで全て漆黒で統一し、その姿はまるで地面から抜け出てきた影を思わせた。

「もうこれ以上、あなたに平和を乱せはしない。覚悟しなさい！ ジャツジメント・クロス!!」

全ての決着をつけるため、いきなり最強の技で斬りかかる。しかし斬撃が

十字を描く前に、ジユダの剣がセラフブレイドの軌道を遮っていた。

「踏み込みが甘い」

返す刀で突きを繰り出す。

「きゃあっ！ は、早い」

ジユダの攻撃は流麗で無駄がない。そのため動作そのものはこちらが早くても、切っ先が届くのはジユダの方が早くなるのだ。セラフイムフェザーは自然と防戦一方となっていた。

「組織など私が生きていれば何度でも作り直せる。貴様のやってきた事など兇戯に等しいと思いついてやろう」

さらに動きまで加速する。もはや剣は追いつかず、かわすので精一杯だ。身体に接していない肩口や上着の裾が切り裂かれていく。紙一重で避け損なつた素肌にも、赤く線が刻まれた。

（くっ、このままじゃ……）

何とか剣を突き、一度距離を取る。

「どうした？ もうおしまいかな？」

敵は想像以上に強大だった。だがここで諦める訳にはいかない。

「私は負けない！ 輝け献身の心、ハート・オブ・デポーション!!」

掲げた剣が聖なる光を纏う。昨夜の調整で追加された新技である。

「正樹さんの思いが詰まったこの剣で、私はあなたに勝つ！」

光を纏ったこの剣なら防御に回っても押し負ける事はない。セラフイムフェザーは必殺の気合いと共に再び切りかかった。

「おもちや頼りか、だから兇戯だと言

うんだ！」

ジユダの剣も闇色の妖しい闇気を放ち始める。光と闇の激突。凄まじいエネルギーの衝突に耐えきれなかったセラフブレイドの刀身が宙を舞った。

「そ、そんな……!?」

もうダメだ。為す術もなく目を閉じる。しかし止めの一撃はやってこず、何故かジユダの叫び声が響いた。

「ぐああ！ くう……」

何事かと思つて目を開ける。ジユダは顔面を押さえてうずくまっていた。折られたセラフブレイドが仮面に突き刺さっていたのだ。

「まさかこんな事でダメージを受けるとはな……」

仮面が崩れ落ちる。その下から現れたのは、信じられない顔だった。

「ま、正樹くん!？」

「この姿こそが私の正体だ。お前は私の催眠能力で恋人だと思ひ込まされていたのさ」

「ふざけないで、そんな事ある訳ないでしょう」

仮面を脱ぎ捨てメガネをかけると、いつも自分に優しい笑みを向けてくれる正樹そのものだ。

「どうだい、これで信じる気になったかな？」

「嘘よ、下手な小細工はやめて正体を現しなさい！」

感情のまま掴みかかる。正樹はまともな攻撃にすらなっていない。それをいなし、鋭い蹴りで追い打ちをかけた。

「ぐう……違う、正樹くんはこんな事、しない」

「強情だなぁ音羽は……なら思い出すが良い。真実を！」

冷笑を浮かべる正樹はメガネを外した。遮る物がなくなった瞳の中に魔法陣が浮かび闇色の波動が押し寄せる。

「きゃっ、何!? はああ……」

視界が歪み、頭の中が直接掻き混ぜられる感覚。それはやがて別の場所の光景として像を結んでいった。

（ここは……昨日の）

月影の照らす校舎、昨夜のジョバン将軍との対決の場面である。

だがその配役が決定的に違う。

「セラフイムフェザー!」（助けに来てくれたんだ）

叫んだのは、メガネを外した正樹に押さえつけられている学生だった。

「いやあ! 嘘よこんな!」

目を閉じ耳を塞いで必死に否定する。

（……なのに、どうして私は違和感を感じていないの?）

「セラフブレイド! ジャツジメン ト・クロス!!」

「どう……して……? 俺が……」(捕まっていただけなのに)

正樹に捕まっていた学生の身体は一瞬にして蒸発した。

再び視界が歪み現在の光景が蘇る。

「これが真実だ。私に捕まった哀れな一般学生を、お前が殺したのだ」

(人を殺した、私が……?)

いるように思えた。

「い、いやあああああ!」

もうダメだ。こんな幻覚だと言いつけ聞かせる事も出来ない。それだけ今見せられた光景は圧倒的だった。こちらこそが現実であると、納得してしまふような存在感なのだ。

「さあごつこ遊びの時間は終わりだよ。楽しんでもらえたかな?」

俯く音羽の顔を掴み、ジユダが顔を覗き込んでくる。人を物としてしか見ないような冷たい目。それは正樹とは似ても似つかない物だった。

(なんだ……全然違うじゃない。何で私、こんな人を正樹くんだと思つてんだろう……)

「は、放して! むっ……んんっ!!」

ジユダは強引に唇を重ねてきた。

(いや、上手い……。嫌なのに……身体が受け入れちゃう)

音羽のツボが完全にわかっているよ。うなキスに身体力が抜かれていく。昨晩の一回や二回だけで出来る事ではない。ジユダとこんな事をした経験があると自分の身体に教えられる。

(ああ、私は一体いつから……)

「キスが好きだもんね音羽は。これだけですっかり乳首も硬くなってるよ」

スーッと越しても見てわかるぷっくりした乳首を指で弾かれると、雷に打たれたように快感が背中を走り抜けた。

「そ、そんな事ない。あ、あなたなんかで、感じたり……はあ、しないわ」

言葉でいくら否定しても、蜜壺がぐ

つしよりと濡れてきてしまう。
「なら僕がいくら刺激してやってもイッたりはしないのかな？」

「あ、当たり前でしょう」

既に声は震えている。ジュダはそんな様子を見てほくそ笑んでいた。

「良いだろう。では教えてやる。貴様は敵である私に胸を好きにされて感じる変態である」と

手のひらがそつと音羽の巨乳にそえられる。そして全体で円を描くように動かした。

「や、やめて、は、はああんっ……」

手つきだけは優しく、音羽の昂りに合わせて激しさを増していく。指を沈ませてふにふにと胸の弾力を確かめるように揉みしだいていった。

「んうっ、そこお、だ、ダメええ！」

胸の内側がジンジンして、欲しくなった所にちようど指がやってくる。頭では敵だとわかっているのに感じてしまう身体が恨めしい。

（うう、ダメよ。相手は違う。正樹くんじゃないんだから、感じては……あつ、ダメつ、ダメええ！）

音羽の身体は否定のしようもなく、絶頂に向かって追い込まれてしまっていた。柔肉の弄んでいた指が、不意に先端の突起を挟み込む。

「くう、ふあああん、くううう!!」

抵抗虚しくついに、音羽は胸だけで軽くイカされてしまった。

「もうイッたのか。やっぱりお前は胸を犯されて感じる変態だったな」

正樹として何度も音羽と身体を重ねてきたジュダはもちろんその瞬間を見逃さない。

「ち、違う、犯されて無理やりなんて、私は……」

いつもと同じ優しい愛撫に、身体は正樹だと思い込んで受け入れてしまっただけだ。決して弄ばれる事に快感を感じたりなんてしていない。

「まったく音羽は一度そうだって言っただけならなかなか認めないからなあ。その強がりはいつまで続けられるかな？」

ジュダはわざと正樹の口調で話しかけ、スーッと胸元を引き裂いた。むつちりとY字型の線が見えるほど押さえつけられていた乳房がまるび出る。

「きやあつ！ い、いやああああ！」
音羽は慌てて両腕で抱くようにして胸元を隠す。しかしスイカほどの大きさの乳肉がむにゅりと腕の中で形を変えて、片方の乳房が腕からこぼれ落ちてしまった。

「今さら恥ずかしがることなんて無いだろう？ 音羽の胸は、さんざん使つてやったんだから」

手を掴まれて胸を隠していた手を引きはがされる。胸を揉んでいた時とは違いギギつと軋むような音がするくらい強く握られ、吊るすように上半身が持ち上げられた。つんと上を向く乳房がジュダのすぐ目の前にやってくる。

「い、痛い……や、放して！」
逃れようと左右に身をよじると、ぺちぺちと胸がジュダの顔を叩いた。

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

「あははは、何のサーブスだ？」
「そんな、力でも技でも敵わないなんて……」

それは抵抗にもならないささやかな強がりだった。

「ふっ、卑怯で結構。今度は私がイカせてもらうぞ」

大きくそそり立ったペニスを取り出す。硬くなった逸物は谷間を通り越して目の前に迫ってきた。

「やだ、そんな物、近づけないで」
周囲に独特の生臭い匂いが漂う。

「……や、火傷しちゃいそう、熱い」
ピタリと谷間に差し込まれた肉棒が熱さを伝えてくる。

（うう、こんなモノをわたしは……）
恋人の時には、むしろ愛おしいとき

「嫌がっていられるのも今のうちだけだ。すぐに快楽を思い出して自分から欲しがるようになるさ」

「う、くっ、やあつ、動かさないで、腰がぶつかる度に胸が波打つ。身体の内側まで揺さぶられるような感覚が押し寄せてくる。」

「良い乳圧だ。ぶるんぶるん震えて、誘っているようだよ」
グニグニと手の動きも加えて、一回

「やあんっ、揉まないで、また……」
絶頂の熱を残す乳房はまたその内に

「やあんっ、揉まないで、また……」
絶頂の熱を残す乳房はまたその内に

快楽を溜め込み始めた。

「むっちりと包まれるのに、肌はすべすべで全体がほどよく擦られるぞ」
ビクビクと肉棒が脈打つのが伝わってくる。胸の中でペニスが一回り大きくなった。前につき出される度に谷間から覗く亀頭の先端がほんの少し湿っていた。

（ああ、感じてるんだ。私で……）
ジュダが興奮するのに伴って、自然と手に込められる力も強くなっていった。胸の中で形がハッキリとわかるくらい力強く押しつけられる。

「んっ、動かれたら……い、痛い！」
あまりにも力強く押しつけてくるので、腰が振られる度に赤黒い逸物で乳肌を削られるような痛みが走った。

「そんなの、すぐに感じなくなるさ」
ジュダはさらに腰の動きを強める。
「はんっ、やあ……う、やだっ、気持ちよく、ならないで……」

言われた通り次第に音羽の双丘は、自分がかいた汗と逸物の先走りですつとりと濡れてきて、激しく押しつけられても痛みを感じる事はなくなった。
「勃起した乳首がコリコリと当たって、良い感じだ」

硬く尖った乳首が擦り合わされ、お互いを刺激する。次に亀頭に弾かれ、ぐいっと乳肉の間を進んでいく肉棒に引っ張られるように進行方向に向かって押しつぶされた。腰が引かれると今度はぐいっと反対方向に引かれ、最後はもう一度カリ首にツンと弾かれる。

「ふああん！ あっ、ひうっ……！」

音羽はこの一連の動作に、抗い難い快楽を感じていた。

（嫌なのに、このままだと、私……）
胸の中で亀頭がぶるつと震え出す。
「気持ちいい。もう、出るぞ」
亀頭が常に乳首に当たるよう動きが小刻みになった。

「ひう……ま、待って……やだ、出さないで……お願い、だから……あうう、んくっ！」
乳首をグリグリされて音羽も一緒に昂っていく。

「いやっ！ ああっ、だめっ……や、やめて……ああっ！」
「く、で、出る」

——どびゅっ！ どびゅっ！ どぶう！
胸から飛び出した肉棒が激しく白濁を吐き出した。逸物がまた大きく反り返って胸にも精液が降りかかる。

「ふああ……熱い！ ドロドロの精液が、いっぱいかかって、顔も、おっぱいも……や、焼けちゃいそう！」
同時に胸の内側に溜まっていた快感が弾けて、頭の中が真っ白に染まる。
「はあああ、も、もう……ダメ、んっ、あんんうっ!!」

音羽は胸だけで二回目の絶頂を迎えた。頂点付近に出された精液がねつとりと這うように乳肌を伝う。
「またイッたな。もう挿入れて欲しくてたまらないだろう？」
後ろに手を回し、割れ目の上を撫でる。二度の絶頂で既にびちゃびちゃと

水音が聞こえるくらい濡れていた。

「う、はあ、ああ……だ、誰が？」
いくら敵だとわかっていても身体は正樹の面影を感じ、膣内に欲しくなってきた。

「強がっても無駄だぞ。お前の処女を奪って開発してやったのはこの私なんだからなあ」
「嘘よ！ 私の初めては正樹くんに捧げたのよ」

ジュダはそれを鼻で笑った。
「ふん、本物の正樹はお前に手を出す度胸もない腰抜けだったぞ」
「そんな……嘘よ！」

（それじゃあ、本物の正樹くんは？）
再びジュダが能力を解放する。
「見せてやろう。半年前、このアジトで起こった事の一部始終を」
（半年前?! 私は前にもここに来ていたの?）

視界が歪み、音羽はまた記憶の奥底に封印された光景に飛ばされる。
今いるのと同じ玉座の間で、セラフイムフェザーがジュダに組み敷かれていた。ただ一点違うのは、縛られた本物の正樹が居る事だ。

（そうだ。これが本物の正樹くんだ。私、今まで忘れて……）
正樹の顔を思い出した事で、その他の記憶も一気に蘇ってきた。

「ああっ！ 見ないで正樹くん!!」
過去の自分が泣き叫びながら破瓜の血を流している。
「ははは、初めてだったのか。その男

はよつぼどのふ抜けだったようだな」
笑うジュダの向こうで正樹が何かを叫んでいた。だがこの時の音羽に聞こえていなかった叫びは、何を言っているのかわからない。

（ああ……だめ、この後は!）
最悪の記憶は無情にも続いていく。恋人の前で処女を奪われ、膣内に射精されてイク所まで見せてしまった。

「では、さようならだ」
ジュダが正樹に剣を突き立てる。

「ダメえ!! いやああああ!!」
ショックと絶頂の余韻で動く事が出来なかった音羽は、ただ惘然とその光景を見せられていた。

「あああ……ああ……」
ショックで固まる音羽の顔を過去世界のジュダが持ち上げる。そしてあの闇色の魔法陣を発動させた。

「それじゃあ、しばらく休むんだ」
「うん、正樹くん」
次の瞬間、音羽はまだ正樹の死体が転がる横で、ジュダに身体を預けるように眠りにつくのだった。

「全ての真実を知って、今どんな気持ちかな？」

◆こんな風に人の心をもてあそんで、絶対に許さない! ↓シーン2へ
◆もう何も信じられない…… ↓シーン3へ

※ シーン2 ※

その場に崩れ落ちる音羽。しかし最後の一步で踏みとどまる。

「……許さない」

膝に手を当てて、セラフムフェザーは再び立ち上がった。

「ほう、まだ持ちこたえるか、面白い。今までにはなかった反応だな」

睨み付ける音羽をジュダは余裕たっぷりに見下す。

敵はあまりにも強大なのに対し、こちらは既に満身創痍だ。

(記憶に負けてなんかいられない！私が負けたら、もつと多くの人に悲しみが降りかかってしまうんだから！)

「ジュダ！ 私はあなたを絶対に許さないわ!!」

救世システムが心に反応するならば、きつと応えてくれるはずだと、音羽は確信していた。

(私は正樹くんの残してくれた、このセラフムフェザーの力を信じる！)

「ふんっ、無策で来るか？ そんな事では結果は変わらんぞ」

「笑いたければ笑いなさい。でもその余裕な顔が出来るのもこれで最後よ！うわああ！ ホーリーナックル！」

今持てる全ての力を込めて、音羽は渾身の拳を繰り出した。システムもそれに応えて聖なる輝きを付与する。

しかしその拳を、ジュダは涼しい顔で受け止めた。

「残念。奇跡は起こらなかったな」

ジュダの手の中で、光が闇に飲み込まれていく。手を軽く捻り、音羽を床に転がす。

「もはや私が相手をするまでもないな……お前たち」

ジュダの声を合図に部屋の中に兵士たちが殺到してくる。

「ああ……な、何?!!」

「おい、あのセラフムフェザーの胸が丸出しになつてるぜ」

「へへへ、キレイなおっぱいだ」
兵士たちはむき出しになった音羽の巨乳に無遠慮な視線を送ってくる。

「やあ……み、見ないで」

戦えばどうという事はない兵士たちにオスとしての欲望を全開に向けられて、ただの柵音羽としての部分で萎縮してしまう。

「簡単に能力を使つてはつまらぬので。単純な暴力で心を折つてやる」

下卑た笑いを浮かべて兵士たちがにじり寄ってくる。

「ひいつ、やだ……来ないで」

「せいぜい良い声で鳴いてくれよ」
男たちが一斉に飛びかかってきた。自分を抱きしめるようにしていた手足を、バラバラに伸ばされ、大の字に押しさえつけられる。

「おい、もうオ●ンコ濡れ濡れだぜ」

「マジかよ。つて事はさつきまでオ●ンコ濡らしながら戦つたのかよ。とんだ淫乱戦士だな」

脚の間に入ってきた男がスカートから覗くパンツを指さす。二回の絶頂で

ハッキリと形がわかるくらい張り付いてしまつていた。

「乳首も尖つてみたいだし、こりや前戯もいらぬかもなあ」

男は話していた通り、パンツをずらしていきなり挿入してきた。

「いやあつ!! やだつ……抜いてえ」

意志に反して秘裂はすんなり男の欲棒を受け入れる。蜜壺の奥からどろりと粘度の高い液体が溢れてきた。

「へ、犯されてるつてのに、本気汁まで出して感じてやがるぜ」

その様子を見てにたにたと笑いながら、男たちは下半身を露出した。中にはもう大きくなつていいる男もいる。

(こんなの、何が面白いの……?)

「じゃあ俺は口でもらうかな」
首を反らされる形で肉棒が口の中に突き挿入れられた。

「んっ、む、う……ふぐ、ううん!!」

喉を突かれるのが苦しくて、金魚のように口をパクパクさせる。しかしそうすると肉棒が逆にもつと奥まで侵入してくる。

(うう、やだ……悲しくて気持ち悪いのに、感じちゃう)

肉棒に膣内が犯される度、意思とは関係なく、身体が熱くなつていった。

「なんだよ、押さええる役じゃ何も出来ねーじゃん」

「そう言うなって、ちゃんと交代のヤツ等が来るまでにはさせてやるから」

交代が来ると聞いて、気が遠くなるような気がした。

(今だつて十人以上は兵士がいるのに、さらになんて……)

一日程度ではとても終わるような人数ではない。

今もいたる所からベニスや手が伸びてきてもみくちやにされている。

(いやあ! こんな続いたら……壊れちゃう。私の身体、壊されちゃう) 恐怖で身体が震え上がる。

「おっ、急に締まりが良くなったな。そうそう、お前も素直に楽しんで方がお利口つてもんだぜ」

男たちは音羽の様子を都合よく解釈して勝手に盛り上がっていく。

「口も息が熱くなつて、喉もぎゅつて締まつて、もうイッチまいそうだ」

「締め付けがまた強くなつて、俺ももうダメだ」

真つ先に肉幹を突つこんできた二人が、ビクビクと震え出す。

——どぶどぶつ! どびゅんつ!

身体を上下に刺し貫いていた肉棒が引き抜かれ、同時に精子を放つた。

「ひやあああう!」

熱い精液が全身を汚す。気絶しそうになった音羽を口に入れていた男が叩き起こした。

「まだバテるなよ。俺たちは一周もしてないんだからなあ」

すぐに別の男たちが音羽の身体に群がってきた。

陵辱の宴はまだ続く。

BAD END

ちょっと遅れての大掃除



巫女さんが悪に堕ちたらどうなる!?



怨霊退散!!

変身!! 絶対最強巫女!!

ふたご巫女

九巻

漫画 COMIC かのう 嘉納あいら

いろいろめんどくさい



如月珠音
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



ワンワン!!
(鈴音さん!!)

どうしました?
鈴音さん!



如月鈴音
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



ぬふふ...
やっと現世に
戻ってこれたわ...

いーたけん
戻りなさい



真中
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



私は帰って
きたぞ!!

ひれ伏せよ
愚民共が!!



見た目もいろいろ
変わりすぎですが...



これは厄介な靈に
とりつかれたようね
.....

ただならぬ気



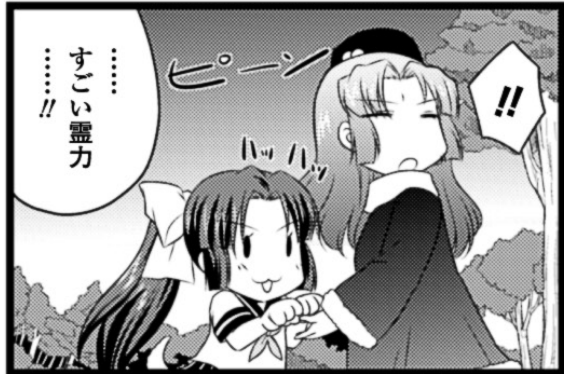
これだけ
蓋が.....

ん?



ぽか

ずれてる.....



.....
すごい靈力
.....!!

!!

尋常ではない



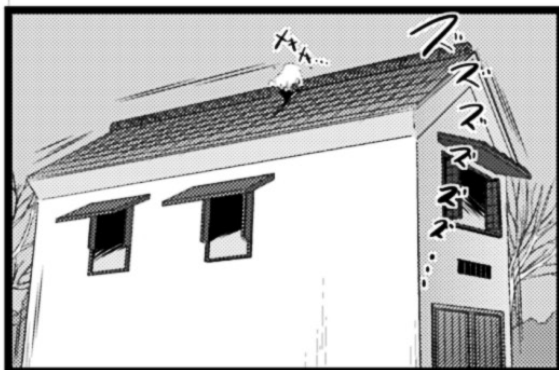
ミイラ取りがミイラ



真守
真中の姉。海外からやってきた謎
多き女性。催眠術を使う。



死神
如月神社に居候する死神。極度の
対面恐怖症。





——睦月君
童貞？

あ…う…
あうあ…

ミミカさんの
大事な
ところが…

みつ…みえ…
みええええ…!!?

思春期な アダム

第4話

天海雪乃

原作 さかき傘

web 版コミックヴァルキリーでも連載中！
<http://www.comic-valkyrie.com/>

その反応は
童貞よね

ひよっとして
ココを見るのも
はじめてかな？

早くも話題沸騰！
あとみつく文庫の
人気シリーズコミカライズ!!

謎の少年ルシアに、「蛇眼」を覚醒させられた少年睦月。彼は「天使」を名乗る女性「ミカ」とエンジュから半ば拉致されるような形で、彼女たちと同居させられることに。

……ひとつだけ
言っていないことが
あったよね

へ……？

「蛇眼」の効果

蛇の目に
どんな力が
あるか教えて
あげるわ

見てね
私の身体

反応は
人間の女と
同じだから

開け
墮落の魔視！

いま十三秒の
自由を認め

赴くままに糧を
射抜くがいい！！

ミカさん!?
どうし……

……っ!
っ!

な名前……っ

……声……だけで
……っ……!!

はぁ
はぁ

ミカさん

イ……っ……
イキぎ……お……♡

ト……

はぁ
はぁ

はぁ
はぁ

はぁ
はぁ

はぁ
はぁ





ミカさんの
身に起きてる
これって……

チアキのときと
まったく同じ……！

……ツツ

大丈夫
ですか!?

……伝承……
……想像以上ね

視線だけで
すごすぎ……

名前呼ばれたとき
なんてもう……

死ぬかと思った

……もう分かった
わよね蛇眼の力

……女の人が……
その……
エッチな……

正解

蛇は古来より
言われる通り
女性を墮落させる
——というワケ

『世界の半分を
支配できる力』

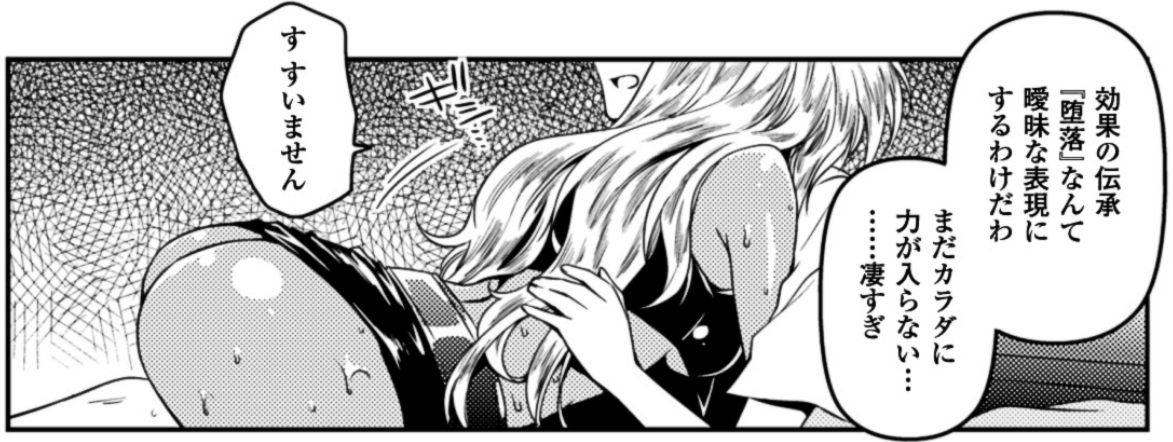
こづいっ
こづいっ
ことが……

悪用は
させないわよ

いまみたいに
封印してれば
使えないから

あ悪用なんて
しませんよ！

それに
しても……



くそおツ

また
やられたツ

碧空の茶
癒きましむ♪
怪盗ピンキツシユムーン

怪盗ピンキツシユムーンだツ

残念でした♪

街の外へ
つながる
道路を塞げツ

怪しい車両は
全て捕まえるツ
責任は私が持つツ

盗みに成功した
可憐な怪盗だったが

それを見越して
今回は電車を使って
みたりして♪

絶対に奴を
捕まえるんだツ

んっふっふー

女怪盗 ピンキツシユムーン

漫画
COMIC kupala

警察だ

手を上げろ

!

な何で警察が
こんな所に…

くく…

昔から勘だけは
良くてなあ…

何か隠してる
かもしれない
からな

コートを脱げ

く…ッ

分かったわよ…

落ち着くのよ…
何とか隙を見つけて

ハイエ…

逃げ…

ド

ウツ

アタリ

ク

何するのよッ

騒ぐな...

他の乗客に
その姿を
見せる気か?

.....ッ

ふんいやらしい
乳しやがって...

ズン
ズン

ズン
ズン

いつかこうして
思う存分翫ってやろうと
思ってたんだ

や...やめ...

何コイツ...ッ
警官の癖に...ッ

じっくり楽しませて
もっろぞ

ふあ...ッ

ん...ッ

ふう...ん...

コイツ...ッ

ズン
ズン

ズン
ズン

ズン
ズン

ズン
ズン

ズン
ズン

『白百合の剣士』『黒薔薇の騎士』の筑摩十幸×助三郎コンビが送るファンタジーアクション！
私欲に塗れた悪徳將軍を美しき盗賊姫が討つ！



紅の盗賊姫レイア

Deep red thief-Princess

第一話 闇夜に咲く紅桜

ちくまじゅうこう
小説 NOVEL 筑摩十幸

すけさぶろう
挿絵 ILLUSTRATION 助三郎

秋の月は、やたらと青く幻想的なまでに眩しく感じられる。

皓々とした月光は他の星々の光を奪い去り、天空での存在感を独り占めする。高貴なる煌めきは、夜霧の侵略を跳ね返し、弧状の虹さえも出現させた。

しかしその光をもつても照らせぬ闇もまた存在する。そこに集うのは闇の亡者か、あるいはその闇を狩る者か。

「ささ、將軍様。どうぞ、お納めください」

酒と煙草の匂いが立ちこめる薄暗い部屋。

いくつもの蠟燭が橙色の炎を揺らめかせ、二人の男の影を壁一杯の壁画のように長く高く描き出している。

「ふむ」

將軍と呼ばれた髭面の男が腕を伸ばし、いくつも積み重なった小袋の一つをつまみ上げると、中から赤や青に輝く宝石や真珠をまとった装飾品が転がり

出てきた。妖しく潤いを帯びた煌めきは、それらが昨日今日作られたモノではなく、由緒ある逸品であることを示している。

「ほう、これはなかなかの品だな。旧王族にまつわるモノか？」

でつぶりと突き出た肥満腹を満足そうに揺すって嗤う。脂ぎった髭面に浮かぶものも、欲に汚れた醜い笑みだ。

「さすがブルゴック將軍。お目が高い。王族ゆかりの品は怪盗に狙われやすいと言いますからな。お気を付けてくださいませ」

「フフン、紅の盗賊……『レッドチェリー』のことか。怪盗如きには後れをとる儂ではないわ」

「頼もしい限りです。これからも、このゾルピオをなにとぞよろしくお願ひします」

ゾルピオと名乗った商人が、瘦せた狐のような卑屈な笑みを浮かべる。

「儂に任せておけ。だが……まさか宝石だけというわけではあるまい？」

それに応じたブルゴック將軍のざらつく眼に、ねちっこい色欲の炎がチロチロと燃え始めた。

「もちろんでございます。こちらに……」

商人が背後の扉を開けると、そこはベッドルームだった。紅い光に照らされた円形ベッドの上には黒髪の少女が横たわっている。

「んっ……んむっ……ふむうっ」

年の頃はまだ十代だろうか。後ろ手に縛られたうえに猿ぐつわまで嘯まされており、その美貌は恐怖に引き撃っている。

「街でさらってきた小娘ですが、いかがでしょう。もちろん生娘でございますよ。ヒヒヒ」

「フフフ、儂の好みを知っておるな」

「それが商人というもので」

「どれ、もつと顔を見せてみよ」

ベッドに上がり込み舌なめずりしながら少女に迫る。

肩をつかんで引き寄せ、さらに顎をつかんで燭台の明かりの下に美貌をさらす。ほんのり鼻をくすぐる甘酸っぱい体臭や、指に触れる肌のキメ細かさがいやがうえにも期待を煽る。

「ううう……」

怯えきつて硬く顔を閉ざしているが、かなりの美少女であることはすぐにわかった。

幼げなそばかすや猿ぐつわに括られた頬の柔らかさが、嗜虐欲をくすぐってくる。

毛布をかけられているが、身体のラインは出るどころは出て、引つ込むべきところは引つ込んで、魅惑的なスタイルのよさがうかがえた。

「なかなかの……いや、期待以上の上玉だ。これほどの女が市井に転がっておったとは信じられん」

満足そうに嗤った將軍がズボンを下ろす。

「んむむっ！ ふむう……ふむう……っ！！」

少女が曇った悲鳴を上げるのも構わず、肉棒をつかみ出す。使い込まれた赤銅色の陰茎は毒蛇のように鎌首をもたげ、哀れな生け贄に狙いを定めた。

「フッハアア！ 暴れるでない。抵抗せねば、それなりの報酬ははずむ。だが抵抗すれば命はない」

片手で剣の柄を握って軽く威嚇し、もう一方の手で一氣に毛布を捲り上げた。

「むっ！！」

だが驚くべきことが起こる。目の前から少女の姿が忽然と消えたのだ。

「なっ!! ど、どこに……?」

様子をつかっていた商人も目を丸くし、ベッドの周囲をキョロキョロと見回している。

すると……

「ウフフッ!! アーハッハッハッハッ!!」

高らかな嬌笑が響き渡る。

「な、なにやつ?」

声の聞こえるほうを睨もうとするが、壁に反響する笑い声は、渦を巻くように周囲を回転して位置をつかませない。

「卑怯者め、姿を現せい！」

「し、將軍様、あそこにつ！」

ゾルピオが指さすのは高い天井に吊られた円形の燭台。その不安定な足場の上に悠々と起立しているのは、あの少女ではないか。いつの間にか拘束を解いたのか、猿ぐつわも当然のようになく、可憐な唇には不敵な笑みが浮かんでいた。先程までの怯えきつた姿が嘘のようだ。

「月の光の届かぬ闇も、見抜いて射貫く紅き影！」

「悪行三昧の悪党共が、隠した宝暴いてつかむ、義賊の腕をとくと見よっ！」

パッと顔の前に手をかざし、撫でるように横に払う。

「弱きを助け強きをくじく。人呼んで紅の盜賊姫！
怪盜レッドチェリー、ここに参上っ！」

黒髪は一瞬にして燃え立つ炎のような紅髪へ変わり、身につけていたものすべてが別物へと早変わり。「か、怪盜だと……っ」

ブルゴックは目を見張る。

束ねた紅い髪は腰まで届くほど長く、宝石でもちりばめているのではないかと思うほど艶があり、髪自体が発光しているかのようだ。

南の楽園の海を映したような藍色の瞳は切れ長で、目を紅い仮面に隠されていても、その深海の真珠のような美しさまでは隠しきれない。長い睫毛がピントと生意気そうに反り上がっているのも、チャームポイントだと言える。

怪盜の象徴とも言える仮面は、燃え上がる炎のような深紅が翼のように鋭角に伸び上がり、不死鳥フェニックスを彷彿とさせる意匠だ。それはまるでどのような困難にも屈しない彼女の崇高なる精神を具現化しているかのようだ。

スツと伸びた鼻梁に続くツツと小高い鼻頭は、彼女の品のよさと気位の高さを表している。

濡れ艶のある桜色の唇は、緊迫した場面にもかかわらず柔らかくほころび、余裕を感じさせる微笑と真珠のような歯並びが垣間見える。

黒よりも闇に溶け込みやすい濃紺ブラックの衣装は、ナイトドレスのような華やかさに、少女らしい健康的な愛らしさとミステリアスな魅力を加味し、さらに動きやすさをも追求している。

胸元は少女の年代に相応しい健康的な盛り上がりを見せ、大きすぎず小さすぎない、絶妙なラインを描き出している。そこからウエストラインが鋭角にくびれ、ふんわりと黒い花びらのように広がったレザースカートが、ふくよかなヒップのポリウレームを隠している。

すらりと伸びた手脚にはロンググローブと、ガーターストッキング風のタイツがぴったりとフィットし、強調される太腿付近には、透き通るような肌の下に女の皮下脂肪が敷き詰められ、少し背伸びした大人の色気も醸し出していた。

そして怪盜少女のミステリアスな魅力をさらに高めているのが頭上のティアラである。まるで一国の王女が身につけるような艶やかな装飾は、彼女が盜賊姫と呼ばれる要因であり、さらにある噂を呼び起こしていた……。

「あなたたちが不正に溜め込んだ富を、私が綺麗にお掃除してあげます。覚悟なさい！」

「おのれ、不埒な盜賊め……だが、儂と出会ったが運の尽きよ。岩をも砕く我が豪剣をくらうがよいっ」
將軍は天井を睨みながらズラッと抜刀する。怪盜少女の身の丈ほどもありそうな巨大な武器を、軽々と振り回した。

「うらうらあ、早くかかってこい！」

空気を引き裂くような轟音を響かせて、剣がますます加速していき、ついには肉眼で捉えるのが不可能な速度に達する。流れるような鋼の軌道が必殺の刃圏を描き出し、おそらくそこに入れば何者も生きて出ることはできないだろう。

「ウフフ。御高齢の割には面白い大道芸ですわねけれども、私が本物の技を見せてあげますわっ。イツツ・ショータイムッ！」

怪盜少女の身体が燭台をタンツと軽く蹴って飛んだ。クルクルと回転しながら上昇したかと思うと、放物線の頂点から背筋を伸ばして急降下！

「あまいわっ！」

重力を無視したような不可思議な軌道で降下してくる怪盜少女に、ブルゴックは真下からかち上げるような斬撃を見舞おうとした。

「むうっ!？」

しかし剣は黒衣の少女にかすりもせず、虚しく宙を切った。

「オッホッホッホッ！ どこを狙っているのかしら。私はここですわよっ！」

驚くことに怪盜少女は空中に起立しているではないか。

「な、なんと……小癩な技を」

さらに猛烈な勢いで剣を振り回し、追撃をかけるのだが……

「オホホホッ！ これぞ怪盜のイリュージョン！ 鬼さんこちら、ですわ」

紅き盜賊の身体はまるで蝶の羽を得たかのように、ひらりひらりと空中でステップを踏み、すべての攻撃をかわしてしまう。

「ほおら、当てるご覧なさい。アハハハッ」

紅い妖精が空を舞うたびに、赤髪が流麗に流れ、皮下脂肪を絶妙のバランスでミックスした脚線が、思わず戦っていることを忘れるほど美しい。時折フリルに飾られた白のアンスコがチラリと見えるのも、男心を惑わせる美少女怪盜ゆえの戦闘スタイルだろうか。

「くっ!?! 空を飛ぶなど……どうなっておる？」

もともとスタミナのない身体である、將軍はたちまち息を切らせてゼゼエと喘いだ。まるでおとぎ話の世界に迷い込んで、妖精と戦っているようだ。

「もうバテてしまいましたの？ では今度はこちらから参りますわっ。ハルシオン・ウィップッ！」

右手で腰に装着していた柄状のモノを握って一気に引き出す。

ピュオオオオオンッッ！

耳慣れない起動音とともに、桃色の光が柄から一直線に伸びて光の剣のように輝く。

「ふうふうっ、剣で儂と勝負とは。はあはあ、見く

びるなよ、小娘えっ！

ガツキイイン——ッ！

將軍の剛剣と盗賊の光剣とがぶつかり合った。瞬間、光の刃は鉛細工のようにクニヤリと曲がってしまふ。

「グハハ！ 見かけ倒しのなまくらだったなあ」

「それはどうかしら!? はあああつ！」

折れたと思われた光剣は、リボンのようになつて宙に螺旋を描き出し、そのまま將軍の剣にクルクルと絡みつく。

「ぬうっ。これは……」

「エレクトリック・バーストオツツ！」

ズバババババアアアツツ！

「うぐおとおおおおおつ！」

強烈な電撃が放たれて、ブルゴックの身体が感電硬直する。死ぬほどではないけれど、身体の自由を奪うには十分だ。

「からのおつ！ てりやあああああつ！」

着地と同時にヒールを軸にして高速回転。身動きとれない相手を、竜巻のように思いきり振り回してぶん投げたつ！

「し、將軍様！ はぐわあつ！」

將軍の巨体が直撃し、商人は吹っ飛ばされて壁に激突する。

「ウフフ。いかがでしたかしら、怪盗のスペシャルな技のお味は？ ご満足頂けたかしら？」

「う、ううう……お、おのれ……」

それでも屈強な將軍は立ち上がってみせた。しかし足元もふらついて、とても戦える様子ではない。

「あのお……もう勝負はついてると思えますので……」

「そろそろ……」

「あつ、そうそう、私としたことがデザートを忘れてましたわねつ」

どこからか聞こえてきた声を無視して、盗賊姫は

天井に向かって高々とジャンプ。

「あなたにだけの特別サービス！ 召し上がりなさい、ヒールアンドスタンプの屈辱コンボを！」

將軍の顔面に向かって両脚を揃えてダイビング。白のアンスコと太腿が作り出すデルタ地帯に、將軍が目を奪われた瞬間——。

「それっ、それっ、それっ！ 私の前に跪きなさいい！ オーホホホッ！」

「ビシッ！ パシッ！ ドカッ！ ドカカカッ！」

「ぐっ、うおおつ、ぐはあつ」

黒いヒールに顔面を何度も踏みつけられ、將軍は鼻血を噴いて大きく仰け反った。その拍子に……。

「あ、あら？」

「う……し、しまったあつ！」

黒い塊がバサツと床に落ちた。それは頭髮……いや……。

「あ……これって、もしかしてカツラ？ プブツ、アハツ、アハハハハハハツ！ こ、これは……し、失礼を……プフフツ！ アハハハハツ」

空中でコロコロと転げ回り、お腹を抱えて爆笑する仮面の盗賊少女。切れ長の眼からは涙までこぼしている。

「ああ、おかしなやつ！ こんなに笑つたのって何年ぶりかしら！ あなた、道化の素質がありますわよ！」

「う、ぬ、ぬ……うおおおおつ！ こ、これは刺つているのだ！ ハ、ハ、ハ、ハゲではないわあ！ 殺すつ！ 許さんつ！ 絶対に殺すうつ！」

天を突くはずの怒髪もない禿げ頭から湯気を立てて、ブルゴックは怪盗目がけて突進した。もはや剣もくそもない、怒りにまかせた突撃である。

「はい、お帰りはこちら」

闘牛士のごとくマントをひらりと翻す。

「うおあつ！」

將軍が突っ込んだ先にあつたのは窓。こじやれた装飾窓に巨漢の体重を支えることは不可能だ。

ガツンアアアアアツツ！ パリイインツ！

「ぐわあああああつ！」

ガラスを突き破り、一、二、三度空中を泳いだあと、將軍の身体は真つ逆さまに落下し……パツシャーン！

「ここは三階でしたっけ。まあ、下は水堀だから死にはしませんわよね」

「あのお……もしもし……レイア様」

宙に浮く仮面少女の頭上からあの声が出た。

「なにかしら、シャンティ。人が勝利の余韻に浸っているときに」

「そろそろ降ろしても、よろしいでしょうか」

天井の石壁が人型に盛り上がったと思うと、それはたちまち元の色を取り戻し、一人の少女に姿を変えた。その手には目には見えないほど細く、鋼鉄よりも強靱なワイヤーが握られており、それが怪盗少女の身体を支えている。

わざと捕まてて敵の懐に入り込み、警備を無力化して仲間を引き込む。いつも通りのレッドチェリーの作戦だ。

多少演出過剰な面もあるのだが、それは義賊としての名を轟かせ、民人に希望を与えるための手段に他ならない。頭に輝くティアラもそういう理由なのだ。

「ハアハア、なんかちよつと重いノダ……もしかし太ったノダ？」

シャンティはドワーフ族の少女であり、見た目とは違つて怪力だ。少女の身体を吊り上げるくらい造作もない。要するに華麗なる空中舞踊はこの娘の腕力によつて支えられている。

「……今……重いか、太ったとか……仰いましたか？」



レイアの碧眼がキラッと冷たい光をはらむ。

「はわわ、ごめんなさいなノダ。間違えたノダア。レイア様のお身体の発育が大変よろしくてえ……」

本気なのか冗談なのか。はたまた天然なのか。おっとり口調の栗毛少女は、天井に張りついたままペコペコ頭を下げた。

イエローのスーツに包んだ肢体は小柄で、スレンダーと言よりもどこか幼さを感じさせる。胸の膨らみは控えめで、お尻や太腿の線も華奢な感じだ。もつともそんな雰囲気もこの少女にはあつており、レイアからかわれながらも、マスケットのように愛される存在なのだった。

「もう、わかりましたから、さっさと降りなさい」
背中のワイヤーが外されると、レイアはトンポを切つて華麗に着地する。身軽さはワイヤーのせいだけではなく日頃の鍛錬の賜物なのである。

「これが宝玉ですわねっ！ 今夜も活躍！ レッドチェリー、お宝ゲットですわ★」

大粒の紅い珠を高々と掲げるレイア。もう一方の手は腰に当て、ウィンクしながらにっこりと微笑む姿は、いかにも誇らしげだが、その横でドワーフ少女は見向きもせずに他の宝石や装飾品をせっせとポーチに詰めている。

「あら、どうしてシャンティはやらないのかしら？」

「そんな恥ずかしいコトやらないノダ。そんなことより早く逃げるノダ。出口はばっちり確保してあるノダ」

「ふむ、あなたにしては手際がよろしいですわ」

「ご機嫌で示された扉を開ける。」

「ん？」
だがそこにはズボンを下ろした衛兵が、便器に腰掛けて、用を足していた。

「うおっ。なんだ、お前ら！ くせ者かっ!？」
「ごめんあそばせっ!」

ドッカアアアアアッ!

延髄への蹴り一発で男を昏倒させ、扉をバンツと閉ざしてシャンティのほうに向き直る。

「え、えーと……あのぉ……これはですわね……」
「な・ん・で・おトイレなの!! 男の汚いモノを一日に二度も見ると、最っ悪っですわっ!」

「ご、ごめんなさいなノダあゝゆるしてなノダゝゝ」
首をつかんでガクガクと揺さぶるとドワーフ少女は涙目で詫言を入れる。そこへ――

「ゾルピオ様! どうされましたっ!」
「なっ、怪しいやつらめっ! 盗人かっ?」
荒々しい足音とともに、別の扉から商人の用心棒と思われる武装した男たちが、部屋に飛び込んできた。

「はわわあ、きたあ、きたノダア。早く逃げるノダ」
「フン、こうなったら仕方ありませんわ。ここどころ運動不足で体重増えてましたし。ンフフツ」

やる気満々でレイアは一歩前に出る。なんとダイエツト代わりに屈強な男たちと戦うつもりなのだ。ニヤリと嗤う口元に少し大きめの犬歯が、キラリと不敵に光った。

「うう……やつぱり太つたノダ……」
「お黙ちなさい、さあ、いきますわよ、貧乳仮面!」

「それ私のことなノダあ!!」
びしっと指さされて狼狽するシャンティ。

「うおおおっ! なにをゴチャゴチャとっ!」
「ぶっ殺してやるっ!」

「フンツ! 返り討ちにして差し上げますわっ」
レイアが光の鞭を振り下ろそうとしたとき、

ドキュッ! シュンツ! ドシュンツツ!
「おぎやあああつ!」
窓ガラスを吹き飛ばして光の矢が高速で撃ち込まれ、傭兵たちをなぎ払っていく。

「な、なんだ……ぐおあつ!」 「ぎやああああつ!」

ドガガ! バリインツ! ガシヤアアンツツ!
狼狽する間にも次々に矢が襲いかかり、男たちは射的場のようにはじき飛ばされて倒れていった。数秒後には傭兵たちは全員失神。部屋も無残な状態になり果てていた。

「遠隔魔法弓弾……もう、物騒ですわね」
レイアは咄嗟にかわしたものの、トロいシャンティには何発か命中していたらしく

「あううっ……お尻が、いたいノダあ」
愛らしいお尻を押さえてびよんびよん跳ねるドワーフ娘。もつとも黄色いスーツは光の矢をすべてはじき返していたようだが。

「ちよつとっ、マリー! いくらリップルスーツを着ているからって、殺す気ですのっ!」
窓のほうを見やると、隣接する塔の上に人影があつた。月を背景に弓を構え起立する姿が長身のエルフにはよく似合う。

「任務完了。この程度をかせげないようでは戦場で生き残ることはできんぞ、隊長」
ぼそりと呟くような声が、レイアのドクロ型ヘアアクセサリーから聞こえてくる。

名前はマリー。シャンティと同じタイプの緑のスーツを着ているが、体格はまったく違う。

身長はそこの男が見上げるほど高く、夜風に流れる金髪は柳のように流麗だ。そしてエルフラしからぬGカップの豊かな胸が、存在感をアピールしていた。冷静な判断力は頼りになる存在だが、まるで軍人のようにお堅い面もある。

「つたく、私たちは戦争してるんじゃないわよ。さあ、戻りましょう」

「はいなノダ」

「了解した」

二人の手下を従えて、紅の盗賊は夜空に飛翔した。

翌日。街では紅の盗賊の話題で持ちきりだった。

「また怪盗姫が出たらしいぜ」

「今度は大商人ゾルビオの屋敷だとか……やるねえ」

紅の盗賊に対して街の反応は好意的だ。

ここアルラン国は大陸の南に突き出た半島にある海運国家である。古くから交易の中継港として、また豊富な海産物によって栄えてきた。

しかし近年北方にある強大なルハサン連邦が軍勢力を背景に進出し、一部の貴族や商人を取り込み、間接的に支配させることで、実質的にこの国を支配していたのだ。

税は重くなり生活は困窮、多くの人が路頭に迷うようになった。富を独占する貴族や商人に対する不満は大きく、彼らをターゲットにし、盗んだモノを貧しい人たちに配る紅の盗賊レッドチェリーは、庶民たちの喝采を浴びていた。

そしてもう一つ、彼女がいつも身につけているティアアラが、ある人物を彷彿とさせるからであった。

「盗賊めが……いつか必ず捕らえてくれるぞ」

そんな街人の様子を館の窓から見下ろし、ブルゴック將軍は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「ウフウフウフ。噂のレッドチェリーですか。相当お困りのようですねえ」

「むっ……何者だっ？」

いつの間にか部屋に入っていた美麗な貴婦人を見て驚きの声を上げる。

瞳や鼻や唇といった各パーツはもちろん、その位置関係やバランスまでも完璧。思わず息をするのを忘れるほどの美形であった。

そのうえ肌や銀髪は磨き抜いた雪の結晶のように色素が薄く白く、まるで水でできた彫像のようだった。

かといって無機質な感じはなく乳房の張りやお尻

のポリウムは匂い立つような生々しい女の色香を放つ。

その蠱惑的なボディを包む漆黒のドレスは極めて露出度が高く、深い胸の谷間や縦長のおへそは丸見え、くびれ腰からムチムチしたお尻、さらに太腿へと続くS字曲線が、手にとるようにわかるのだ。

「ウフウフ、私はエリザベート・バトンと申します。ルハサン連邦の監察官をやっておりますのよお。職務上とは言え急にお邪魔してごめんなさいねえ」

クジャク羽の扇子をパタパタと振りながら、クネクネとしなを作る様は、役人と言うより水商売の女の子のようだが、それがまた「はまって」いる。

「お……おお、これは……監察官殿でしたか。まさか女性とは思わず、失礼しました。すぐお茶を用意させましょう。今年は東方よりよい葉が手に入りまして」

しばし見とれていた將軍が卑屈な笑みで手を攪り合わせる。連邦は強大な同盟国であり、その機嫌を損ねるのは得策ではない。

「ううん、今は結構ですわよお。それよりい怪盗についてもう少しお話をうかがいたい。よろしいかしら、ショウグンさま？」

紫の瞳を輝かせて妖しく微笑む。目だけで男を殺せる魔性の眼力の持ち主だった。

「ああ……た、たいしたことはありません。この国の治安はいたつて良好です。たかが牝狐一匹、エリザベート卿にご心配頂くようなことは……コホン……まったくありません」

詮索をされたくないブルゴックは強弁で否定するものの、目はついつい妖婦人の深い胸の谷間や、むしろやぶりつきたくなるヒップラインに吸い込まれてしまう。ドレスのカットラインから判断すれば、ブラもパンティもつけていない。

「確か今回も紅い宝石が盗品の中にあつたとかあ？」

私とショウグンの間で隠し事はイヤですわよ」

將軍の顎髭を撫で回しながらエリザベートはさらに質問を返してきた。

銀髪が隠す容貌は、濃厚メイクが艶やかに彩り二十代でも通用するだろうか。

とは言え強烈な男殺しの色気や立ち振る舞いは、完成された大人の女であり、経験のない若い女が簡単に身につけられるものではない。

名前以外はまったく知らされていない、謎に包まれた女性なのだった。

「え、ええと……どうでしたかな。確かあつたと思われませんが、それがなにか？」

幻惑されたように將軍はあつさりとして捜査情報を喋つてしまう。

レッドチェリーはなぜか毎回サクランボのような紅い宝石を盗んでいくという。それが彼女の通りの名の由来の一つでもあるのだが、その理由は今のところわからない。

「やはり……」

一人納得した様子で頷く女監察官。おもむろに顔を上げ、唇を開く。

「私なら紅の盗賊を捕らえるお手伝いができると思いますが、いかがでしょうか？」

「お、お待ちください。なぜ監察官であるあなたが盗賊退治など？ それに我が国の……んぐっ!!」

言いかけた唇を塞いだのはエリザベートの唇だった。蒸れたような爛れたような牝臭が、口腔から鼻腔へ流れ込む。灼熱の電流がブルゴックの脳から陰囊を貫いて、思考回路をプチプチと寸断していく。

「あ……お……か、監察官殿……」

「エリザベートと呼んで」

「ああ……エリザベート……」

「あああ……嬉しいですわあ、ショウグン。私のお願い聞いてくださるわよねえ」



魔法少女
Returns the magical girl

静流

後編

漫画 ひぐちいさみ 原作 ミルフィュー ORIGINAL COMIC



いあああああ!

あつ...

あつ...

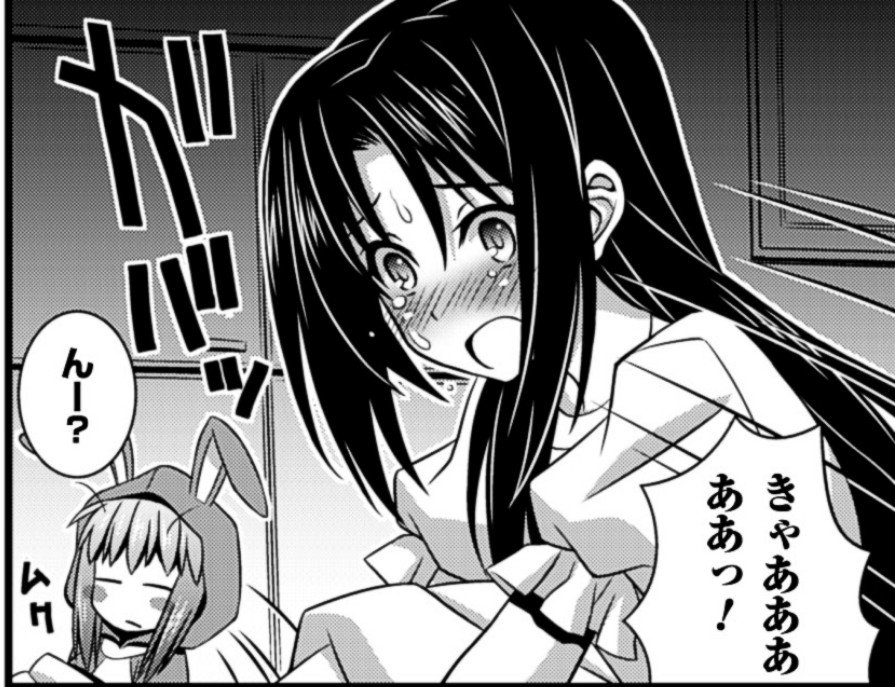
いっ...

んっ!



どしたの？

ううん……
ちよつと変な
夢を……



んー？

ム

きやあああ
ああつ！



ポコッ！

モガッ！



!!!

まあ
良くある事よ
気にしない
気にしない！

ははーん……
さてはえつちな
夢でばんつ濡らし
ちゃったのね

ム

ム



き着替える
からあつち
向いてて！



……静流が
魔法少女になって
もう暫く経つ

何体かの
違反者と戦い
そこそこ経験も
積んだわ

ただ気がかり
なのは最初に
遭遇した
違反者ね……



初戦とは言つものの
善戦した静流の
攻撃を軽く受け流し



あっさり逃げ
られてしまった
見た目とは裏腹に
実力はかなりある
奴だったわ…



被害にあった子は
静流と同じ白樺学園の
生徒だった

思念を吸われると
意識を失い寝たきり
のようになってしまう
奴を倒せば元に戻る

あもしもし
救急車を

公園で女の子が
意識を失っていて…



被害にあった子を
元に戻す為これ以上
被害を広げない為
静流は今がんばって
いるわ…



キーニ
コーニ

ねえねえ
まだ今朝の事
怒ってるのー？
綺麗な顔が
台無しよー？



知りません
パイ

……
モグ
モグ

思ったんだけど
静流って結構
凄いかもね

え？

初変身の時よ
レクチャーも無く
いきなり剣を具現化
させちゃうんだもん



…それは
かずくんの
おかげかも

かずくん？

うん私の従兄弟で
よく変身ヒーローの
ゲームと一緒に
遊ぶんだけど
その影響かもね

ふうん



…違反者
だわっ！





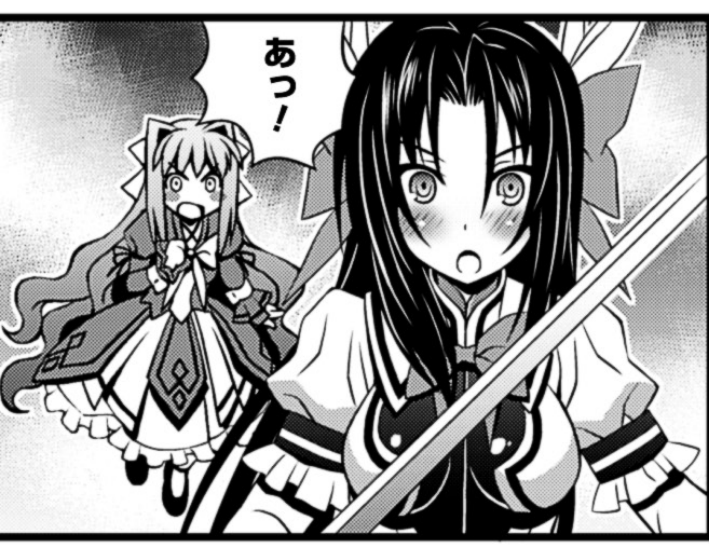
反応は駅前の
繁華街の方から
あるわ！

急ぐ
わよっ！



うん！

静流！



あっ！



天舞



あいつは！

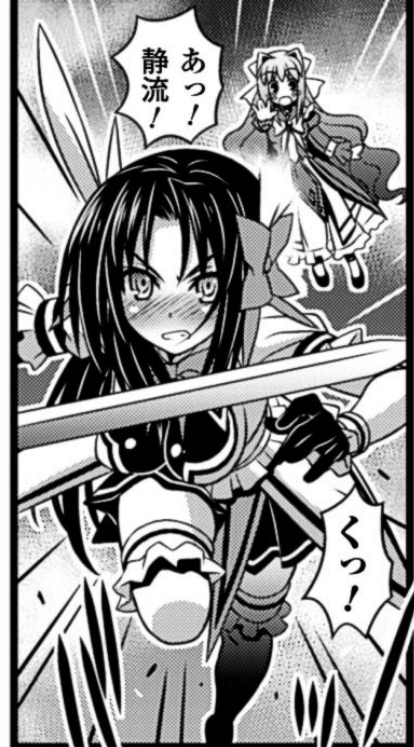
ドド

あの時の
違反者！

装身！！

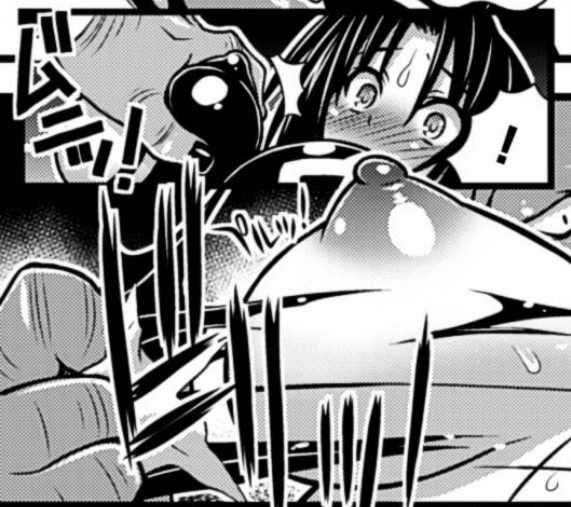


か...身体が
動か...ない!



あつ!
静流!

くっ!



!



ああつ!



何の準備も
無く待ち構えて
いると思つた
プヒか?

んぷつ!

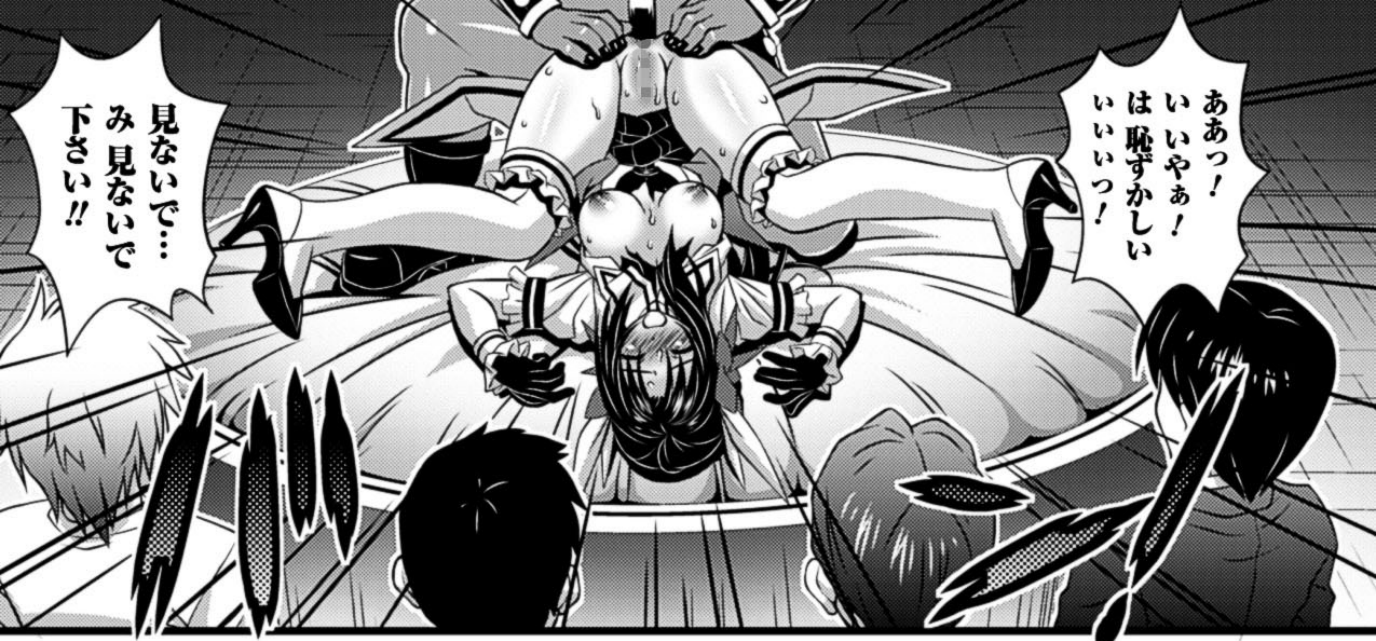


プヒッヒ:
改めて見ても
かなり上玉の
牝プヒ

ずっとお前を
メチャクチャに犯し
たいと思つたプヒ

前に手に入れた
お前の髪を使って対魔
結界を作つたプヒ♪





ああっ！
いいやあ！
は駄ずかしい
いいいっ！

見ないで…
み見ないで
下さい！！



無駄だプヒ
オデの作った
フィールドに
入った人間は

みんな
理性が弱くなるプヒ
写メ撮られまくり
だプヒヒヒ〜♪



き気持ち
良くなんか
ない…！



奥まで舐めて
気持ちよく
してやるプヒ

予想通り
処女だプヒ
膜傷つけない
ように

うっ...

あ...あ...
いいや...
いやあ...

あ...
あ...
.....!

そんな口が
きけなくなる
くらい

こいつで
あひんあひん
言わせて
やるブヒ

ブヒッ!
初結合をお披露目
するブヒッ♪

ブヒンヒー!
オデのチポで
開通させた
ブヒー!



どうだー
 気持ちいい
 ブヒカー？
 初中出しも
 オデが決めて
 やるブヒー！



いっ
 嫌あああ
 あっ!!



静流……！

次はアナルに
 ぶち込む
 ブヒッ♪

ヌハッ

堅悟と契約したニコを寝取るため、
新たな力に目覚めたサンゴが襲い来る！

Kissing for my stray dog with everlasting promise.

捨て犬少女に 誓いのキスを

最終話 The place to get back

小説 NOVEL

あいえだなお
愛枝直

挿絵
ILLUSTRATION

A.S. ヘルメス

登場人物紹介



ニコ

姉弟の父・高崎悠堅のスレイブ。悠堅の命令で、姉弟を守るためにやってきた。鎧を振るい敵を圧倒する力を持っている。



高崎悠里・堅悟

父が失踪してから、お互い支えあって生きてきた姉弟。死の危機を回避するため、実の姉弟と主従の契約を結んだ。



ジェイミー＝コーラルクラフト・サンゴ

「ラボラトリ」に所属する研究員とそのスレイブ。悠堅を追う手掛かりを得るため、姉弟を襲撃した。

前号までのあらすじ

謎の組織「ラボラトリ」に所属するジェイミーとサンゴに襲われた堅悟と悠里。失踪した父・悠堅と行動を共にしていたというニコに助けられ、ジェイミーたちを一時的に退けたのだが、諦めていなかった彼女たちは再度襲撃してきて……!?

——今日から貴女はサンゴ。宝飾具師、コーラルクラフト再興の礎となることを感謝なさい。契約の後マスターは、胸を反らして私を見下ろし、不敵な笑みを浮かべてそう言い放った。新たな呪具を生み出すための魔術理論は失われて久しく、**鍵**はその唯一の手がかり。この極東の島国が、**鍵**に選ばれたと知り、マスターの両親はここに移住し彼女を産んだ。志半ばで絶えた両親の遺志を継ぎ、**鍵**に匹敵する呪具を創り出すことが悲願であると、マスターは私に語った。難しいことは分からなかったけど、マスターが自分のお家を大切に思っていることはよく分かった。コーラルは、英語で珊瑚という意味らしい。辞書にそう書いてあった。私の名前には、マスターの誇りが込められているのだ。

☆

グロテスクな表皮を蝨かせる極太の肉腕が、雨の

ように降り注ぐ。ニコは剣呑な鈍い光沢を放つ鎧を振るい、切り返し、叩き返す。視界を埋め尽くすほどの触手の群体は、銀鎧を警戒して柱に磔となったジェイミーを、ニコの視界から遮るためなのだろう。同時にそれらはニコの警戒対象を増やし、注意力を分散させる効果を持つ。散漫を避けるため、背中の向こうの守るべき人と、握りしめた武器の重みだけに意識を集中する。無心で振るう鎧が迫り来る暴威と交錯する。吹き抜けの天井に重たい打撃音が途切れなく響き続ける。戦いは高崎家で巻き起こった衝突の再現となった。唯一にして最大の相違点は、ニコのコンディションが万全であるということだ。より深く握り込まれ、力強く振るわれるスレッジハンマーは、肉鞭を軽々と弾き飛ばす。粘腕は、柱を叩き、ガラスを割り、ようやく戦線に復帰する。僅かな遅れは致命的な手数の差となつて、ニコに着実な前進を許す。

——いける。オレンジ色の髪を揺らし、縦横に鎧を振るいながら、ニコは早くも確信していた。不規則な軌道と長いリーチを誇る触手での攻撃は確かに強力だが、サンゴはそれ以外の手札を持たない。純粋な力のぶつけあいでの優勢を確保した以上、もはや勝利は目前だった。

当然ながら距離が詰まるごとに鞭が到達する間隔は短くなる。指数関数的に密度を増す打撃にも高崎堅悟のスレイブは余裕を保ち、自らとその背後の主人に迫る暴力のベクトルを的確に相殺していく。引き戻された触手が再び放たれようと力を溜める様が、唸りを上げる一の手をおとりにするように、迂回機動を取って続けざまに放たれる鞭が。サンゴの攻撃とその意図そのものが、ニコには手に取るように見えていた。

もはや予知じみた正確さで衝突点に鈍色の凶器を先置きしながら、戦士はじりじりと前へ進む。一切の狭容がないクリリアな視界が十分な接近を告げた次の瞬間、ニコは鎧を水平に身体の前面に構え、強烈に床板を踏み込んだ。

「やあああああつ！」

「ッ！」

蜘蛛の巣状のひび割れを足下に残して猛然と突進するニコに、サンゴはカウスターを叩きつけるべく最大径の触手を全力で飛ばす。だが、ニコは接触の瞬間ハンマーを捻ってその衝撃を受け流す。逸れた触手は薔薇の頬を掠り、僅か一筋赤い線をつける。それも潤沢な魔力が一瞬で癒やしてしまった。

一瞬で青髪の少女の面前に躍り出たニコは、勢いそのままに捻り込むような突きを絞り出した。咄嗟に触手を交叉させ楯とし、サンゴはそれを受け止める。だが、必死の防御をニコの一撃は強引に突き破り、多数の触手を従えたサンゴを容易く撥ねる。

「サンゴッ!!」

悲痛な声で白衣のマスターがスレイブを呼ぶ。だが、女の真横を飛んだサンゴは重力に引かれてフロアに落ち、触手を顕現する力を失い質量を失い更に床をバウンドし回転し滑っていく。

「ます……た……」

ニコ、ジェイミー間の倍近い後方で、ようやく止まったサンゴはうつぶせであった。焦点のぶれた瞳で主を見上げ手を伸ばすが、それ以上のことは何も出来なかった。

「わたしたちの勝ち、です」

ニコは戦鎧を真っ直ぐに突きつける。

「どうしてよ……」

白衣の女は力なく膝を落として俯き、見開いた目を揺らす。

つかの間半開きの下唇を怒りに震わせた後、激情に歪んだ顔をニコに向けた。

「どうしてあんたみたいな尻軽が！ 私のサンゴより強いのおおっ！ 立ちなさい、サンゴ！ こんな売女に負けてんじやないわよおおっ！」

もはや我を忘れて食ってかかると、ジェイミーは遙か後方で倒れ伏すスレイブに振り向き、自分勝手にわめき散らした。

無防備な背中を前にしたニコも、そのマスターも、その醜態を受け不快げに表情を歪める。ジェイミー本人すら己の卑小さに耐えきれないとばかりに白衣の襟を掴み潰して浅い息を吐く。

——ただ一人、サンゴだけが違った。

☆

マスターに、見放されたと思っていた。

醜い触手を振るうほか何の能もない私は、この人のつけた名に値しない存在なんだと。

せめて少しでも役に立とうと、心を殺してほかの子を寝取る手伝いをした。そのたびにマスターが私を見る目は凍っていった。

マスターはとつくの昔に私を嫌いになっている。ニコを寝取つたら今度こそ捨てられて、私は誰にも必要とされないまま消えてしまうのだ。

ほんのさつきまでそう思っていた。

——全部勘違いだったのだ。

「私のサンゴ」と、確かに言った。こんな情けない私を、まだ自分のスレイブだと。

証明したい。心の底から願いがこみ上げてくる。マスターがくれた名前にふさわしい強さを。

そのためなら、たとえこの命が燃え尽きても構わない——！

☆

堅悟の目が、青髪の少女に起こった異変を捕らえた。サンゴが両手を突いて立ち上がったのだ。

強烈なニコの一撃を喰らって三半規管に失調を来したのだろう。細い足が子鹿のように震えている。瞳は焦点がぶれ頭の位置すら定まらず、とても戦える様子には見えない。だが、唇を引き結んでニコに向かうその姿に、堅悟は言いしれぬ不安に襲われた。

己のスレイブより更に幼い少女の背からまた触手がわき出す。ニコがスレッヅハンマーを持ち直し、構える。だが、その触腕が伸びてくる気配はいっこうに見えなかつた。

もはや操る力もないのでは？ 堅悟は痛ましげに眉をひそめるが、ほどなくその予測は裏切られた。ぶよぶよと蠢く粘質な肉塊が、早送りされる植物生長の動画じみた急速さで乾いていったのだ。

質量を圧縮するように、肉の幹は枝へと細まっていく。表皮がひび割れ皺が寄り、まだら模様か剥がれて落ちる。そして——まるで青白い肌の下を流れる血潮のような深紅が、その姿を現した。

不穏な気配を感じたニコが、血相を変えて地を蹴る。だがサンゴの変化はあまりに急速だった。

磨き抜かれた宝石のような赤い枝は、分かれ、増え、繋がり、面をなす。細く長い菱がつづら折りに無数に重なり、幾何学的な調和を形作っていく。

全ての変化を終えたその時、もはやそれは触手ではなく——羽であった。神々しく、禍々しく、圧倒的に輝く血赤珊瑚の羽であった。

サンゴが、一つ羽ばたく。床を叩いた風が浮力を生んで、軽い童女を宙に舞わせる。宝玉の翼が千変万化の煌めきを見せた。

「ニコ、止まれ！」

はっと正気を取り戻し、堅悟は鋭い声で己のスレイブを呼ばわる。肉薄するニコに向け、硬質に光る羽が無数に射出され、唸りを上げて殺到する。

「！」

少年のスレイブは咄嗟に急制動をかけ鎚を消滅さ

せ、側転飛びで離脱する。一瞬遅れてニコの立っていた空間の僅か後方に矢玉の群れが突き立つ。

ニコはフリップとバックステップを不規則に繰り返しながら距離を取る。その間にどういう原理か空中にホバリングしていたサンゴが滑るように前進し、またジェイミーを庇う位置に陣取った。

「サンゴ……？」

まるで何かを確かめるように、白衣の女がスレイブの名を呼ぶ。サンゴは主人に振り向くと、こくりと小さく頷いた。

「退くぞ！」

堅悟は短く叫んで姿勢を低く保ち後方へ走り出す。あれは、まずい。あまりにも相性が悪い。

機銃斉射じみた羽の矢は鎚で払うには数が多すぎる。それは、堅悟に直接照準を向けられればニコの打つ手がなくなることを意味する。

戦場を移す必要がある。インフォオメーションセンサーに立て籠もるのも手だが、それでは奴らの接近を防ぐためにニコの機動が制限されてしまう。

エスカレーター周囲には十分な太さを持つ柱が並んでいる。あそこなら身を隠しながら足を使うことができる。

だがその矢先——ずりりと、頭上から黒い影が降り、重い地響きを立てて堅悟の眼前に立ちふさがった。この場の誰も忘れ去られていた存在が、堅悟の目論見を打ち砕いた。

粘質に蠢く巨軀は、ニコが殴り飛ばした不適合スレイブである。

決して回復したわけではないだろう。傷跡はミンチのような内部を晒し、ぼたぼたと組織液を零している。どこが顔かも分からないそのバケモノが、無言のまま激高を露わにしているように思えた。

「ご主人様！」

「ニコ、後ろ！」

悲鳴のようにニコが叫ぶ。不適合スレイブがその太い触腕を真横に振りかぶる。自分を案ずる少女の手に、堅悟は短く叫び返した。

骨の一本や二本は折れるだろうが、ブルームが解ければ治るはず。来る衝撃に備え堅悟は腕を交叉させてタイミングを合わせ後ろに飛ぶ。

想定通り、サンゴは機と見て火力をかぶせた。深紅の銃弾が堅悟に迫る。ニコは――射線に身体を割り込ませて両手を広げた。

（このバカ――！ わざわざお前が痛い思いをする必要なんてどこにもないだろうが！）

少年は心の内で絶叫する。向こうの目的がニコを寝取ることである以上、堅悟のことは殺せない。だが、思考を音声に変換するいとまさえない。

ほぼ時を同じくして少年は触手の腕に殴り飛ばされ、そのスレイブは全身を緋色の顎に食いつかれ苦鳴を上げる。

ファミリー向けセレクトショップのTシャツ陳列台に頭から突っ込んだ堅悟は意識を途切れさせ、それからの顛末を知ることにはなかつた。

☆

気を失った堅悟さんが倒れていた。途切れ途切れの吐息を零し、痛ましく身を震わせて、ぐったりと力なく。起き上がる様子は――ない。

許せない。肩に鎖骨に豊かな胸にと、無数に突き立つ硬質の羽を筆で抜きながら、凍えるような怒りを燃やし、再びニコは鎚を握りなおした。

異物が取り除かれた傷口から鮮血が滴る。魔力を集中させてそれを塞ぐ。一刻でも早く結界を解かせようとジェイミーに向け床板を蹴る。

「――ひあつ!?」

だが、ニコの身体もまた、もはや万全ではなくなくなっていた。小さな身体は鎚の重さを支えきれずにつんのめり、

幼児のように転んでしまう。慌てて立ち上がり臨戦態勢を取ろうとするが、四肢が痺れて動かない。

「毒!？」

愕然とするニコだったが、もはや全てが手遅れだった。もぞつく少女に、ずるずると触手の塊が這い進んで迫る。

無防備な胸を、二の腕を、醜悪な粘膜質の肉塊が搦め捕り、はしたなく両脚を広げた大の字でその巨軀に磔にしてしまう。持ち主の手を離れたスレッジハンマーが忽然とその姿を消した。

「は、放してくださいっ!」

甲高く叫びながら、ニコは緩慢に身をよじる。力が出ない。どれだけ意識を集中しても。こんな拘束、素手で引きちぎってしまえるはずなのに。

裏拳を叩きつけようと腕を引く。動かない。ならば脚はと膝を持ち上げる。動かない。主の危機から激情に陥ったニコは、力任せの脱出に固執して無為な抵抗を繰り返す。

ジェイミーは仇敵の無力化を確かに見て取り、可憐で神々しく姿を変じたサンゴの前に出た。

「サンゴ」

「はい、マスター」

「よくやったわ」

「はい――マスター」

俯き加減で呟いたマスターに、サンゴが答える。その口元が誰にも気付かれぬほど淡く、欲びに綻んでいた。

「さあて――手間をかせさせてくれたわね」
ジェイミーは似合わぬ態度を取ったことをごまかすように、ことさらに悪辣な嘲笑を浮かべる。ヒールを鳴らしてニコに歩み寄ると、少女を捕らえた怪物に真横から鍵を突き込んだ。

不適合スレイブがつんざくような悲鳴を上げて癡撃する。骨を折らんばかりに少女の細い体軀を締め

付ける。

「いぎ……あああつ!」

ひとしきりニコを苦悶させると、怪物は突如脱力する。そして、それでも抵抗は出来ない少女の服に方々から触手を潜り込ませ始めた。

「い、いやですつ! ……ひあ!」

かぶりを振る少年のスレイブに構わず、醜悪な肉ミミズたちがベルトに留められたニーソックスの中に、びつたりとフィットしたタンクトップ型の上着の中に、極短のプリーツスカートの中に潜り込む。

弾けるような瑞々しさを秘めた肌が、ぬめりを帯びた異形の太縄に押したわめられ、粘液にまみれてかり出す。

びつしりと繊毛を生やしたモップ型の触手が敏感な脇腹を撫で、絵筆のような個体が内ももをはく。それでも焦らすように胸先や恥部は巧みに避ける。ぞわぞわと総毛立つようななねちつこい愛撫に、喉の奥から子犬が唸るような怒りの声が漏れた。

とても本能だけに忠実な不適合スレイブの動きではなかつた。まるで、スレイブの扱いに長けた熟練のマスターの手際そのもののような――。

「そうよ、私がいっつを支配して、直接お前を虐めてあげてるのよ。嬉しいでしょう?」
「き、きもちわるいだけですつ……んんうつ!」

ニコの考えを読んだように、得意満面でジェイミーが種明かしをする。
眉をひそめて少女は否定するが、無数の粘腕は絶妙の力加減で全身を採みほぐして勝気を削いでいく。びりびりと痺れる快美の電流が、弱く、だが広くそこかしこで弾け、スレイブの自分を呼び起こそうとする。

堅悟に抱きしめられ、愛された余韻はいまだ消えてはいなかつた。子宮の奥底に留まって、無限の活力を与えてくれた大切な記憶が、淫らな振動に

よって背筋を駆け上がる不快な悦波にすり替えられていく。望まぬ喘ぎが零れそうになるのを唇を噛みしめ押しとどめる。

(くやしいよう……!)

サンゴを甘く見た。周囲への警戒を怠った。ニコの失敗のツケを堅悟は全部肩代わりして傷ついた。

今すぐにも彼の側に駆け寄りたいたいのにも、もがくことも出来ずにジェイミーの操る触手に翻られる現状が歯がゆくて仕方がない。

なにより——彼が自分に灯してくれた快楽の残り火を、こんな風にご利用されるのが許せなかった。大切な記憶を踏みじじる卑劣な行為に重たい怒りが胸に逆巻いていく。

「う……サンゴはいいのっ?! 自分のマスターが、こんなっ」

反攻の手を封じられたニコは、せめてもとかつての仲間に呼びかける。

「……わたしは、マスターの役に立てればそれでいい」

サンゴはほんの一瞬答えに窮したものの、それ以上に揺らぐことはなかった。

説得は出来そうもない。一途な言葉は胸を疼かせ焦りを膨らませる。無駄と知りながらまたもがく。

窮地に追い込んだはずのスレイブを見て、ジェイミーは——何をすることも見せなかった。

「……? マスター?」

どこか上の空のマスターを見上げ、サンゴが呼ぶ。「あ、え、ええ、ニコを寝取るのよね」

その声にはつと意識を取り戻し、ジェイミーが慌てたように返事をした。

なにか、変だ。女の異変を察したニコは、脱出の糸口を求めてその理由に思考を巡らせる。

「マスター、いつも通り、わたしが」

「……そうね、いつも通り貴女がなさい」

だが、当然ながら彼女のスレイブもそれに気付いた様子であった。そして、いち早くマスターの心情に達したらしく、責め手を変わるよう申し出る。

ジェイミーは逡巡を見せながらも提案を受け入れ、怪物に突き込んだ鍵をサンゴに貸し与える。

「触手はもう出せないから……しばらく貴方が代わりになつて」

童女は鍵を受け取ると、静かな声で不適合スレイブに語りかける。機械の動作を確かめるように無数の肉腕を蠢かせる。

「ニコ……容赦しないから」

そしてライバルへと顔を向けると、同じく平板でありながら確かに温度の下がった声音で宣言し、新たな触手を巨軀の中から引き摺り出した。

「ああ、やつ……ああおとおおっ?!」

もはや先ほどのやり取りの意味を考える余裕さえない。触手はすかさず赤昏い粘膜を見せる口内に潜り込む。ニコはたまらずぐもつた悲鳴を上げた。

ハの字に開かれた両脚の間をくぐって鎌首を持ち上げた肉器具は、まるで茎部だけが異常に伸びた本物の男性器のような形をしている。

淫器はずるずると喉奥に向かい口内を満たしきる。ぐちゅ、ぐちゅりと竿がのたうち、桃色の舌を、狭い口蓋を好き勝手に廻り回す。

長大な陰茎は征服の欲びをひとしきり見せつけ、早くもピクピクと末期の痙攣を始めた。次の瞬間その先端からどろどろに粘り着く腐液が迸った。

「んぶう?! んっ、んぐ……うえええっ……」

ニコは見開いた目を白黒とさせて身悶えた。汚濁が口いっぱい垂れ流される。縛められた四肢がピクンピクンと打ち震え、服地に包まれたままの乳房がたぶんと揺れる。

疑似陰茎は射精を終えると、役目は終えたとはかりにその身をずるりと抜く。ニコは慌てて唇を閉じ、

リスのように頬を膨らませて牡汁を溜め込んだ。(こんなたくさん……飲むの、つらいよお♡)

鼻息が抜けるたびに強烈な刺激臭が嗅覚を焼く。えずきそうなほど気持ち悪いのに、何故か子宮はきゅうと疼いてしまう。

このままでいれば、いけない気持ちになつてしまふ。早く飲んでしまおうと、調教の行き届いた少女奴隷は喉を鳴らそうとして——ようやく自分の行動に愕然とした。

「飲めばいい。私たちにとつて、精液は飲むもの」

見透かしたように、サンゴが吊り上げられたスレイブを見上げる。ニコはぎくりと身を強張らせた。

口に出された精液は、一滴も零さず飲み干さないといけない。変だと気付くことも出来ないほどに、スレイブのルールは心に染みついていたので。

条件反射に意地だけで逆らい、舌を突き出して唾液と混じったスペルマを吐きこぼす。

床に落ちた白濁がびちゃびちゃと下品な音を立てて水溜まりをつくる。戻しきつても粘つく汚穢は歯に舌にこびりつき、空気と混じつて更に淫臭を強めた。

「はあ……はあ……ごひゅじん様いがないのなんて、まずいらけですっ」

「遠慮しなくてもいい」

粘質の液体に舌を連れさせながらも、ニコは虚勢を張る。だが、サンゴは見え見えの強がりなど歯牙にもかけず、再び肉棒触手を突き込む。

「我慢できなくなるのが、早いか遅いかだけ」

「んぶ!! うぐううぶうううっ!!」

乱暴に喉奥までねじ入れられて、少女はぐもつたうめきを上げる。残り汁が攪拌されて洞内で白く泡立ち、ぐちゅぐちゅと恥知らずな水音が鳴る。

再び淫らな香気が立ち上り、小さな鼻腔を直接に満たす。嗅ぎ慣れた匂いと受け慣れた粘膜への陵辱



は、確実にスレイブの理性をこそぎ取っていった。
「んぐ、ッおうづッ! つはあ、わひやひは……
けんごひゃん、の、おお、おッ……おつぐ……つひ
ゆれいぶれひゅつ!」

ニコは半ば自分に言い聞かせるように宣言する。

だが、食道に至るまで性器として躡けきられた愛奴の口は、思うがまま身勝手に蹂躪する剛直を柔軟に受け入れてしまう。胃の中全部を戻してしまいそうな激しいイラマチオを受けているのに、擦り上げられる舌が喉が、被虐の悦びにわななきながら触手ペニスに縋りつきたがる。

だらしなく緩みそうになる目尻を、淫悦を嘔みしめてきゅんきゅんと跳ねたがる下腹を、無理矢理に引き締めて、快楽を押さえ込もうとニコはあがく。

「みんな初めはそう言う」

だが、サンゴは無駄と言わんばかりに切り捨てて、ぐぼぐぼと可憐な口を蹂躪し続けた。

「うぐ……ううううッ!」

苛烈な抽送に頭が揺らされる。限りなく恐怖に近い焦燥が心を蝕む。

サンゴは知っているのだ。自分たちが何をされたら逆らえないか。どれだけの強さで責められると一番気持ちよくなるか。そして——どんな順序で追い詰められたら墮ちてしまうか。

考えてみれば当たり前のこと——だつてわたしたちは同じような躡けを受けて、それぞれのマスターに引き渡されたのだから。

(こんなこと考えちゃダメ、余計にサンゴの思い通りになるだけだすつ……あああでもお……)

芽生えた弱気は、余分に快楽の遮断を困難にする。カリ鬚が食道の粘膜をこりこりと耕し、青筋の浮いた幹が唇を捲り返すほどに入入りする。こそがれる喉粘膜を保護しようとわき出る粘度の高い唾液を、触手陰茎はじゅぶじゅぶと掻き出す。

顎の下を泡立ったスペルマと唾液のミックスジュースが流れ落ちる。気色の悪い感触にぞわぞわと背筋をマゾヒスティックな電流が駆け抜ける。

囚われのスレイブの変調を、サンゴは決して見逃さなかった。操る触手陰茎の抽送が一層激しさを増し、可憐な口唇を抉り抜く。

ぐぼぐぼと、ぐちゅぐちゅと、肉腕は舌先から喉奥までの長い距離を何度も何度も往復する。性具のように扱われることで自身を性器だと錯覚した喉は甘い媚電を感じ出す。強い悦波が直に響いて、頭の中は見る間に淫楽に染まっていく。

脳髓まで掻き混ぜるような口唇辱にだらしなく瞳を濁らせたニコの様子に、頃合いと見たのか肉の淫具はぶるぶると震えだす。

(いやッ、お口の中にだされちゃいますうッ♡)

射精の前兆を感じ取っても、ニコは淫器を吐き出しそうとすることすら出来ない。それどころか浅ましい唇は甘えるように触手ペニスに吸いついてしまう。

サンゴはまるでその心の中を覗けるとも言うかのように——。

「ニコ——飲みなさい」

静かな声で命じた。次の瞬間どぶ、ぐぼ、ぐちゅ! と、触手陰茎は生臭い子種汁を口内に流し込んだ。

「んぶうう!!」

勢いよく喉を叩く濁った流水に、胸郭を引き攀らせてビクビクと悶える。触手ペニスはその鈴口から際限なく汚濁を吐き出す。たちまち口腔は満杯になり、鼻腔に逆流してみつともなく溢れだす。

スペルマの鼻汁は敏感な粘膜を強烈な臭気で灼き、どろどろと粘ついて呼吸を止める。激しい責め苦に息の上がつたニコは、耐えきれずにそれをこくりと飲んでしまった。

「んぐ……ええええッ! くひゅああいつ、ざあめんくひゃいよおおッ!」

重たく食道に張り付きながら穢れた肉汁が流れ落ちる。汚泥はたつぷり胃の腑に溜まり、呼気に精液のフレーヴァーを施す。

白目を剥いてしまうほどのきつい虐悦が脳髓を侵した。小さな身体が卑猥にぶるぶると打ち震える。瞬間、ニコをギリギリのところまで押しとどめていた自制心がブツンと途切れた。

「んぶええうううう、つぶうらん……あああまじゅうういん! ざあめんどうろくひゃくてまじゅいのにいん♡」

唇を窄めて鈴口に吸い付き、浅ましく喉を鳴らしながら、あどけない声は媚びるように上擦っている。淫欲に瞳はどろりと濁り、頬が色づき妖しく火照る。

熱い子種が内臓を煮溶かしていた。子袋にべつたり降りかかるような被虐感が、開発の行き届いた奴隷を狂わせていた。飲んでも飲んでも飲み干しきれない精液の水攻めに、醜悪な粘体に縛られたままガクガクと空腰を振り立て——。

「ん、あああ! あぐ、ううづいぐうううッ♡ せええきのもんでイッちやいまひゅうううッ♡」

徹底的に躡け込まれた淫らな台詞をわめき散らし、高嶺堅悟のスレイブは彼の敵にアクメへと導かれてしまった。

ビクンビクンと下腹が波打ち、剥き出しの愛らしい臍が跳ねる。毒で痺れたはずの両脚がぐつと持ち上がって内股になり、淫熱を子宮に閉じ込めようとするかのようにぶるぶると震える。

頭の中までスペルマ漬けにされたかのように、思考が真っ白に染まる。過剰に息む下腹の圧力に押し出され、いまだ下着に包まれた秘部からぶじゅりと恥液が進った。

☆

「はあ……は……はつ……つやああんッ!」

いたいけな少女が拘束されて

ひっひっ

あ

は...

も...
ヤダあー...

あはあ



肉人形と地獄の鬼畜兄弟(第)

漫画 COMIC

おおたたけし

や...
やっと帰って
きた...

はやくっ
はやくコレ...
はずしな
さーよ...!!





まあだ
抵抗できる
のかあ

ひさびさに
加工しがいのある
メスガキだ
なああ♥

ひた...
ひた...



でも
こっちは方は
...と

もう一息って
どころか

魔界の力を
手に入れて
から...

肉人形づくりも
ずいぶん楽になっ
てきたなあ♥

いやあ
あーっ!!

あぐっ
うーっ

あっ



まさか死んでからも
人形づくりが
つづけられる
とはなあ♥

俺のぜい肉ちゃん
使ってみようか
あ♥

ひい...
何なのよ
コレ...っ



あつ

ひい!?



えっ
あつ!?

やあ
あーっ



入って
まきこ
ーっ

うじこてる…っ

頭の
なかっ



おお
よく似合うじゃ
ないか

これから
頭の芯に直接
媚薬を流し込んで
やろうねええ♡
チポの事しか
考えられない立派な
肉人形になるぞお♡

あ

あ



あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

あーっ!?!

こんな所が
クリトリスより
感じるなんて

思いも
しなかった
だろおお

は
あっ

ケツ穴とまんこ
一日中ほじられても
音を上げなかった
未来ちゃんでも

はひやあ
あーっ!?!

あ
がはっ

これは
キツイねえ
え

ホーラ

未来ちゃん
はじめての
おちんぼ
ですよー

おげえ
えっ!!



お前を
ほしがってる
ヤツからは

喉もまんこに
仕上げてくれて
依頼だからなあ♥

おげえ

おっ
がんばれ
未来ちゃん♥

ぬ
おっ



喉犯されて
ま■こ汁
出てるぞお♥

素質は
十分だなあ♥

おえっ

げええっ



鼻の奥まで
染み込んで
逃げられない
だろおお♥

おえっ

そうら
チ■ポの臭いは
どうだあ？

おっ



喉にカリが
ひっかかって
ケイレンして
るなあ♥

げっ

チポが
よろこんでるのが
分かるかあ♥

おえ

おっ



くらっ...

しほりたての
チポ汁を

味わって
みるお♥

お

おっ



お

っ

最強の女子校生 初めての敗北の刻!!

スレイブハンティング

獵辱

スレイブハンティング

第三話 ペナルティー

小説 NOVEL おおぐまたぬき 大熊狸喜 挿絵 ILLUSTRATION いけだ やすひろ 池田靖宏

登場人物紹介



久遠寺火憐

代々続く忍者の家系「久遠寺流忍術」の第十七代頭目。優れた才能とカリスマ性を持ち、多方面で活躍している。



霧 霧華

幼い頃から格闘技を独学で習得し、公式・非公式を問わず、格闘試合で一度も負けたことのない天才女子校生。

黒の十一号

謎の組織の一員で、「The Fox Hunt」のゲームマスターを務める仮面の男。丁寧な口調で残酷なゲームの説明を楽しそうにする。

前号までのあらすじ

謎の組織に誘拐され、強姦魔がひしめく孤島での逃走ゲームに参加させられた火憐と霧華。火憐は華麗な体術で敵を倒しながら進むが、強大な力を持つ大男に捕まり、抵抗も虚しく処女を散らされてしまったのだ。

火憐と分かれて五分ほどして、霧華は放置されたマウンテンサイクルを見つけた。「自転車……」慎重に周囲を気にしながら裸身を屈めて、廃棄物を確認する。乳房を隠しつつ屈むと、柔らかい巨乳は細いヒザでタツプリと押されて、左右に丸く、はみ乳。合わせた腿の間からは、いまだ自分の指しか知らない清楚な割れ目が、柔肉の圧でムッチリと挟まれ上気していた。無人の荒野で、少女は手足以外、裸で屈む。その姿は近くの茂みに隠されたカメラによって、背後の斜め下アングルで大写しにされていた。そんな盗撮に全く気づかず、追われるエモノである格闘娘は、足下に転がる自転車を観察する。白地に赤いラインが格好いいものの、タイプは古く、アチコチ汚れていた。「……使えるかな？」追っ手であるハンターたちの気配が周囲にない事を確認しつつ、自転車を起こす。前輪ブレーキのワイヤーが切れてしまっている以外、特に問題はなかった。

「うん、これでゴールに向かおう！」
 なんとと言っても、ドコに強姦魔が潜んでいるか解らない無人島での、理不尽な逃走ゲームである。なるべく早くゴールするに越した事はない。サドルの汚れを払うと、鉢巻きの格闘少女は裸のお尻を浮かせて、自転車を走らせようとした。その時ドコかのスピーカーから、口調だけは上品な仮面のゲームマスター、黒の十一号の声が。「さあ皆様、二人のフオックスはそれぞれ、東と北西へと逃走を開始した模様です。おや、意外と近くにハンターたちが」
 「えっ——あわわっ！」
 ハンドルに片足ペダルという不安定な姿勢で、危険な情報を聞かされたせいだろう。走り出すどころか、その場でアワアワとよろけ倒れてしまった。
 ——ガシヤッ！
 意外と大きな音を立てて、自転車が横倒し。霧華は四つん這い姿勢になってしまった。男たちが近くにいる——。焦った少女は、剥き出しの乳房もヒップも隠す事を忘れ、近くの小さな岩に身を潜める。「だ、誰かに見付かったら……ああっ、そういえばコッチだつて……！」
 つい、自転車から隠れるように岩陰に隠れたけれど、ここは開けた砂の荒野だ。岩陰に隠れたところで、周囲のほとんどに對しては、裸の背中が丸見えでしかない。慌てて、しゃがんだまま岩を背負う格好になって周りを見回す。
 ——ドキンッドキンッドキンッドキンッ！
 性的危機での緊張に、心臓が異様に高鳴る。ツルツルの肌に、ジワツツと汗が浮く。
 (ハ、ハンターたちは……?)

平原にポツンと突き出した小さな岩を背にして、巨乳に両腕を食い込ませて乳首を隠し、屈んでヒザを合わせて秘処を隠す、警戒少女。しかし数十分のような数秒が過ぎてても、近くどころか地平線にすら、人影は見えなかった。(……誰も、こない……)
 僅かだけど、意識が落ち着きを取り戻して来る。と、首輪から、優雅で嘲りを隠さない富豪たちの笑い声が聞こえてきた。どこかで、コチラを見ているのだろう。どこかで、コチラを見てくる。屈辱感と怒りが湧いてくる。「な、何さっ……あの男っ、今に見てなよっ！」きつと火憐さんだつて、恥ずかしい思いをさせられた——。しかも、自分の反応を笑われたような、富豪たちの嘲笑があった。もしかしたらと周囲を見回すも、カメラらしきモノは見当たらない。「……でもきつと、ドコかにカメラがあるんだ。覗き見なんて、インケンなヤツっ！」
 仮面の男に怒りながらも、周囲を警戒しつつ裸身を隠して、岩陰から自転車へと足早に向かう。「とにかくゴールして、一発ブン殴ってやる！」目指すは北西のゴールだ。霧華は勢いのまま、マウンテンサイクルに乗車。「待つてなさいよっ——ひゃあっ！」怒りの為、つい普段の調子で跨がってしまう。と、処女の割れ目と後孔が、サドルに触れた。反射的に、サドルから飛び上がった皮のパーツは、ちよつとだけ冷たくて意外にもピシッと堅い。しかしそれ以上に、敏感な性粘膜への接触によって、秘処から下腹部を通った背筋まで、未体験の鋭い感触に走り抜けられていた。

「び、びつくりした……」

割れ目の内側、ショーツどころか皮膚すらない、穢れなき粘膜。

強姦魔から逃げるという状況も手伝ってか、触れた瞬間、知らない何かに胎内へと入られてしまうような、危険な焦燥感を感じたのだ。

やや過剰に反応してしまったのは、羞恥の身体検査をされたからだろう。

サドルが剥き身の秘処に触れた瞬間、後孔や粘膜や処女膜までも男たちに触れられた事実が、脳裏を過つたのだ。

そんな瞬間の裸腰は、背後と斜め前からのカメラで映されていた。

「……まったくっ！」

粘膜から感じた感覚に、少女の理性はとでも恥ずかしがる。思わずサドルを睨みながら、自分の迂闊さに立腹していた。

首をブンブンと振って気合いを入れ直すと、気をつけて裸尻を浮かせながら、ペダルに力を込める。

「せーのっ、えい！」

放置されていたから、ペダル関係も汚れが固まっ
ていて堅かった。しかし力を込めて走り出したら、
すぐに滑らかになる。

「よし、行つけーっ！」

ペダルと一緒に、気持ちも少しだけ軽くなった。

デコボコの乾いた大地を、裸のまま、マウンテン
サイクルで駆ける霧華。

バックに突き出したヒップは菊肛まで陽光を浴び
て、閉じられた割れ目と一緒に、異性を知らない極
薄い色素を見せつけていた。

身体検査の影響か、桃色の粘膜は僅かだけ充血を
して、更にうっすらと蜜を纏っている。

下向きで揺れる二つの巨乳は、デコボコの地面に
合わせて、細かく大きくプルプルと揺れていた。

「……うう、急ぎたいけど……」

数分も走ると案の定、立ちっぱなしで脚が疲れて
きたので、今度は注意しながら座ってみる。

体温と風のおかげだろう、粘膜の蜜は既に消失。
サドルに乗せた裸尻は左右にはみ出てプリンと揺
れて、前側では赤い割れ目に食い込ませていた。

自転車で逃走する以上、なるべく隠れる場所のな
い、開けた場所を選んで走る必要がある。

陵辱男たちの視線に隠れながら逃走するべき事を
考えると、真逆の選択だ。

しかしスピードを出しているのだから、狭い場所
とかを走っていて不意打ちをされると、一発で大
ダメージを受けてしまう危険性がある。

それに開けた場所なら、逆に男たちの姿も見つけ
やすい。

「周囲にハンターたちの姿はなし！」

不整地だから、ハンドルに多少の力は必要。だけ
ど走る事で風を受けて、意外と気分がよかった。

「よしっ、イケるイケるっ！ そっれえっ！」

更にスピードを上げようと、再び腰を上げて前屈
になってペダルを踏む。

鉢巻きを靡かせながら、格闘グローブとオーバー
ニーとシューズのみという姿で自転車を走らせる、
裸の少女。

後ろに向かつて持ち上げられたヒップが、また太
陽に晒される。

薄カフエオレ色の後孔と、閉じられた桃色の割れ
目は、捧げるように剥き出しにされていた。

そんな姿を、遠くから観察している一人の男。

「……………」

ツリ目で瘦せた眼鏡のハンターは、双眼鏡を使っ
て、忌々しげに少女の行動を探っていた。

その事に、霧華は全く気づいていない。

自転車少女は、三十分ほどでゴール手前まで到着
していた。

荒れ地を走破した霧華が見たのは、ゴールの高い
壁の前に広がる、なんと遊園地。

「うわあ……こんな場所もあったんだ」

廃墟と化している施設は、広い範囲で低い柵に囲
まれていて、柵はゴールの外壁と繋がっていた。

周囲を窺うも、人の気配はなし。

「ゴールの出口は、遊園地の向こうって事だね」

なんにしても、もう自転車は必要ない。施錠され
た入り口の脇に、乗ってきた自転車をソッと倒した。

「乗せてくれて、ありがとね」
小声で労を労い、ハンドル部分をナデナデすると、
大胆にも柵を跨いで施設に侵入。

柵越えの際に大きく開かれた股間の映像は、富豪
たちのモニターにも捕らえられていた。

遊園地に侵入すると、霧華は右腕で巨乳を、左手
で股間を隠しつつ、ヒソソリと移動する。

白鳥が休む人造湖を迂回し、廃棄された立て看板
に隠れ、設置された小型のアイスクリーム屋さんの
陰などに潜みつつ、壁の出口を目指す。

遊園地の中を、肢体を両腕で隠して、物陰から人
の気配を探る裸の少女。

ハンターに注意するあまり、背後の上からその姿
が映されている事に、気づいていない。

そして三十分。園内でも広い場所は避けて移動
していたから、時間がかかった。

今、霧華の目の前には。

「ゴールの出口だわ！」

高さが二十メートルを越えそうな、鳥全体を囲む
白い壁がそそり立っていた。目の前には「二番」と
記された、トンネルのような大きなゲート。

入り口の左右には、成人男性の腰くらいの高さに
揃えられた常緑樹の茂みがある。

「というか、この一角の植物群から入り口付近だけを刈り取った、という感じだろうか。」

高き三メートル程のアーチ型をしたトンネルは、中が暗かったり右側に緩くカーブしていたりで、奥は見えない。

間違いない。霧華は数多い強姦魔たちに襲われる事なく、無事にゴールへと到着したのだ。

心に、大きな安堵感が湧いてくる。

ここまでの行程で、はるか遠くに数人の男を確認していた格闘少女。遠目だから解らないけど、ハンターたちは、たぶん裸だった。

それらを振りきり、今出口の前に立つ自分。

「あたし……勝ったんだっ！」

思わず言葉が漏れて、トンネルゲートへと一歩踏み出す。

火憐さんと二人で、ここから逃げる――。

脳裏にそんな言葉が浮かんだと同時に、ふと足が止まった。

(……逃げる……?)

それは、コレまでの格闘人生で一度も負けた事のない、常勝少女だからこそ陥った、危険な思考。

身体検査と称して裸に剥かれて、富豪たちに全てを晒された時、一秒でも早くここから逃げ出したいと思った。

しかし逃走しながら、ハンターたちと遭う事もなくアッサリとゴールへと到着すると、不意に怒りと悔しさがフツフツと湧き起こってくる。

「あたし、あんな目に遭わされて……っ！」

無事にゲートへとたどり着いたものの、実際はゲームに強制参加させられて、一方的に裸で逃走という恥辱を受けさせられただけ。

これじゃ、負けと一緒じゃない――。

そう思ってしまったら、ただこのままゴールするなんて、無敗の霧華にはできなくなった。

少女は裸身を隠したまま、トンネル近くに設置されている、ボックスタイプのポップコーン屋さんの陰に隠れる。

時計を見ると、ゲーム開始から一時間二十分。

「もう火憐さんはゴール……うん、意外とハンターたちを、何十人と倒しているかもっ！」

そんな風に考えると、負けてなんかいられない。

ゲーム終了の時間まで、まだ七十時間以上は余裕にある。主催者たちも、二人はなるべく早くゴールすると考えているはずだ。

「このまま逃げるなんて、できないじゃん！」

ゴールはすぐ目の前。という安心感もあったのだろう。少女は、闘う決意を固めた。

物陰に潜む事十五分。巨乳と秘処を隠す格闘少女の視界に、三人のハンターがやってくる。

(――来たっ！)

野獣のようにも感じる男たちの声に、武闘の乙女は小柄な身体を更に縮めていた。

「……あつたぞつ、あれが出口だろうっ？」

「オレ確かに、自転車でコッチに向かっているのを見たぜ！」

男たちは息荒く「まだ間に合うかもっ」とか「待ち伏せしてやろう！」とか、やたらと大声。

存在を気づかれないように注視すると、思わず声が溢れてしまった。

「……うわあ……！」

十数メートル先の通りを闊歩するハンターたちは、やつぱり全裸。

生まれて初めて霧華が見た男性器は、欲望を剥き出しにした大きな肉塊だった。

腹の出た中年の逸物は先が黒くて太く、スキンヘッドの青年のペニスも赤く長くて、ガリガリ中年の

勃起はやや紫色で一番太い。

「あ、あんなだなんて……！」

形はそれぞれだけど、淫邪な欲求を本体いっぱい誇示している、という点だけは共通している。

あんなモノ、絶対に触れたくなんてない――。

十代少女の清潔な意識は、天に向かって堅く返り返る男性器に、拒絶と嫌悪しか感じなかった。

「あんなの持つてる人たちに……！」

闘うどころか殴るのだから無理だと、処女の肉体が一瞬怖ける。

そんな恐怖の感覚を、無敗の格闘少女は強い意識で押し込めた。

「こ、怖がつてどうするのっ、霧華っ！」

身体検査だとかで、身体を好き勝手にいじられた恥ずかしさ。

目の前のハンターたちだって、霧華たちを襲う気まんまんなのだ。

男たちは、もう数メートルまで接近している。

「あんな人たちに、負けてたまるモンかっ！」

少女は小声で自分を励ますと、ブンブンッと首を振って気合を入れた。

双乳と腰を両手で隠したまま、鉢巻き少女は男たちの前に裸身を現す。

物陰から突然にエモノが飛び出してきて、ハンターたちは驚愕と同時に喜びの声を上げた。

「うおっ、いたぞおっ！」

「なんだなんだあ、ヘッヘッヘッ！ 犯して欲しくて出てきましたっつかあっ？」

無防備な半裸少女に、男たちの勃起は更にグンッと堅さを増す。

対する霧華は両脚を肩幅に開き、右腕で巨乳を左掌で秘処を隠すという、変則的で器用な型で油断なく構えた。

「……相手は三人……！」

敵の位置と距離に、注意を払う。

裸なんて恥ずかしいけど、相手は目の前の三人だ

けだし、倒してしまえば同じ事だ。

強姦目的の男たちは、距離を取って小柄な半裸少女を取り囲む。

背後に回った細中年が、下品な挑発をしてきた。

「可愛いお尻だなあ。そんなイケナイお尻は今オジサンが、優しく叱ってあげるからねえっ！」

強姦魔たちに取り囲まれた、裸の格闘少女。

そんな無謀ともいえる挑戦は、上方や背後など複数のカメラで観察されていた。

前方でエモノを狙うスキンヘッドと中年男は、今にも襲いかかると目をキラつかせている。

「もう逃げられないぜえ…ヘッヘッヘッ！」

「どうやってハメようかなあ…まだ処女かなあ？」

「……………何言ってるのさっ！」

少女は、ジリリと近づくと前方の二人に注視。

その隙を突くように、背後の痩せ中年が、尻尻を狙って襲いかかってきた。

「尻イイイイイっ！」

前方に注意を向けていた格闘少女は、しかし素早く反応。次の瞬間には裸身を高速で左旋回させて、回転蹴り上げを繰り返していた。

同時に、ゾクリと不明な危機感を察知。

「——何っ、この感じっ!!」

尻尻に食いつかれる直前、霧華の格闘本能は、全力で迎撃を繰り返す。

「セリアっ！」

——ツガゴンツッ!

全力な左踵で顎部を弾かれた男が、悲鳴を上げて後方へと飛ばされる。

反転しての蹴り上げで、格闘少女は左足を大きく後方に引いた縦の開脚。赤い割れ目が、下からのアングルで大写しにされていた。

(この人たち…っ!)

カメラに気づかず、格闘処女は二人の男に素早く接近。感じた危機感に従って、一気に仕掛けた。

青年が逆ギレし、中年は動揺。

「つのガキがあっ！」

「こ、子供のクセにい…っ！」

少女だと見下していた事もあり、二人揃って胸ががら空き。

霧華は一瞬で気合いを込めると、スキンヘッドに向かって跳躍。裸少女の重い右飛び蹴りが極まる。

——ツズィッ!

緩やかなジャンプによって、解放された巨乳がプルたぶつと弾む。

全体重を乗せた右足首は、男の腹部にくるぶしまでメリ込んだ。

「ツオグウウッ！」

顔面どころか、スキンヘッドまで青ざめて倒れゆく男を踏み台にして、今度は出っ腹男に突撃。

両掌に集中させた膨大な気を、ハンターに向かって撃ち出した。

「ハアアッ——気功撃っ！」

「——つばしゅううっ！」

眩い気弾を腹部に食らうと、中年男は涙と鼻水と涎をこぼし、数メートル後ろへと撃ち飛ばされる。

「ゲブウウウッ！」

太った男のみつともない悲鳴と共に、青年もガクリとダウン。

無敗の格闘少女、轟霧華の勝利を、富豪たちは余裕の拍手で楽しんでた。

ストんと着地をして裸身を隠した鉢巻き少女は

「ふう…」と小さな吐息だけをこぼす。同時に双乳が弾み、裸の媚尻も小さく揺れた。

一瞬で勝負を決めた霧華。

しかし百年に一人と謳われた天賦の才は、確実な焦燥に捕らわれていた。

「この人たち、やっぱり普通じゃない！」

背後の男を迎撃しようとした瞬間、強烈に感じた違和感。直感に従い、最も重い一撃を顎に食らわしたものの、しかし。

「碎けてないし、外れてもない…っ！」

煉瓦さえ破壊する格闘少女の蹴りを食らったのに、顎の骨折どころか、気絶だけ。

しかも現在、蹴った霧華の両脚の方が、ジンジンと鈍い痛みまで感じているのだ。

手応えだけで言うなら、まるで杉の大木を相手にしているような感じ。

「なんだろ…変なドーピングでもしてるのかな」

ちよつとさり気なく言うモノの、こんな相手がまだ二百人以上とかいる。

(このまま戦い続けたら、あたしたちの方が大ダメージだよ!)

負け知らずな格闘少女が、生まれて初めて、戦いに、そして男性に対し、恐怖を感じた瞬間だった。

そんな事を考えていたら、倒した三人の首輪が警告音を発し始める。

「えっ——こ、コレって…っ！」

焦る霧華の首輪から、ゲームマスターである黒の十一号の声が聞こえた。

「おやおや霧華嬢、早く男たちから離れませんか？」

強姦魔たちが押し寄せてきますよ。くっくっく」

「ひゃっ——つな、何よっ！」

慌てて裸身を隠して、身を屈める。

そんな可愛らしい姿をモニターしながら、仮面の男は続けた。

ハンターたちの首輪は、戦闘不能になったと同時に警告音と電波を発信。他のハンターたちに自分の場所を教えるという。

つまり今この瞬間にも、大勢の強姦魔たちがエモノの場所を知り、ここを目指しているのだ。

こんな場所で、ノンビリなんてしてられない。「もつとも、霧華嬢がこのまま犯されたいとご希望でしたら……お引き留めはいたしません」

「ひ、卑怯モノっ！」

悔しい思いを吐き出しながらも、少女は裸身を隠して逃走するしかなかった。

叩くとコチラもダメージを受ける男たちが、大勢やってくる。もう悔しいと言つてられない。

（男の人が相手でっ、しかも三対一で、圧勝したんだもん……っ！）

これでよしとする――。

そう自分を納得させながら、少女はゴールを指す事にした。入り口左右の茂みが気になり、誰も居ないと解っているけど、一応確認。

手近にいた小さなヘビを捕まえて、投げ込んでみる。何も反応がなかったので、霧華はトンネルへと駆け込んだ。

間接照明だけの暗くて曲がったアーチは、見えなほど長く奥まで続いている様子。

（お、奥はいつたい……！）

恐ろしいけど、躊躇している暇はない。少女は脱出に向かつて、全力で駆けた。

緩いカーブのトンネルは、壁などにも隠れる場所は全くない。薄暗い道を、霧華はひたすら駆ける。

「はあ、はあ……あっ！」

数十メートル走った先は、突き当たり。しかし中央には「EXIT」と書かれた扉があった。

「で……出口だっ！」

やっと。勝った。これでこの狂ったゲームから火憐さんと二人で生還できる――。

喜び余って、扉を閉じる鉄製の丸いハンドルを、ギョツと掴む。

ヒヤリとした金属の感触を感じつつ、力を込めたら、ハンドルは素直に、静かに回った。

「あはっ、やったねっ！」

重たいながらもスルリと回転するハンドル。脱出への期待に、気分がウキウキと高鳴つてゆく。

霧華が勝利の喜びに震えていると、しかし突然ハンドルが、ガツチリとロック。その後は右にも左にも、ピクとも回らなくなった。

「えっ……あ、開いたのかなっ」

一瞬感じたイヤな予感を誤魔化すように言つて、扉を押してみる。

しかし金属のドアは一ミリとも動かず、逆に力いっばいに引いてみても、全く微動だにしなかった。

「なっ――何、まだ扉、開いてないじゃんっ！」

イヤな予感の中したのか。高揚していた背筋が、すう……と冷めてゆく。

焦る少女に、富豪たちの笑いと、仮面男の声が聞こえた。

「おやおや霧華嬢、ここで残念なお知らせがございます」

「ひゃあっ！」

再び聞こえた声に、霧華は反射的にハンドルから手を離し、両腕で裸身を隠す。

瞬間的に、そしてあらためて頭の隅で確信したのは、やっぱり自分たちの行動や裸は、全て見られていた。という事。

開かない出口を背に、左掌は巨乳をムツチリと抱き寄せて食い込み、右掌は裸の恥丘を押さえてガードする。

天上カメラからの公開画面は、弱々しい裸の霧華が、まるで袋小路へと完全に追い詰められてしまったような、切迫的で被虐的な映像だ。

「せっかく、出口へと到着されたようでございますが……あああ、なんとしたコトか。その扉は、ロックされてしまいました」

「どっ、どういう事さっ!?! 扉をロックつて、こん

なの、インチキじゃないっ！」

当然の怒りを訴える格闘少女。しかしゲームマスターは、意外な事実を告げた。

「何、最初に説明をいたしました、ペナルティでございます」

「ペナルティ……!?!」

確かに、ゲーム開始直前に説明された。島には幾つかのアイテムがあり、使用は自由。ただしそれらを使用して逃走者が不利益を被つても、それは自己責任である、と。

トンネル内で、まるでオペラのように、男の声が木霊する。

「おお、さすがは百年に一人の逸材、と申しましたようか。島の各所に六十種ほど用意させて頂いたアイテム……その中でランダムに決定されたペナルティアイテムは、たつたの三つ」

その三つとは、木製のブーメラン、ただの紙コップ、そしてマウンテンサイクルだという。

『だのに、二十分の一の確率をたつたの一度で引き当ててしまうとは……幸か不幸か、まさに運! でございます』

「……うぐぐ……っ！」

悔しいけど、この言い方がウソとは思えない。勝利だと信じていたゲートがロックされてしまった事で、霧華は強い焦燥に追い詰められてゆく。

「そっ、そんなルールっ――このおぉ……っ！」

再びハンドルを握つて全力で回そうとするものの、金属製のロックが外れる事などあり得ない。

「なんでっ、こんな……っ！」

力任せに縋るムチャで強引な手段は、まるで子供のような。追い詰められてパニック寸前な少女の瞳は、涙が溢れる一歩手前。

「マウンテンサイクル使用によるペナルティは最初にとり着いたゲートのロック、のみでございます

……」

ます。つまりこれから、例えばマウンテンサイクルを使用して別のゲートへとたどり着く、などされれば、霧華嬢の勝利でございます」

「別の、ゲート……！」

聞いた途端、少しだけ頭が冷静になる。

（別のゲートっ、自転車は使える！）

そう考えた霧華に、新たな情報が告げられた。

「ああ、そうでした。扉がロックされたと同時に、霧華嬢が第二ゲートにいますと、周囲二キロのハンターたちに電波が発信されました……強姦魔を相手に初体験されたいのならともかく、ゴールを目指すのでしたら、お早めのご決断を……くっくっくっく」

「なっ……っ!!」

つまり、今この瞬間にも、欲望剥き出しの強姦魔たちが大挙して向かってきている、という事。

このままココにいたら……。

考えるよりも早く、格闘少女は入り口へと走り出していた。

富豪たちや仮面の男に監視されていると解つても、もう裸を庇っている余裕はない。

（こ、こんな狭い場所に入り込まれたらっ、おしまいだよっ!）

全速で走る霧華の巨乳は、剥き出しのままタブタプツと激しく上下。懸命に走る裸尻は、丸く艶々に力んで小振りに弾んでみせる。

外の光が見えてくると、トンネル内の壁に男の影も映り込んだ。

（もうこの中に、入り込んでるっ!）

強姦魔の存在に一瞬だけ心が躊躇うモノの、迷っている暇なんてない。霧華は全速のまま、影の正体に向かって突撃をかけた。

百九十七センチはある大柄な男が、霧華に気づく。

「いたっ、オイラと遊ぼうかあっ——」

勃起を震わせ、抱きついてこようとする大男。

格闘少女は、考えるよりも身体が反応。頭部に向かつて素早く跳躍をした。

体重とスピードを十分に乘せると、裸体を捻る。

全身のバネを使って、気を込めた右のヒザを、ニヤつくハンターの左側頭部へと全力で打ち込んだ。

「セエイっ!」

——つどグシャアっ!

強姦魔の眼前数センチにまで、自ら開脚して処女の割れ目を近づけて、更に見せつけるような、恥ずかしい半裸での襲撃。

「ンゲウウツツ!」

高破壊力を持った弱点への一撃に、白目を剥く男の醜顔が、右側へと異様に傾く。

（あっ、あたしっ……!）

開脚跳びヒザ側頭蹴り。しかも裸で……。

咄嗟とはいえ、攻撃力だけでそんなを繰り出してしまった自分に、頬が上気した。

同時に、蹴り込んだ右膝がジンツツと痛む。

裸の処女による、大股開きでの側頭ヒザ蹴りと、その後の顔面越え。その様は、上下左右や前後からと、様々な角度でモニターされていた。

二人の身体が、ゲートの入り口から遊園地へと飛び出す。

「女が出てきたぞおっ!」

格闘少女は、トンネルを広く取り囲むハンターたちを素早く注視しながら、仰向けに倒れる大男の顔を跨ぐ格好で着地。

（ハンターは五人っ——正面ががら空き!）

逃走経路を一時で判断すると、脚力を振り絞って駆けだした。狙うは、誰もいない正面突破。

着地と同時に、勃起男たちが裸の処女を目指して一斉に迫ってきた。

「囲めえっ!」

「マ■コだっ、マ■コしろおっ!」

しかし小柄な豹のごとき素早い動作に、ハンターたちの反応はついていけない。

囲まれるより早く、包囲から脱出できる——。

霧華は男たちに目もくれず、既に逃走の先だけを見ていた。

そんな格闘者の性質の、隙を突かれる。

牡獣の群れに、エモノ少女が疾走開始と同時に愛らしくご挨拶をした、その途端。

「残念でしたっ! じゃあね、オジさんたっ——きやあっ!」

脱出の一步を踏み出した足が何かに引っかかり、全力疾走だった霧華は盛大に転倒させられた。

小柄な肢体が転倒すると、裸のお尻がブルツと揺れて、二つの巨乳がモチツと弾んだ。

「あわわっ——何さっ、ロープっ!!」

転げながら確認したのは、いつの間にか張られていたロープ。

引っかけの綱は、トンネル入り口の左右の茂みから伸びていて、色はアスファルトとほぼ同じ、グレイだった。

（なんでロープ?! さっきはなかったのにっ!）

転倒したまま動揺して、行動が一瞬だけ停止。そんな四つん這いのような少女に、更に潜んでいた裸男たちが、二人で襲いかかってきた。

モヒカンの痩せた青年と、特別な特徴もない地味な青年。左右から襲い来る、目が異様に血走っている二人。

「処女もらいっ!」

「っこのっ!」

格闘少女は迎撃する為、素早く仰向け。恥ずかしけれど、双乳も割れ目も晒したままだ。

右側から迫るモヒカンに対し、気を込めた右蹴り上げを繰り出す。

両掌を頭の左右について、右脚を上方へと繰り出

しながら、開脚して全身を伸ばした。

「セヤッ！」

——ドゴウツ！

「オプッ！」

鋭い足技を腹部に食らったモヒカンは、そのまま後方へと蹴り飛ばされてダウン。

蹴り上げた右脚がズキンと痛む。

裸での開脚蹴り上げは、上空からのカメラで大写しにされていた。

蹴りの反動を利用して素早く起き上がると、左からの男には気を込めた手刀で脳天をドシッと迎撃。

「ヤッ！」

「ツエゲエエッ！」

鼻水を噴出させて崩れ落ちるレイプ魔。

ダウンした男たちは、それでも赤黒い勃起をビクビクと蠢動させていた。

一瞬だけ本能的に見てしまつて、やはり嫌悪。

「こ、このケダモノっ！」

二人を一撃で倒した少女だけど、これまで敵を討つた両脚も左掌も、重い激痛に痺れていく。

(に、逃げなきやっ！)

痛む手足を気力で無視して逃走を図ると、今度は背後から、首に投げ縄をかけられた。

「あぐっ！」

予想外の力で後ろに首を引かれて絞められて、走る勢いがムリヤリ止められる。

首の筋が、ギリッと痛い。周囲には、的を外したらしい数本のロープが、パタパタと落ちた。

「ごほっ、ごほっ——ロープっ！」

痛む首を押さえつつ後ろを振り返ると、投げ縄は茂みの中から伸びている。

更に、甲高くヒステリックな男の声が、背後から聞こえた。

「よし！ 次の縄だっ！」

危機感で振り向くと同時に、左右の背後から、縄を手にした男たちが突っ込んでくる。

「く……っ！」

迎撃しようとした手刀に痛みが走り、技のキレとスピードが大きくダウン。

それぞれの男に手首を捕られてしまうと、ガツチリとロープを結ばれる。

左右の手首を搦め捕られてしまった霧華は、首と両手、三本の縄を強く引かれた。

「しまっ——ああっ！」

十字架への磔のように、両腕を上げての拘束。更に背後から両脚へと抱きつかれると、両の足首を素早く縛られてしまった。

「こ、こんなっ……っ！」

裸の肢体を晒されたまま、両手足を十の字に拘束されて、裸の強姦魔たちに取り囲まれる格闘少女。

捕らえた獲物を狙って、更に五人ものハンターが現れた。男たちは、合計十人。

「捕まえたぞお、ゲッへへへ」

「まだガキだけど、エロい身体じゃねえかよお！」

餓鬼の如く腹の出た初老。色白で若禿げな青年。目つきが異様にギラギラして両腕に龍のイレズミを施した、筋肉質なスキンヘッドの中年。

強姦目当ての男がみな、勃起をビッシビシに硬化させて、裸の拘束少女に近づいてくる。

「こ、来ないでよっ……オジサンたちっ！」

犯される——。

確実な危機感で、急速に焦燥させられてゆく心。必死に手足をもがくものの、ロープは既に、樹木や鉄柱などに縛りつけられていた。

剥き出しの白い双乳や先端の桃色媚突、裸の丸尻や引き締まった下腹部、そして赤い割れ目に、ハンターたちの強姦欲求な視線がハッキリと突き刺さってくる。

格闘少女の絶対ピンチに、モニターを眺める富豪たちはクスクス笑い。

剥き出しの白い巨乳にスキンヘッドの両掌が伸ばされた時、更にもう一人、眼鏡をかけた裸男が姿を見せた。

「まだだ。お前、まだ触るな！」

イレズミ男の掌が、ピタッと止まる。

強姦魔に命令をしたツリ目で瘦せた中年男は、高い声で話し始めた。

「キミがアレか、百年に一人の逸材とか言われて調子に乗ってた、轟霧華とかいうガキか：カハハ！」

少女に向けられた色欲まみれの目は、しかし憎しみにも似た色を、より濃くギラつかせている。

狂気じみた男の視線に、裸拘束の鉢巻き少女は深い恐怖を感じた。

「だ、誰なのさっ、アンタっ！」

強気に言い放つものの、語尾の震えは隠せない。捕らえた獲物を見下しながら、男は甲高い声でユツクリと、上品を装った中途半端な言葉で話した。

「ボクが誰かだなんて、どうでもいいさ。ボくらには当然、面識なんてないからねえ」

男はナンバー一九一と名乗り、ゲームスタートからずつと、遠くから霧華を観察していたという。

「キミの行動をよく見て、行き先を推測し、先回りをして、見事的中つてワケだ……カッハハハ！」

しかも周囲の強姦魔たちは、この男に従って行動している。

細い指先で、自らの頭をツンツンと突つつく。自分は霧華よりも頭がキレると、自慢したいらしい。

しかしこの男の言いは分、破綻している。

「ふ、ふんだっ！ あたしがペナルティー被ってなきや、とつくの昔にゴールしてたじゃん！ オジサンばか？ 頭すつごく悪いんじゃないのっ？」

焦りてつい強く罵つたら、凶星だったらしい。

男の目が怒りで血走り、上品ぶっていた言葉はすぐに崩れる。

「うるっせえんだよおっ！ なんの苦勞も知らない甘ったれたクソガキのクセによおおっ！」

格闘少女は、怒りで震える掌で頬を取られて、頭一つ上から睨みつけられた。

「クソの日本はあ、オレの才能を誰も認めたらないクセにいつ、こんなガキを天才だ逸材とか又かしかがるっ！ こ・ん・な、ガキいっ！」

「うぶく……っ！」

細いのに力強い指で、スベスベの少女頬が締められる。更に小さな鼻腔にも男の指を挿入されて、豚っ鼻にされてグリグリとこねられた。

「んむむっ——っ、何さっ、くふ……っ！」

格闘少女の鍛えた自尊心の柱が、根元からメキメキと押し倒されてゆく。

いわゆる逆恨みの思考を剥き出しにしながら、一九一番は、抵抗できない少女をいたぶる愉悅に浸っていた。

「これからその逸材様をお、ボクたちクズが徹底的に打ちのめしてやろうかってねえええっ！」

狂った視線に、恐怖する霧華。

リーダーの眼鏡男が命令をすると、コードを持った男たちが近づいてきた。

手にしたコードは、先端に金属片が付けられた物が三本と、ピンジャックの物が一本の、計四本だ。

「な、何するのさっ！」

これから何をされるのかと想像すると、怖くて逃れたくて、肢体を必死に揺する。

二つの金属片を左右柔乳の外側、乳輪の近くに、もう一つは肉芽のすぐ上に、それぞれ両面テープで貼りつけられる。

「やっ、やめてよっ……ひいっ……！」

性感の、しかも敏感な箇所のおく近くに、コード付きの金属片を取りつけられる恐怖。

そしてピンジャックは、背後の男によつて穢れを知らない後孔へ。

冷たくて堅い金属感にツンと突かれ、心臓がドキユンツと高鳴る。

「ふひっ——やっやめてっ、そんなトコ……っ！」

金属製の接続ピンは、格闘少女の桃色アナルに、根元まで突き込まれた。

金属の冷たさだけでなく、他者の手で肛門にツプりと異物を挿入された事に、強く羞恥させられる。

「ひやあぁっ——このっ……ヘンタイいっ！」

菊肛へのピンジャック差し込みは、割れ目と一緒に映された背後からの拡大映像で、富豪たちに公開されていた。

器具の装着が終えられると、コードの繋がった先は眼鏡男の掌の中、スタンガンだ。

(で、電気っ!!)

「コイツは元々、キミたちフォックスの為のアイテムだったらしいけどねえ……ボクが拾ったのさ」

裸の十字拘束で、電極を繋がれた格闘少女。残酷な仕打ちの予想に、一瞬だけ怯えた表情になる。

「喰らいなさい！」

ニヤリと笑った一九一番が、スイッチをオン。その途端、霧華の全身が強い電気ショックを浴びせられた。

——カチッ、ビリビシビシビシッ！

「つあああああああああああああつっ！」

鋭い熱で、一瞬のうちに全身が貫通。直後に、頭の内側からつま先までが、強烈な痛みを伴って強く痙攣をする。

「かはっ——あっ——くはっ——っ！」

全ての筋肉が全力で力み、更に硬直しようと異様

な負荷で、指一本すらも動けなくなる。

「あかつ、は、やっ——や、めっ——っ！」

(い、痛い……)——身体がつ、筋肉がつ

——息が……)——試合で打撃を受けた時のような、外からの痛みではない。体内から外に向かっている痛みという、初めての激痛。

筋肉の硬直は手足や身体だけでなく、内臓にも及んで、声を上げるところか息すらできない。

全身の硬直と痙攣で、白い肌が薄く危機感の汗を纏う。幼さの残る愛顔は大きな双眸を見開いて、開いた唇からは断続的な吐息が溢れる。

心臓の鼓動が早められて、強く反らされる細い背中。天を向いた二つの巨乳が、早められる鼓動に合わせて、プルッパツと小さく弾んだ。

「ち、ちくっ——ちく、びっ——ビリ、ビリッ——する、うううっ——っ！」

電撃を受ける乳輪が硬直をして粒立ち、桃色の媚突もキュウ……と硬化を見せつける。

しなる背筋と、曲線の広がる尻尻。丸いヒップはツルリと汗を滑らせて、柔らかい脂肪を痙攣させてプルプルと揺らす。

挿入されたピンジャックから黒いコードが伸びていて、女性の蠢動に一瞬だけ遅れて堅く靡いた。

電極を間近で繋がれた肉芽は、小さく震えながら包皮から赤い身を自ら剥き出し、男たちの視線に晒されている。

ピタリと閉じられた処女の局部も、クリトリスから肛門へと走る電気に刺激を受けて、自ら開いて粘膜を晒していた。

裸を隠す事もできず、本来ならば痴漢撃退用のスタンガンで責められる、拘束の格闘少女。

——ッビビビビビビビビビビッ！

「っかは、あっ——はっ——っ！」

電極を付けられている場所、左右乳首の外側が熱くて痛い。

陰核も肛門も、まるで焼かれるような熱を感じているのに、痙攣する菊肛はピンジャックをキュウウツと締めつけていた。

「おひり、あついっ——ヒクヒクッ——ヤけ、ちやふううっ！」

「も、悶えてやがるっ、勃起するぜえっ！」

「ブルブルしてよお、早く犯りたいっ！」

もはや一方的に責められるしかできない少女に、私たちの堅肉は更に硬度を増してゆく。

こんな責めを受けさせられたら、筋肉へのダメージで体力も活動力も、確実に奪われてしまう。

全身痙攣電撃責めに晒される霧華は、逃げる事もできず、無呼吸状態の中で意識が薄らいでゆく。

「い、息っ——くる、しいいっ——」

大きな瞳が涙を纏い、気絶寸前になつた頃、スイッチがオフにされた。

一瞬で電撃が止むと、肉体は無意識で酸素を求めて呼吸をする。

「つあはあああああつ——ふううっ、はあつ、はあつ、はああつ！」

荒い呼吸で、口の中も喉も急速に渇く。強制硬直から解放されると、全身の筋肉がクタリと脱力。

霧華は疲弊した媚顔をうなだれて、ただ荒い呼吸だけを繰り返す。

そんな中でも、思考は脱出の隙を探る。

「なんとか……ロープだけでも解けれっ——っ！」
息を吐いたタイミンで、再びスイッチが入れられた。途端に全身硬直。
「つあつ——は、はっ——っ！」
裸身が力んで反らされて、また息が止められる。細い指先が伸ばされたまま痙攣して、足下もつま先立ちにさせられる。

天を向く乳房が弾んでヒップが震え、汗淫く裸体が牡たちの劣情を誘う。

腰まで反らせて突き出された処女の割れ目が、電撃と牡たちの視姦に震えている。

捕らえられた少女という状況も、私たちの征服欲を刺激していた。

「息ができないよねえ？ カッハハハ！」

「や、めっ——っはっ——っ！」
（や、めてえっ——くる、しいっ、いたいっ！）

頭から足先まで、激痛が走る。悲鳴すら上げる事もできず、息も身体も苦しうて涙が溢れた。

電気責めは、男の意のまま。
霧華は、数秒ごとや数十秒というランダムな電撃責めに遭わされて、筋力もスタミナも完全に、容赦なく根こそぎ奪われてゆく。

そして力を失った肉体が、男の読みに合わせるように、自ら敗北の恥辱を晒してしまつた。

「ん……そろそろかなあ？」

「はあつ、はあつ……ああ……っ！」
何十回目かのスイッチオフのタイミンで、意外にも尿口が弛緩。格闘少女は、無意識で屈辱の放尿をさせられてしまつた。

「やつ——はあつ、い、いやだあ……！」
——ちよっ、ちよろちよろろ……。

幼女ですら感じる、下腹部のガマンとか緊張とかが一切ない、ただの脱力放出。

ムッチリと閉じた両腿の間を、温かくて黄色い透明な液体が、静かに流れた。

少女の粗相が、男たちに笑われる。

「見なよお、高等科にもなって、おションベンを漏らしてますねえっ、カッハハハ！」

「オ、オレは興奮するぜえっ！ もっと漏らしてみせるよっ！」
拘束放尿シーンは、正面や斜めの下からモニター

されていて、富豪たちの嘲笑や司会者の声も聞こえてきた。

「おやおや、皆様ご覧下さい。世紀の逸材、霧華嬢が、なんとお漏らしをいたしました。滅多に見られない、なんと恥ずかしい有り様でしょうか？」

「とま……止まらないっ……っ！」
（こ、こんな……こと……っ！）

私たちの視線と嘲笑で、堪えていた羞恥心が急激に沸騰をさせられてしまつた。

「やだあつ——もう、見ないでええええええええっ！」
恥辱に心が押しつぶされてゆく絶叫。

しかし鍛えた身体の肺活量が仇となり、最後は叫ぶに合せて、強めの放尿まで晒してしまつた。

——ちよろろ……ちよろろっ、ぢやぢやっ！
腿を伝う液体とは別に、足下前方に向かって飛沫を上げる程の、排尿行為。

「見たかよ最後、なかなか勢いのあるションベンだつたぜえ。ゲッヘッヘ！」

「ゲームが始まってから、ずっとガマンしてたんじゃないのか？ ああ、お嬢ちゃんよう？」

牡たちの罵りで、惨めな心がより淫惨に、恥ずかしい沼へと沈められてしまつた。

「うら……」
責め苦の果てとはいええ、放尿をさせられてしまつた。それも、大勢の男たちの前で。

裸を晒されている事も、お漏らしを止められなかった自分も、惨めだし恥ずかしい。

秘処公開までされた身体検査や裸での逃走。更に電気責めと、この醜態。

全てが生まれて初めての恥辱な体験であり、常勝格闘少女だからこそ、その心を確実に踏みにじられていた。

必死に保っていた自尊心の柱が、また大きく、ほぼ真横にまで押し倒されてゆく。



勝利を確信してニヤつく眼鏡の男に、衰弱した頬を取られても、霧華の身体は動かなかった。

「恥ずかしいねえ、小便娘さん。カッハハハ！」
体力を完全に奪われて、気力も削がれてしまった逸材少女を、眼鏡の男は更に辱める。

「さて、まだまだゲームの時間はたつぷりあるしい……処女を犯すまで、もう少しボクたちに付き合ってもらおうかなあ？ おい、そのイレズミ。この娘を縛り直せ！」
威張る眼鏡男の命令を、イレズミのスキンヘッド強姦魔はニヤけて実行に移した。

全身の力を奪われきつた格闘少女は、電極を剥がされるとロープを解かれ、両腕を背後に拘束。首にも縄を繋がれると、裸を隠せないまま縄を引かれて、人造湖まで強制連行された。

静かに波打つ広い湖岸に連れられると、湖を背にして、脱力した重たい身体を座らされる。

「な、何をっ——ひゃっ！」
波打ち際に濡れる裸尻が冷たい。

「こうするんだよ」
ヒザを折って秘処を隠す鉢巻き少女は、裸男のつま先で額を蹴られて、背後へと転倒させられる。

「きゅっ……あぶっ！」
両腕を背中であぐらされている霧華は、転がされるまま仰向けにされて、湖に頭を沈める格好にさせられてしまった。

突然の水没に軽くパニックして、鼻の中にも水が入って痛い。

「がばっ……ぶはっ！」
「そしてこうだ」

腹筋運動の要領で身体を起こそうとしたら、男たちに両脚を掴まれて、ガバッと左右に大きく開脚させられてしまった。

「きゅああっ——は、放してよっ！」

裸の少女腰を、男たちの力でムリヤリ、天上開脚の姿勢で公開。

イヤらしい牡たちの視線が、赤い後乳や閉じられた処女溝に集中する。

「お■んこだあ、まだ初々しいなあ」
「ケツ穴だつてツルツルしてるぜ、ゲッヘヘ！」
（みっ、見ないでよお！）

淫欲まみれでギョロギョロと視姦されると、粘膜から子宮までもが見透かされるような気がした。

後頭部が耳の後ろまで水に浸かり、濡れさせられる焦燥と危機感で、心が追い詰められてゆく。

跳ねた水で巨乳が濡れて、白い肌のムチムチ腿が閉じようと、付け根の筋を浮かせて張り詰めた。

しかし電気責めで力を奪われた媚脚は、男の力に全く抵抗できない。

天上開脚で晒される処女の割れ目は、陽光とハンターたちの視線を受けて羞恥して、閉じた肉門を僅かにヒクつかせた。

「はあっ……はああ……っ！」
両脚を開かされては、十分に身体を起こす事ができない。しかも脱力させられているから、水際で耐える全身の筋肉が苦しく痙攣をしよう。

濡れまいと必死に抗う格闘少女に、眼鏡の男が歪んだ欲求を突きつけてくる。

「さて、霧華だっけ？ とりあえずボクたちに、託びてもらおうかなあ？」

「わ、託びるって……？」
霧華の問いに、一九一番はしたり顔で答えた。

「そうだねえ……逸材だとか増長してて、ごめんなさい」とか、かねえ……カッハハハ」

「だっ、誰がそんなっ……オジサンほんとに、バツカじゃないのっ!?!」

強気に言い返した途端、辛うじて水面に出ている

霧華の額が、眼鏡男の足の裏で踏まれる。

少女の頭部が湖に沈められてしまった。

「きゅっ——あばがばっ！」
突然の水責め。しかし電気責めで体力を奪われているから、堪えた息は十秒と持たなかった。

（く、くる……しいっ！）
「ぐぐ……ゴボボっ！」

すぐに限界がやってきて、全ての息を吐き出してしまふ。

もう、酸素がない。それでも男の足はどかずに、霧華は水面に出られなかった。

（あ、脚をどけてっ！ たすっ、けてっ——っ！）
溺死させられる危機感で、理性が焦燥させられてゆく。

息が吸いたい。酸素が欲しい——。
苦しくて死にたくなくて、水の中で涙が溢れる。

命の危機にも女体は反応。晒される処女の閉じ肉が、ヒクヒクッと開いて粘膜を見せていた。

もう、だめ——。
呼吸を求める肉体が唇を開けさせて、水中でも無意識に何かを吸おうとする。

そんなタイミングで、額から足が離された。

途端に、全身は頼りない力を目いっぱい使って、頭を水面に浮上させる。

「ばはっ——はあああっ、はあああっ……！」
何よりも望んでいた空気を得る為、少女はただガムシヤラに、深い呼吸を繰り返す。

裸で天上開脚させられたまま、巨乳も秘処も晒して必死に息継ぐ、濡れ少女。

少女として恥ずかしいだけでなく、無敗の格闘家としても、あまりにも惨めな姿だった。

水面に浮かんだ愛顔は、冷たい水だけでなく、自身の温かい涙にも濡れてゆく。

頭を上げると、男たちの指が剥き出しの女体に伸

イセリア 英雄戦記

the legend of the Iseria war

第24話 闇の眷属

小説
NOVEL

うつせみ
空蝉

挿絵
ILLUSTRATION

ぼたん
牡丹

単行本
2巻
発売中!

「自由の剣」の協力で、メイズの魔物を次々と屠っていくイセリアの騎士たち！しかし、捕虜となっていた帝国皇子が巨大スライムに変貌し、凛々しき女騎士は、
スライムの餌食に！

フィオナ皇女と大騎士団長ミーシャならびにレジスタンス組織「自由の剣」の戦士らが駆けつけたことで、戦況はイセリア側優位となっていた。
が、魔物がメイズVIIより無尽蔵に湧いて出てくる状況に変わりはない。

「……ミーシャ殿」

幼馴染みであり親友でもある皇女との再会を喜んだのも束の間。表情を引き締め、剣を支えに立ち上がったセリーヌが大騎士団長の名を呼んだ。
「ん。なんにや？」

細身の剣を両手に携え敵への威圧を緩めぬまま、名を呼ばれた猫耳幼女が振り向く。
「メイズVIIの再封印を施すため。皇女と王宮に向かっていただきたい」

「セリーヌ!？」

「このまま地上で掃討作戦を行っても埒があかない。根元を断たねば」
目に見えて疲労困憊の親友を捨て置けない。そんなフィオナの優しさが嬉しかったが、今は親友でなく公国に仕える騎士の一員として扱われたい。

目で意思を伝えると、しばしの葛藤の後にフィオナも頷いてくれた。
「ぐぎやおオオ……」
フィオナが放った聖魔法の衝撃に叩いていたゴルヴァーナ。見上げるほどの巨大肉塊に成り果てた奴が、今にも動き出しそうな気配である。

「セリーヌ。約束ですよ。絶対に、わたくしが戻ってくるまで」
「イエス、ママ。この剣に誓って。イ

セリアを守り、生き抜いてみせる」
すれ違いざま。ひと時だけ皇女と騎士ではなく友人としての顔に戻って、笑みとともに想いを告げた。

「へたばつたら、お尻べんべんにゃ」

独特の言い回しで激励してくれた大騎士団長には苦笑で応じ、その後ろをゆくメイベルローゼ、かつての敵国の姫にも微笑を捧げた。

「糞豚に一発くれてやろうと思っただけ、手が汚れるのも嫌だから、お前に任せるわ」

洪面で兄ゴルヴァーナを豚と呼ぶ彼女の傍らには、重装の女騎士イーバが付き従う。さらに、名は知らぬがおそらく「自由の剣」の所属なのだろう、大剣を携えた赤毛の美剣士が続いた。

「その他の者は第二騎士団イグナシオ殿に合流し、指示を仰げ。レーシア、「自由の剣」の方々に道案内を頼む」
「は、はいっ」

第一騎士団長に名を呼ばれ恐縮した紫のツインテールがびよこり。身体ごと跳び上がったかと思うと、「自由の剣」の面々を先導して走り出す。
この街を知り尽くした彼女ならば、いち早く合流もできるだろう。

「ぐぎゅううおオオオ」
聖魔法の余波が消え、闇に住まう者どもが再始動し始める。

一方で、その聖魔法によって鎮められた胸の疼きが再発する予兆はない。

「……さあ、始めようか」
かつてゴルヴァーナIIオーギュスタ

ンと呼ばれていた泥状の異形に向き直り、魔剣クラウソラスを突きつけた。
男の瞳があつた辺りを見詰めるも、眼窩はくぼみ、漆黒の穴が覗くのみ。泥色の胸に頭が沈み込み、どこまで顔なのかも、もはや判然としない。

その醜悪な異形の額には煌々と瞬く真紅の宝玉が納まっていた。

「あれが……ヤツの力の根源か？」

おそらく人身に余る魔力が流入したことでゴルヴァーナ自身の肉体は崩壊。異形の化け物へと成り果てたのだ。

ナルシストの彼自身が望んだことではあるまい。誰かの姦計による事態であることは明白。

「魔……王……さ、ま!」

「っ、邪魔だ!」

背後からにじり寄ってきたヴァンパイアを真つ二つに切り裂き、返す刀で二匹目。さらには人食いサイクロプスの分厚い胸を袈裟懸けに切り落とす。

メイズVIIより湧き出た魔物のほぼすべてがこちらへと集結してきているよ。うだが、皆一様に「魔王」と口にするばかりで、目に見えて攻撃を仕掛けてくる様子はない。

皇女の放った「サンク・フイールド」の影響がまだ連中に対しては残っているのか。相当弱体化もしていた。

(スタキア砦に籠城していた市民の避難は、もう完了しただろうか)

防衛部隊の中には、生まれや育ちがイセリアの者が多数いる。各々故郷を守り抜きたいとの想いは強いはず。

指揮を執るイグナシオにしてもそうだし、彼は歴戦の勇士だ。きつと援軍とともに戦列を立て直し、使命を遂行してくれている。そう、信じて。

また近づいてきたサイクロプスを切り倒し、返す刀で巨大肉塊——魔人ゴルヴァーナのボディに刃突き立てる。

「ぐぎ……ぎやああアアアア!」

(もはや人語もまともに喋れぬ。いや、そもそもゴルヴァーナの意識そのものが残っていないのか)

メイズVIIより溢れ出す魔の力を、化け物の額に納まった赤い宝玉が吸収しているのではないか——?

無尽蔵に膨張し続ける異形の姿を見るにつけ、疑念はより強まる。

ギーン——。

「ぐつ……。また……っ!」

赤い宝玉が明滅するのに合わせて、一度は治まったはずの疼きが再び胸奥に響き出す。

(うあ! あ、ぐうう……こ、これではまるでっつ、まるで……)

目の前の化け物が持つ宝珠に、肉体が同調、連動しているかのようだ。

「……っ」

忌まわしい想像に寒気を走らせ、その寒気を振り払うように勢いよく。今なお魔力流入が止まらず膨張を続け、ついには肉が張り裂け溶け出した異形のボディを踏んで駆け昇る。

「インベリアル……ダイブツツ!」

狙うは、奴の力の根源たる宝玉。一気に頭頂部まで駆けて飛翔し、魔の力

を纏った刃を振り下ろす。

「ぶびゆるりゆるるっ！」

「はあああ……」

斬撃の軌道上に割り込んできたゴルヴァーナの右腕を切り飛ばす。

腐肉が焼け焦げ蒸発してゆく嫌なおいが鼻をつき、思わず眉をひそめつつ。なお止まらぬ勢いそのままに刃は異形の頭頂部に食い入った。

(このまま……一気につ！)

すでに身に余る魔力によつて融解し始めていた異形の肉体は、紙を裂くようにやすやすと断ち切れた。刃で断ち切った異形の肉が、インペリアルダイブの魔光に焼かれて消失してゆく。

「ぎぶぶぢゅぢゅぶぶうううッッ！」

奇妙な叫び——ただ融解する肉の裂け目から音もれただけだったのかも知れない——を発して、異形の魔人は見るも無残に崩れゆく。

「つ……まだまだ。宝珠を……」

力の源たる赤き宝珠を断たねばならない。優勢に気を抜くことなく目を凝らした先に、今なおその禍々しい輝きは存在していた。

「ぶぢゅぶぢゅゆるるるっ。」

「くっ……邪魔をするな！」

ぼこりと蒸発し飛来した肉の欠片を左拳で払いのけ、魔力込めし刃で異形の肉を裂き、かき分けるようにして赤き宝珠を追う。

溶けゆく異形の肉の中を泳ぐように、赤き輝きは遠ざかる。

追いつ追われず。時間にして数十秒

ながら、やけに長く感じられた追走の果てに、とうとう魔剣刃は赤き宝珠に到達。その中心を貫通した。

「これで、終わりだ。滅せよ悪魔！」

宝珠の碎ける感触を、確かにこの手で感じた。勝利を確信して、今や泥状に溶けてしまった仇敵に幾ばくかの憐憫を抱いた——その瞬間。

「……っ!？」

ギイインッ……

耳障りな音を発した赤き石が、ひと際まばゆく輝きを放つ。

反射的に飛びのいた足元を、泥状の異形の肉が難いであつた。

「ちいっ……。まだ、なのか？」

碎けたはずの赤き石は、瞬時に再生して再び忌まわしい光を放っていた。

「マ、オ……ウ……サマ」

「ワレラ、ノ、主、サマ」

不慣れた様子の子の言語が耳に届く。

視線を向ければ、メイズVIIより湧いて出た異形どもが続々。液状化した腐肉の波を被りながら、今や泥状の巨大水溜まりとなつて広がるゴルヴァーナのボディに足を踏み入れていた。

「なっ……」

目を疑う光景が、そこにあつた。

「ぐああアア……」

「魔王、サマ……あああ」

巨大な人食いサイクロプスや、強大な魔力を有するはずのヴァンパイア。それらが突如大波と化したゼリー状の腐肉を被り、飲まれ、為す術なく消えてゆく。

「溶かして……食らっているのか！」
人を食らい蝕む側であるはずの魔物どもが、今は無力な子供のように食われ、その暴虐の力を奪われていた。

ギイイイン……

「くっ、ああああ……っ!？」

連中が一匹飲まれる度。泥海の中心に収まる赤き魔石が一際眩く瞬いて、同時にセリーヌの全身から魔力が抜け落ちてゆく。

すでに刃を宝珠から離しているにもかかわらず、赤き瞬きと胸の疼きの同調が止まらない。

(あの石が……魔力を吸っている!?)
不快な疼きとともに全身に蔓延する倦怠感と、増し続ける魔石の輝きから、強制的に魔力を吸い取られているのではとの疑念を抱く。

疑惑を肯定するかのようになり再び魔石を中心に形を成し始めた異形の化け物。泥状の腐肉を捏ね集めて形作られた巨大な泥スライムとも言うべき物体が、すでに失ったはずの顔を嫌らしく歪め嘲笑う。

「……っ、貴様などに……これ以上イセリアを穢させる、ものか——!」
身に残るありつたけの魔力を、魔剣クラウソラスに注ぎ込む。

(ファイオナ……済まない)
生命維持を度外視したこの一撃を放てば、ファイオナと交わした誓いのうちのひとつを違えることになるかもしれない。それでもイセリアを守るため。一度は魔に屈した自分が、祖国のため

め、ファイオナのために成せることがあるのならば。

「インペリアル、ダイブッッッ！」

限界を超えて魔力を吐き出した全身から急速に力が失われていく。同時に、血潮が熱く煮え立つのを感じた。

生涯最後かもしれない魔剣の一閃を目に留め置きながら。血の滲むほど歯を食い縛り、右腕を振り落とす——。

一方——。メイズVII深部へと潜行するファイオナたちは、早々に封印の間のある階層に到達しようとしていた。

「ここまでは楽勝……だな」
赤毛の美剣士。「自由の剣」の勇士であるシェリルが事もなげに告げる。

電撃の魔法剣を繰り出す彼女と、封印の解けつつあるミーシャ。前衛を務めるふたりで、ここまで現れた魔物の九割方を一刀のもとに屠ってきた。

「予想したより魔物の数が少にゃい……多分、セリーヌのおかげにゃ」
地上で戦うセリーヌに魔物が従っていたように見えた。そのことから彼女が魔物の流出に歯止めをかけてくれているのではないかと、との推測を猫耳幼女は提唱する。

「ン。事情はよくわからんが、封印の間に早く着けるに越したことはないやな。道案内頼むぜ、おチビちゃん」

「ボクにはルシィフって名前がちゃんどあるってば！」

ファイオナとともに一度通った道を歩むこととなった小妖精が、羽を摘もう

とあるってば！

とするシェリルの手を擦り抜け、仏頂面で返答する。

同様に見知った道を踏みしめるフィオナはいええ。封印に尽力するため大規模な魔法は温存し、仲間の補助に努めながら進む道中、戦闘時以外はほぼ口を閉ざしたままで。

（セリーヌは約束を破ったりしない。これまでだって、そうだったもの）

地上に残してきた友の身を案じる気持ちは胸の奥に秘め、今は自らの使命を——メイズVIIの封印を施すことだけを考える。

皇女の決意と想いの深さを慮ればこそ、一行の誰もが足早にメイズ深部へと潜りゆく。

異形と化したゴルヴァーナの額に埋まった宝玉が妖しい輝きと存在感を放つ様を、潜行組の全員が目撃し。不穏に感じていた。そのことも、足早になる理由のひとつであったかもしれない。「ねえ、イーバ。あの豚の額に納まっていたアレは、アレよね」

不意に、これまで不機嫌そうな顔で随行してきていたメイベルローゼが口を開く。

「アレアレじゃわからんにや。アレってなんにやのか、言うならばつきりしるにやっ！」

不安を助長するような物言いをした元敵国の姫に対して、特にフィオナの胸中を慮ったミーシャが声を荒らげる。「ハッ。これだから馬鹿猫は。イーバはもちろんわかっているわよね？」

随一の実力を秘めた大騎士団長の苦言に少しも臆することなく、メイベルローゼは再度自らの従者へと話を振る。「錬金術師スレアの生み出すという赤の宝珠……でしようか」

常日頃から口数少ない重装騎士イーバの簡潔な返答を受け、メイベルローゼの口元に微笑が浮かぶ。

「ご名答。いい子ね。後でご褒美をあげましょう」

喜色を隠すことなくたつぷりと声に含ませた魔姫は、「長姉サーシャを死に至らしめた女錬金術師」の存在と、彼女の操る「淫祇邪教」の力——女同士を性交させて魔のアイテムを生み出す術があることを一同に告げる。

「あの女術師が……」

新たな事実を告げられた皇女は、言葉を失った。すでにペロニカエルIIグラマトンがスレアに加担していたことも発覚している。グラマトンと淫祇邪教が手を結んでいるとしたら、形勢は余計に危ういものとなるだろう。

「確か、スレアのもとにはイセリア女王と騎士たちが捕まっていたはずよね？」

ニマと歪む唇が、今度は悪辣な表情を形作る。敵国の末姫であった彼女が悪意をもつて挑発してきているのは明白だ。

「いい加減にするにやっ！」

激昂する猫耳幼女を「やれやれ」と肩を疎めたシェリルが眺めやる。「……ミーシャ」

場を諷めたのは、誰よりも心乱されていて然るべきイセリアの皇女その人だった。

「先を急ぎましょう。仲間割れしている、上で持ちこたえてくれている皆に申し訳ないわ」

「……フン」

あくまで動揺を隠そうと努めるフィオナの姿に舌打ちし、メイベルローゼは再び口をつぐみ。一行は気まずさと重い空気を内包したまま、さらに奥深くへと歩を進めてゆく。

「そろそろ着くはずなのですが……」

セリーヌのこたに加えて母やエルス、ドーラへの気遣いも頭をもたげ、皇女の声にも焦りの色が滲む。

「おつかしいなあ」

ルシィフもしきりに首を傾げ、せわしなく辺りを飛び回っている。

「ルシィフ？」

「なんか……飛びにくいんだよね。空気の流れも……」

怪訝な顔の皇女に応じる小さな妖精の発言に、ミーシャがピンと耳を逆立てて反応した。

「……虚像、空間……？」

女王アリオナ一行を連れ去った女錬金術師——先だつて名の拳がったスレアが使用したという「空間を歪める能力」。それが今この場に施されるとしたら。

「あの女術師がグラマトンと通じてるとしたら、ありえん話でもないにや」
推測でしかない。そう付け加えつつ

も真剣味を帯びるミーシャの表情に、フィオナの顔色も変わる。

先刻のメイベルローゼの話が、よりいっそう疑念を強めさせた。何より、このような術を使う者の心当たりが、他にはない。

「虚像空間」に惑わされているのだとしたら、そろそろ判断すべきでは？」

あえて口調を改めたシェリルの進言にどう答えたものか迷いつつもフィオナが唇を震わせた、その直後。

「……っ」

皇女は突然その場に膝をつき、寒さに凍えたように自身の身体を抱きすくめ、蹲ってしまった。

「チビオナも、感じたにやか？」

「は、はい……。今、地上で……何か強大な魔力が弾けた……」

震えながら呆然と呟くフィオナと、総毛立つ耳を尖らせて今まで以上に緊迫した空気を纏うミーシャ。

感応力に長けたふたりの様相が、事の重大さを物語る。

魔気の濃いメイズ深層にまで響くほどの猛烈な波動を生み出せる者がいるとすれば、それは——。

「セリーヌ……!」

魔人ゴルヴァーナである可能性もあるが、皇女の胸には確信に近い感情が溢れ出していた。

「……錬金術師スレアの術を破るには、彼女自身に解かせるか絶命せしめるか。それしか方法がないのですね……?」
「え、ええ。そうよ?」

低く響きを抑えた——おそらくは感情の揺らぎを無理矢理に抑え込んだ結果の声のトーン——に一瞬怯んだメイベルローゼが思わず素直に口を割る。

「地上に戻ります。……急いで！」

メイズVIIに施された虚像空間と、拉致されたアリオナやエルスらの身に施された淫術。それらを打ち破るために、そして何より今まさに地上でスレアの生み出した宝珠に苦しめられている親友を助けるため。皇女は我が身を顧みず真っ先に走り出す。

「了解にやっ！」

次いでミーシャが、神速をもつてすぐさまファイオナに並び、追い越して前衛を固めた。

「勝手に走り出すんじゃないわよっ」

ふて腐れながらも取り残されまいとファイオナ、ミーシャの後を追うメイベルローゼ。その脇にびたりとイーバが従った。

最後に、肩に担いでいた大剣を構え直し、背後の闇を警戒するようにシェリルが続く。

闇からは、魔物の代わりに膨大な魔力が渦となって噴き出し続けていた。

「……はあ、はっ……ア……くそっ」

魔法の炎を纏わせた剣を振るいながら、荒い息遣いのセリーヌが毒づく。

半刻前。渾身の力を込め放った魔剣の閃光は、巨大スライムのゼリー状の体躯を散り散りに砕くことに成功した。飛散した腐肉の欠片の処理には、駆

けつけた第二騎士団や蒼龍魔法中隊の面々も加わって、総出で炎の魔法を放ち、今も焼却にかかっている。

それでも——赤々と瞬く宝珠。メイズという無限の魔力の泉より際限なく力を得続ける魔石によって、泥は生き続けていた。

「ぶちゅびゅるるるるううう」

完全に溶け落ちてゼリー状と成り果てつつも、なお再生を果たそうと増殖し続ける。飛散した泥片は再び寄り集まって浅い水溜まりを形成し、赤の輝きを中心にその裾野を広げ続けていた。

「みんな下がれ！泥から離れろ！」

迫る泥から、怒声に近い響きで味方を遠ざけたのは、為す術なく飲まれた魔物どもの姿が今も脳裏に焼きついて

いるせいだ。高位の魔物ですら数十秒と持たぬ泥の海に、ただの人間が踏み入れればひとたまりもないだろう。

——びゅぢやっ！

「つ……みすみすやられるものか！」

自らも疲弊した身体を引きずりながら炎の魔法剣を繰り出し、飛来した腐肉の弾丸を切り飛ばす。奥義を二度繰り出してなお魔法剣を放つこと自体が

命を削るような辛苦を伴っていたが、それでも諦めるわけにはいかない。

(ファイオナがメイズの封印を施して、戻ってくるまでは……)

持ちこたえてみせる。

「……！総員、退避しろ！」

やはり、焼却のスピードよりも、泥

の増殖速度のほうが勝っている。赤き石の瞬きが再び泥に不穏な動き——スライム形態への再生をうながしていた。泥の中で唯一生き長らえることのできる自分がこの場を食い止める覚悟で、仲間

に退避を命じる。

「きやああああつ」

金切り声に目を向ければ、慌てた女性兵が転倒しているのが見て取れた。捨て置けば、広がる泥の裾野に飲まれてしま

てしまわうだろう。

「くうっ……」

ドンツッ！四肢の力を振り絞るように駆けてその女性兵に体当たりし、仲間

のもとへと突き飛ばす。

「早く逃げろ！ここは私が……」

食いがかるレーシアらに強い口調で再度退避命令を発した、直後だった。

——びゅぢやああつ！

「な……っ?!」

泥溜まりから腕のように伸びた腐肉が死

角より飛来する。

なりふり構わぬ体当たりで姿勢を崩

していたせいもあり、反抗の間もなく

右腕が捕まってしまった。

(……しまった……!)

粘着質なゼリー質の腕に引きずられ

女騎士の身体が宙に舞う。右腕を支点

に振り回された際に左の腕も泥に囚わ

れ、両手を頭上に持ち上げられる格好で泥溜まりの真上へと吊り下げられる。

「何を……つつもりだ?」

泥溜まりはついにスライム形状を取

り戻し、見る間に数十メートルを超え

る体躯に成長。なお膨れ続けるその中心には忌まわしき赤き光が瞬いていた。

「くっ、うう、放せっ！この……」

拘束された腕には、異常に粘着質なスライムの内肉全体にしがみつかれているような感覚。と同時に、指の間にまでニユルリと潜り入ってくる軟体動物を思わせる触れ心地に、思わず背に

怖気が走り抜ける。

宙吊り状態ではたたく足が不様に宙を掻いていた。

右手には魔剣クラウソラスが握られたままだったが、指一本動かさぬ状態

ではどうしようもない。異形の身体は刃を易々飲み込み、平然と蠢いている。

(頼む、魔剣よ——)

魔力の尽きた主の求めに、クラウソ

ラスが応じることはついでなく。

抵抗する術を持たぬ足元の側から、

敵の攻勢は始まった。地上の泥海より

無数に——柱状に引き伸ばされた泥の

腕の群れが、股下へと迫りくる。

「や……」

やめる——。無駄と知りつつも吼え

ようとした、その瞬間にはもう、肌へ

の接着を許してしまっていた。

「ソウ!!……っ!」

反射的に喘ぎ声もれ出かけるのを、

唇を食い締めて強引に抑え込む。騎士

としてのプライドがそうさせた。

腐泥にまとわりつかれた部分から、

スカートの溶けてゆく。

(布も……溶かすのか……!?)

スカートが溶けきって、ついに下

穿きまでもが溶け落ちる。

さすがに聖なる加護を受けた鎧は何時もなかつたが、股間まわりだけが裸という状況に、全裸を見られる以上の背徳と羞恥を味わわれた。

そんな状況を嘲笑うかのように、泥の腕は足首から内腿へ、舐めしやぶるように這い上がる。

露出した臀部の谷間にも殺到し、我が物顔で尻肉を割り裂いて、密やかに息づく小さな窄まりを露わにさせた。

「んうっ、くっ、ん……!!」

内股や尻肉を舐めるようにズルリと撫でられた。不快感から鳥肌が立ち、どうにか逃れようと身を振れば振るほど身体がずぶり。泥の内へと沈み込んでしまう。

今またズルズルと肛門を撫でくられ、肉尻がビクリと弾む。

(うう……)

肌に這う泥の量が増えるにつれ、奇妙な倦怠感に襲われた。己の肉体から魔力が消失していくのを、はつきりと感じ取ることができた。

赤き宝珠を取り入れたスライムの目的もまた、際限ない力の吸収——だとしたら。

(やはり私の魔力が目的……か)

異形の行動理由を知ったところで、抗う術はない。

——つぶ。

「んひあー!」

とうとう小さな窄まりにも、数本の泥の腕が接着して魔力吸引のための蠢

動を始めようとしていた。

(ダメ、だ。そこは……嫌アア!)

過去、散々罵られ喘がされた箇所、開発されきってしまった穴への刺激を恐れ、懸命の抵抗を試みる。

——ぐっ! にちゃ、ア……。

(あひ……ひ、広がるウ……)

尻を窄めて抗うも、液状の異物は変幻自在。押し返すことはおろか食い止めることもままならない。

捏ねられた双臀が悶えて弾み、自然と声に甘い響きが入り混じる。

「ふあっ……アア……!!」

「セ、セリーヌ様っ!!」

高台に移って泥の裾野から一時逃げのびた戦士たちが、驚きと不安、羞恥の入り混じった声をあげ、吊り下げられた第一騎士団長の醜態——丸出しの尻を一樣に見詰めていた。

「っ……見るな! 見、ないで……!」

同僚や部下。フィオナを信じ助勢に駆けつけてくれた「自由の剣」の面々にまで、排泄用の穴で感じる様を見られてはいる。弄られる度にヒクリと物欲しげに蠢く一部始終を——。

ゴクリ。誰かが生唾を飲み込む音が聞こえた気がする。

足元からの視線の中に、情欲に塗れたものがいくつもあり混じっているよ

うな——肉欲に慣らされてしまった身体が見せる錯覚だと言いつ聞かせても、その感覚が消え去ることはない。

つぶ。

「なっ……!!」

より強い力で腰が引き寄せられる。

「くうう! 嫌っ……んぶっ! んん

ぐっんむんうううう……!!」
ついに腐泥にキスをした。濁った味わいと髄えたにおいに眉ひそめ。

(ゴルっ、ヴァーナ、ああ……っ!)

すでに自我を消失しているであろう男の名を連ねる度、屈辱に塗れた胸に怨嗟の渦が吹き荒れる。

傷つけられた騎士としての誇りがますます怨嗟に熱を注ぎ、奇しくも抵抗の糧となってくれた。

ずぶぶぶぶぶぶぶぶ!

(くそっ、くそ、くそおおっ!)

泥の流入を防ぐべく、咄嗟に瞳と口唇を固く閉じはしたものの——瞬く間に顔面全体が泥に埋まり、胸から胴、腰為す術なく飲まれゆく。

(このまま取り込まれれば、私も、あの魔物たちのように……!)

時間の差こそあれ、魔力を吸い尽くされた後に消化されるだろう。それは、異形の化け物にみすみす新たな力を与えることにも繋がる。

(また、祖国に……害なすことだけは……嫌あああっ!)

足掻くほどに泥は肌に絡み、じきに身動きすら封じられた。

スライムの身体の内へと飲まれていないのは、今や剥き出しの尻肉だけ。寒風に晒されたそこにも泥がベチャベチャと張りつき、撫でくるような愛撫を繰り返される度に尻肉が不様に震える。

志半ばで果てたくない。その一念で懸命に足掻いたはずが、九割方飲まれた身体は結局びくりとませず。抗う心に、無力感が追い討ちをかける。

「みんな、魔法! 手緩めないで!」
蒼龍魔法中隊所属の金髪のハーフェルフ。魔法軍師ティファナの絶叫にに応じて、我に返った面々が次々炎の魔法を再射出した。

その炎のごとくが、泥スライムのおよぶよのボディにぶつかった瞬間飲まれるように消失したのを、魔力反応から感知する。

(みんな……済まない……っ)

この場にいる兵力の中で唯一異形に對抗しうる術——魔剣クラウソラスを持ちながら、真つ先に敵の手の内に墮ちゆく不甲斐なき。口惜しさを噛み締め仲間には詫びた、その直後。

ぢゅぶ……んっ!

ついに生尻は泥の海の中へと完全埋没し、全身がスライムの体内へ取り込まれてしまう。

もう、外の様子を魔力頼りに感知することも叶わない。

(く、くうう……押し、潰されていくみたい、だ……!)

両腕に感じていた「泥に隙間なくしがみつかれているような」感覚が全身に波及し、酷く窮屈な空間に押し込められてしまったように感じる。

懸命に上昇しようと足掻いたつもりが、指一本ビクリとも動かない。焦燥感に駆られてもがくほど悪循環に陥る。

ずちゆるるっ、ずっ、ずちゆるるるる！
脈打つように蠢く泥の心地は最悪で、
全身隙間なくナメクジに這いずられて
いるような、不快な粘り気とぶよつい
た感触に苛まれる。

閉じた瞳で視認することは叶わない
が、肌で感じる限り、ゼリー状のぶよ
ついた内肉に甘噛みされながら奥へ奥
へと飲まれていくようだ。

(ち、力が……ああ)

それと同時に、異形の体内に取り込
まれたことでより効率よく魔力を奪わ
れているのか。四肢末端から急速に脱
力感が広がっていった。

「んうっ……！」

ぶぢやっ！
やがて、所定の位置に着いたのだと
知らせるようにベチャリと尻の下に濡
れた触感が広がった。

いっそう湿った触れ心地のこの場所
は（魔人スライムのゼリーボディにそ
のような部位があるのか知らないが）
胃袋のようなものなかもしれない。

魔物が意図したのか、偶然か。再び
泥に絡みつかれ、M字に開脚した状態
で尻餅をつく羞恥的なポーズで固定さ
れてしまう。

(ひう！しゃ、ぶられっ……!?)

両腕は再びバンザイをした状態で固
定された。腋下をズルリ。ネットリし
た肉舌に舐めしゃぶられる傍から悪寒
が走り抜け、背がぞわつく。
くすぐったさに身を捻ったつもりが
やはりピクリともせず。術なく耐える

状況が過剰反応を誘発していた。
(ま、ただ。また……力が……)

スライムに吸着された箇所から、魔
力が吸われ、失われていく実感。特に
快楽に囚われ気を抜いた瞬間、ごっそ
りと魔力が抜け落ちていった。

このままでは脱出も叶わず、死ぬの
を待つだけだ。抗わねば、死ぬ——！
(か、感じてたまるか……足掻いて
足掻いて、生きなければ……)

今唯一できる抵抗は、快感を憶えぬ
ようにすること。

だが、異形の肉による愛撫とも悪戯
ともつかぬ行動に翻弄される度。反射
的に女体は悶え、酸素を消費する。

呼吸しようとして口を開けば、きつとそ
こから一気に泥の進入を許してしまう
だろう。

息苦しさは焦りを助長し、ただでさ
え不利な状況下。妙案は浮かばない。

結局「泥の檻」に囚われ身体的自由
を奪われた現状では、為す術なく肌か
らの魔力吸引に耐える他ない。

ずるっ！ にゆずるるるうっ！
「んぐっ！ ン！ ンン……っ！」

すでに鼻穴には、直に魔力を吸い尽
くそうと止め処なく泥が雪崩れ込んで
きていた。

(ううンンっ！ 来るなっ……私の中
に入ってくるなあアア！)

本来注がれる用途などあるはずもな
い部位から異物を混入させられる不快
感と嫌悪感。込み上げるえずき——。
それらを火種に憎悪の炎が渦を巻く。

ずぢゆりゆるるるっ！
「んぶっ、ンンン——！」

とうとう聖なる鎧の内側にまで染み
入ってきた泥どもが肌着をすべて溶か
しきり。まるで意思持つ指のように乳
房に張りついて、肌越しの魔力吸引を
開始した。

ぶぢゆっ、ぶぢゆぢゆぢゆうっ！
(ひあ！ む、胸えっ……!)

べつとりと乳房全体に広がった生温
かな泥が、防具などまるで意味を成さ
ぬと知らしめようとしているかのよう
にこそって乳房上を這い回る。

粘着質な心地に縮こまる乳房にも泥
は絡みつき、吸引を繰り返す。その都
度ジンジンと甘い痺れが伝導し、望ま
ぬまま左右両方とも勃起させられた。

(こ、こんな時にまでっ……。ぐう、
うううっ！ い、今は、脱出すること
だけを、か、考えないと……っ)

囚われ、魔力を吸い取られ、死の危
険すらある状況だというのに、あまり
に浅ましい己の身体の反応に落胆する。

「魔力をこれ以上吸われるわけにはい
かない。だから気を確かに持たないと」
「乳首をもっと、強く摘んで捻って、
捏ね潰して欲しい」

相反する感情が闘ぎあう最中にも、
魔力は吸い取られ続けていた。
拘束された肉体の代わりに唯一自由
を保持している脳ばかりが働きを強め
拒む心根を飲み込む勢いで淫靡な欲求
が攻勢を強めてくる。

結果。ますます酸素は失われ、朦朧

とぼやける意識下から明晰さが奪われ
ていった。
ずいゆ、にゆるるるンッ……！
(んふうンンっ！)

M字に開脚した両の脚。その内腿が、
ぬめる泥の波にひと撫でされた。ただ
それだけで甘く悶えた股の付け根、剥
き出しの股間から、泥のものは違う
粘り気が甘い痺れとともに染み出して
くる。

(あ……あ……なんで、わ、私……も
う、濡れっ……。あ……ひっ！)

こんな不様な状況下だというのに、
臍の奥辺りがじつとりとした熱を孕ん
でいる。悦楽に慣らされてしまった肉
体が、怨めしい。

——づぶっ！

「んう！ ツッ……！」

徐々に緩む尻穴の状況を察知したよ
うに、腰への攻撃が再開された。

尻の下が盛り上がり、勃起のように
突き出した泥の柱が双臀に押し当たる。
(んあっ！ ああ……ぐ、くうううっ
……ダメ。中に入られたら……!)

快楽に慣らされている尻穴を貫かれ
たら、きつと抵抗しきれない——。
危機感と恐怖が焦りを助長して、動
かぬ手足に力がこもる。

(ぐう！ 動け、動け動けええっ！)

が、いくら心で動いたところで、肉
体は泥の圧力と蠢きに負け、悶えるこ
としかできない。
尻の谷間に挟まるやペニスのごとく
脈打つてみせた泥勃起に対し、声に出



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>